

聚る是に於て又撫民同知一員を添設し九城の賦税(房租、地租、牲畜税、煤窰税等)錢局、工廠及び商民、綠營の命盜案件、凡そ漢人に關する地方一切の事務を管理せしめ又綏定、拱宸兩城の巡檢を設く而して回子も亦阿克蘇、烏什、葉爾羌、和闐、哈密、吐魯番の各城より漸次移住し積て六千餘戸に至る因て阿克蘇の回子有功の者を選て阿奇木伯克とし寧遠城に在て回子事務を總理せしめ其下に大小伯克數十人を置て之を管せしむ

此れ西大段に於ける伊犁將軍、參贊大臣等が施設せる所の概要にして其の東大段と異なる所は専ら漢民を用ゐずして多く回子を用ゐしに在り東よりして手を著けずして南より端を開きしに在り且つ彼は民政を主として多く住戸を移し郡縣の吏を設けしに此は主として軍政を重んじ駐防を増し邊備を固くす此れ其の相異なる所以の大端なり蓋し此の相異を致せる所以の源には地域の廣濶なる新收の土、邊備最も嚴にせざる可らざるに出づ數千里の天山北路、山あり河あり戈壁あり道路を梗塞せる者一にして足らず伊犁は所謂の四塞の地、何れの處より入るも峻嶺高嶽、行走便ならず唯々巴里坤よりすれば三千里にして遙に阿克蘇よりすれば其半より近し其間、氷嶺の險ありと雖、曾て準噶爾の孔道たり而して邊防一日も緩きを容れず此れ阿桂が道を此に取り捷徑あり急に赴きし所以にして伊犁の早く頭緒を得し所以も亦全く此に在り手を此に起して局を塔爾巴哈台に結ぶ其間、一の閑著無く下す毎に皆其要を得たり西北の邊備既に固ければ巴里坤、烏魯木齊は殆ど腹地に異ならず之を郡縣の吏に委し徐々

として開發して可なり此れ伊犁、塔爾巴哈台の經營、最も急にせざる可らざる所以にして西大段の別に一人を簡びて之に專職を授けし所以なり是に於てか清廷の新疆善後事宜に於ける佈置宜きを得たりと謂つべし

又初、伊犁に入るに一定の道口無し雍正中、使臣の往來は皆南路珠勒都斯よりし乾隆二十年の剿討は西北兩路の軍、博羅塔拉に會して伊犁に進み二十二年の剿討には成袞札布は珠勒都斯よりし兆惠は額琳哈必爾噶山よりし二十三年の洗刷には將軍は博羅布爾噶蘇よりし副將軍は賽里木淖爾よりし兩翼を張りて合圍す未だ始より一定の軍道あらざるなり而して南北兩路既に定まりて大軍未だ撤せず勢、軍台を設け之が運糧の路を開かざるを得ざる者あり是に於てか哈密より吐魯番を経て烏魯木齊に到るの台站先づ成る繼て屯田を設けて洛克倫、昌吉に及び軍台も亦隨て呼圖壁に達す然れども東大段の通道は此に止まり脈絡未だ西大段に貫通せず二十七年、阿桂が精河、庫爾喀喇烏蘇、瑪納斯三處の屯田を開くに及び始て伊犁より台站を設けて瑪納斯に至り以て東、呼圖壁の台站到接す是に於てか東西兩大段の脈絡貫通し稍々阻隔の憾無し是より人の伊犁に入る者、唯々此を正路とし復た此より前、道路の梗塞せるを知らず如し嚮きに阿桂をして烏魯木齊より進ましめば歩々地を占むるの利は或は之あらん而も運々として行くの譏は終に免かる可らず其の北路より進まずして南路より入りしは眞に機宜に適應せる者にして伊犁北山後の三處屯田を經營せしも亦缺く可らざるの要着たり



東西兩大段の佈置既に異なり施設の緩急亦隨て同からざるは自然の數なり同く是れ屯田なり而も地に肥饒なり土宜均しからず伊犁は水田に宜しく烏魯木齊は旱田に宜しく伊犁木壘は常に豐收にして巴里坤は歉收多し同く是れ東大段の内に在り而も瑪納斯は(原と西大段に屬す)稻米に宜しく烏魯木齊は雜穀に宜しく巴里坤に至りては青稞一種の外、多く收穫を得ず故に授田の制、徵糧の法、各地均一なること能はず屯田一事すら尙ほ且つ此の如し何に況や兩大段既に分れ經營各々其人を異にせるをや今又各項施設の末節に就て兩者の異同何如を觀んか牧廠、鑛廠は伊犁に在ては實に要政の一に算す故に西大段に在ては牛、羊、馬、駝四項の牧皆備り孳生、備差の兩廠を分ち一は以て其の繁滋を計り一は以て差役に供す準噶爾の滅ひしや人尙ほ將に種を絶たんとす何ぞ牲畜を問ふに暇あらん阿桂一たび伊犁に入りて先づ馬廠を立て哈薩克の馬市を開き索倫、額魯特をして經營放牧せしめ以て其の孳生を期し後廣く孳生馬匹を收め乾隆五十八年に至りて二萬八千五百六十九匹を得たり此を本馬とし毎三年に本馬三匹より孳生一匹を取る之を三年一均齊と稱す其の駝廠も亦始て伊犁に入りし歳よりして之を開き額魯特をして之を放牧せしめ漸次繁殖して二千六百六十五頭を得、此を本駝とし毎五年に本駝十頭より兒駝十頭を取る之を五年一均齊と稱す其の牛廠は二十七年に創設し漸次繁殖し一萬一千八百四十五頭を得、此を本牛として毎四年に本牛十頭より孳生牛八頭を取る之を四年一均齊と稱す其の羊廠は二十六年に創設し漸次繁殖し十四萬零六百九十五頭を得、此を本羊とし毎年、十頭より孳生羊三頭を取る此

を一年一均齊と稱す其の施設備れりと謂ふべし而るに東大段に在ては地、牧畜に宜しからず人、牧畜に馴れず牧務の振はざる自から其所なり唯、巴里坤地方稍、見る可き者あり而も亦馬、駝の兩廠のみ巴里坤の馬廠は乾隆二十六年に創設せられ安西、涼州、肅州の剩馬一千五百餘を得て孳生廠を設く此を東廠とす三十四年、其の孳生馬と塔爾巴哈台より送り來る所の者とを合せ五千餘匹を得、古城に孳生廠を設く此を西廠とす四十年に至り又木壘に孳生廠を設く此を木壘廠とす皆五年一均齊の例に照して孳生を取る其の駝廠は別處に設くる者無く唯、巴里坤に一廠あるのみ本駝四百三十餘にして亦五年一均齊の例に依る而して烏魯木齊の羊は其肉食ふ可くして其皮、裘を製す可らずと云ふ土宜に非ること知るべきなり又伊犁には銅廠あり鐵廠あり鉛廠あり其の鉛廠は開設最も早くして乾隆三十一年に在り哈什山地方に於て始て黑鉛を開採し廢員をして之を經營せしめ産鉛年々六七千斤より多きは一萬餘斤に上り之を寶伊局(伊犁の鑄錢局)に撥運し鑄錢の用に供する外、彈丸を製して惠遠城の軍庫に存貯す六十年、雅瑪圖地方に在ても亦鉛廠を開く然れども産鉛多からず其の鐵廠は三十八年、伊犁河南の索果兒地方に於て開採し阿克蘇より採鐵回子三十戸を招致して採收せしめ以て農具を鑄造す其の銅廠は四十一年、哈爾海地方に於て開採し年々出銅二三千斤より多きは五六千斤に至る後、哈什地方に於て新鑛を開き一時、每月出銅五六百斤に至る然れども嘉慶六年、銅廠を巴彥岱呼巴海地方に移せり其の興旺ならざるは推して知るべきなり唯、既に銅あり鉛あり是に於て乾隆四十年、伊犁軍伊勒圖奏請し



て伊犁に錢局を置き鑄爐二座を設て撫民同知をして管理せしめ以て紅銅八分四厘、黑鉛三分四厘八毫、點錫一厘二毫、重さ一錢二分の錢を鑄造せしむ此を寶伊局とす伊犁の兵餉は一分此錢を以て支放し年々の鑄造九百餘串より一千百餘串に上ると云ふ鑄用甚だ盛なりと謂ふ可らざるも亦國用の裨補無きに非ず煤窰あり別に官廠を設けず皆民廠にして納稅開採せる者二十四座、後來増して三十四座に及ぶ又塔爾巴哈台には産金地方あり五金廠を設く但其の何の時より開採せるを知らず姑らく之を含く而して東大段に在りては銅鉛を産せず唯、金廠あり鐵廠あり硝廠あり礮廠あり初、瑪納斯の南面一帶山中、及び庫爾喀喇烏蘇地方に於て金塊金沙を見る者あり人をして之を探查せしむるに奎屯河上游山中及び呼圖壁上游に於て金屑を得たり試みに之を淘洗せしむるに奎屯河上游に在ては三十九人を以て七日に一兩五錢八分を得、呼圖壁河上游に在ては二十五人を以て五日に六錢六分を得たり既にして土爾扈特歸順し之を庫爾喀喇烏蘇に置く是に於て採金に因り事端を生し其の遊牧に障あらんことを恐れ命して採金を停めしむ後乾隆四十七年に及び官又司金局を置き路票を發給し人をして自由に往て採收せしめ其稅を取る既にして又司金局を廢し金廠を設け州縣の吏に命して經管採收せしむ是に於て金廠大に興り一時、廻化州に七廠、金夫六百五十三人、昌吉縣に二廠、金夫四十七人、綏來縣に三廠、金夫百零四人、庫爾喀喇烏蘇に二廠、金夫四百十九人を置く然れども金夫一名、毎月の課金三分、十四廠の課金、毎月合て四十七兩零九分(即ち四百七十兩零九分)を得るに過ぎざりしと云ふ其の鐵は喀喇巴爾噶遜及び

昌吉河源に之を産す乾隆二十七年、吐魯番の鐵匠をして採收試鑄せしむるに果して用に適す因て内地の鐵匠を招きて農具を打造せしむ又烏魯木齊の城北二十里に鐵廠一處を置き兵八十人を役して之を採鍊せしむ毎月得る所の生荒鐵四千八百斤、然れども鑄質甚だ重くして鐵を得ること多からず大抵生鐵百斤に熟鐵十三斤のみ硝廠は陽巴爾噶遜に之を設け兵丁二十人を役して採鍊せしむ此鐵最も富み伊犁塔爾巴哈台に至るまで皆給を此に仰く唯、礮廠(硫黃)初一たび之を置きしも既にして其の有利に非るを察して之を廢す其の煤窰は到處に之あり伊犁に異ならず價値頗る廉にして鑪炊の用に乏しからず又瑪納斯には綠玉を産し一時、玉廠を置きしも乾隆五十四年、之を封閉禁採せり

之を要するに東大段に在りては牧産、礦産兩ながら興旺なりと謂ふ可らず勢、農産を以て重しと爲さざるを得ず是に於てか最も農務を主とし多く熟田を得るを以て先務とす故に烏魯木齊に於ては屯田兵の外、五種の戸を置きて農事に勉めしむ五種戸とは何ぞ民戸、商戸、兵戸、安插戸、遣戸是なり民戸は内地より招募せる農民若くは農民の自から塞外に赴き住戸となりて開墾を願へる者、商戸は商民の行賈に因りて塞外に赴き遂に土著して住戸となれる者、兵戸は屯田兵の子弟分戸せる者、安插戸は降人、捕虜を塞外に移して安置せる者、遣戸は罪人の發遣せられて奴となり期滿て民となり因て土著せる者なり綏來、昌吉、頭屯所、蘆草溝等の地、最も安插戸、遣戸に富めりと云ふ巴里坤に於ても亦多く遣犯(即ち罪人の發遣せられし者)を用ゐて農耕に従はしむ且つ東大段に在ては移て民戸を増して逐漸、



屯田兵を減せんことを計りし者の如し故に瑪納斯の屯田二萬九千七百三十六畝を停めて悉く之を戸屯に譲り又庫爾喀喇烏蘇、精河の屯田を半減して一半を割て民戸に歸す皆此意に外ならず此の如にして嘉慶中に至り東大段に於ては農民二萬零九百餘戸、熟田九十五萬餘畝を得たりと云ふ

西大段に在りては兵食を充裕にするも亦要政の一たらざるに非ずと雖、自から回子の在るあり農夫の足らざるを患へず邊備の周からざるを患ふ而して逃亡を防ぎ越界を防ぎ窃攘を防ぎ劫掠を防ぐ一に之を卡倫に待つ卡倫の事務は最も忽にす可らざる所たり故に西大段に在ては卡倫の設、殊に周備を見る常設あり移設あり添撤の卡倫あり既に各處の領隊大臣ありて之を專轄し又京より侍衛を派して之を管理せしむ其の用意到れりと謂ふべし今、伊犁、塔爾巴哈台兩處の卡倫を擧げて之を示さん

伊犁營務處專轄

伊犁河口卡倫 達爾達木圖卡倫

惠寧城領隊大臣所轄

沙喇布拉克卡倫 塔勒奇卡倫 干珠罕卡倫 庫庫哈瑪爾卡倫 畢齊克圖卡倫 庫々鄂囉木卡倫 鄂

博勒齊爾北達巴罕卡倫 固勒札渡口卡倫 博羅布爾噶蘇卡倫 闕里沁卡倫

錫伯營領隊大臣所轄

固爾班札海卡倫 安達拉卡倫 沙巴爾托海卡倫 托里卡倫 瑪哈沁布拉克卡倫 春稽卡倫 烏里雅

蘇圖卡倫 額木訥察罕烏蘇卡倫 輝圖察罕烏蘇卡倫 塔木哈卡倫 察罕托海卡倫 托賴圖卡倫 沙

喇托海卡倫 額哩音莫多卡倫 頭勒克卡倫 察林河口卡倫 塔木哈色沁卡倫 大橋卡倫

索倫營領隊大臣所轄

舊霍爾果斯安達拉卡倫 齊々罕安達拉卡倫 霍爾果斯卡倫 齊々罕卡倫 奎屯卡倫 博羅呼濟爾卡

倫 崆郭羅鄂倫卡倫 輝發卡倫 河岸卡倫 奎屯沁卡倫

察哈爾營領隊大臣所轄

干珠罕布拉克安達拉卡倫 烏蘭布喇卡倫 綽倫古爾卡倫 達爾達木圖卡倫 札克鄂博卡倫 哈布塔

海卡倫 音德爾圖卡倫 烏柯克卡倫 沁達蘭卡倫 索達巴罕卡倫 沖庫克卡倫 喀喇烏珠爾卡倫

阿爾圖齊哈瑪爾卡倫 木魯卡倫 沙喇布拉克卡倫 察奇爾圖呢蓋卡倫 庫々托木卡倫 察罕烏蘇卡

倫 雅瑪圖卡倫 鄂托克賽里安達拉卡倫 碩博圖卡倫

額魯特營領隊大臣所轄

特穆爾哩克卡倫 特穆爾哩克渡口卡倫 雅巴爾布拉克卡倫 鄂博圖卡倫 鄂博圖渡口卡倫 額爾格

圖卡倫 札拉圖卡倫 哈爾干圖卡倫 齊々罕圖卡倫 庫圖勒卡倫 格根卡倫 鄂爾果珠勒卡倫 哈

爾奇喇卡倫 沙喇雅斯卡倫 特克斯色沁卡倫 敦達哈布哈克卡倫 伊克哈布哈克卡倫 察々卡倫

那林哈勒噶卡倫 巴噶喀木哈卡倫 察林河渡口卡倫 察林河察罕鄂博卡倫 格根西哩克卡倫 銅廠



外卡倫 烏魯古特卡倫 那喇特卡倫 博爾柯阿滿卡倫 昌曼卡倫 綽羅圖卡倫 博托木卡倫 拜布喇克卡倫 塔爾巴特卡倫

以上は皆伊犁所屬の卡倫にして塔爾巴哈台に於ては、東西の二路に分ち東路卡倫は協辦領隊大臣之を專管し西路は專理遊牧領隊大臣之を兼管す

協理領隊大臣所轄

烏里雅蘇圖卡倫 哈瑪爾達巴罕卡倫 板廠溝卡倫 博洛呼濟爾卡倫 固爾班烏里雅蘇圖卡倫 哈達

蘇卡倫 特穆爾綽爾霍卡倫 哈喇布拉克卡倫 干濟罕莫多卡倫 喜泥烏蘇卡倫 策克德克果勒卡倫

札哈蘇渾爾卡倫 輝邁喇虎卡倫 以上夏季安設 錫伯圖卡倫 博勒濟爾卡倫 布爾噶蘇台卡倫 烏蘭布拉克

倫 俄棟果勒卡倫 烏里雅蘇圖卡倫 鄂倫布拉克卡倫 瑪琨圖噶圖勒干卡倫 以上冬季安設

專理遊牧領隊大臣所轄

巴克圖卡倫 瑪琨圖卡倫 沙喇布拉克卡倫 察罕托海卡倫 額爾格圖卡倫 巴爾魯克卡倫 莫多巴

爾魯克卡倫 阿魯沁達蘭卡倫

卡倫外は哈薩克遊牧し時に越界遊牧する者あり又冬季卡倫内に入りて冬を過す者あり毎年、各領隊大臣は春秋兩季を以て各卡倫を巡視し以て之を査閱す此れ卡倫の要務なり惜しむ可し強鄰一たび指を此間を染めしより卡倫の事、復た問ふ可らず嗚呼、前人施設の貽悞ありしに非ず後人疏虞の致せる所

なり

附 哈薩克

哈薩克の事、最も伊犁、塔爾巴哈台卡倫の事に關係あり而して後來交渉事件の起れる此より出でたり故に此に附記して其の因て來る所の顛末を明にせん

哈薩克

哈薩克も亦遊牧種族にして城邑無く耕種を知らず水草を逐て徙り夏冬定處無く伊犁、塔爾巴哈台の西北卡倫外に在り分れて三大部となり鄂圖爾玉茲、烏拉克玉茲、奇齊克玉茲と云ふ玉茲（或は玉子に作り玉蘇玉斯に作る）は蓋し部と云ふが如し又伊克準、都木達準、巴罕準と云ひ清人稱して左部（或は東部）右部（或は中部）北部（或は西部）と爲す各部に各、汗あり鄂托克ありて相統屬せず左部は鄂托克を阿爾幹と云ふ右部は奈曼と云ひ北部は吉格特（或は濟格特に作る）と云ふ左部は四十四鄂托克、東西千里、南北六百里、最も大なり蓋し伊克準なり右部三十餘鄂托克、蓋し都木達準なり北部最小、蓋し巴哈準なり東南、伊犁、塔爾巴哈台に接し西北、露國及び額齊勒の土爾扈特に接し其の右部汗は土爾其斯坦城に居る然れとも土爾其種に非ず露人之を乞爾吉思と稱す蓋し古の吉利吉思種なり本と衛喇特と偕に拜喀勒湖の西に在り漸く移りて今の地に居る左部の地は古の康國にして右部は即ち石國なり其の風俗物産、準噶爾と相似、文字相同く言語稍、異なり西に移れるに因りて漸く回風に習ひ其の大首長は仍は汗を以て稱と爲せども小首長は或は蘇勒檀、和卓を以て稱と爲す



案するに新疆識略に舒赫徳の奏文を引きて其汗近族之台吉、稱曰蘇勒坦、亦曰蘇爾統、風俗大抵與回人相以とあれども此れ當時の情形に就て云へるのみ朔方備乘に風俗物産、大略與準噶爾等、文字同、言語稱異と云へる者當れり蘇勒坦は回教徒の王號、此を以て首長を稱せるは回風に習へる後の事なり然れども大首長の汗と稱せるは猶ほ古風を守れるなり又右部の王に杭霍卓、江霍卓等の名あり霍卓は即ち和卓木、回教徒有道者の稱なり蓋し右部は最も回疆に近し故に多く回風に習へるなり然れども其種族は奇爾吉斯種にして回種に非ず或は回種と爲す者は非なり（猶ほ奇爾吉斯的事は既に云へり）

清朝乾隆以前に在ては準噶爾に隔てられ曾て聞く所無し蓋し其人尙攘、風を成し漫として約束無く頭目ありと雖、之を禁ずること能はず準噶爾も亦之に苦しみ噶爾丹策凌が時、曾て妹夫羅卜藏軍凌をして兵一萬を率て之を境上に防がしむ喇嘛達爾札が篡立するに及び達瓦齊、額密爾の昂吉に在り地、哈薩克に近し故に亂を避けて哈薩克に奔る達爾札、人をして之を哈薩克に索めしむ達瓦齊窮蹙して往く可き所無く復た舊牧に歸り遂に達爾札を殺して伊犁に據る哈薩克の右部汗阿布賚間に乗りて達瓦齊の牧を掠め遂に兵萬餘を率ゐ入りて塔勒奇嶺の東に至り擄掠して去る將軍班第等之を聞て急に進み伊犁に抵る達瓦齊、哈薩克に恨あり敢て奔り投せず烏什に奔る班第既に伊犁を得、侍衛順德訥、達永阿達を遣りて阿布賚を招撫せしむ阿布賚乙ち其臣博洛布拜をして順德訥等を隨て偕に伊犁に至らしむ適、

阿睦爾撒納叛し班第之に死し使命故を以て通せず乾隆二十一年三月（我朝曆六年、西一七五六年）阿睦爾撒納、哈薩克に奔る阿布賚之を納る清廷、將軍達爾黨阿、參贊哈達哈をして西北兩路より出で往て之を哈薩克に索めしむ阿布賚乃ち和集博爾根をして兵を以て阿睦爾撒納を守り從て努拉に赴かしめ自から千騎を領し西行して蒿哈薩拉克山の下に會す七月、達爾黨阿、大軍を統べ雅爾拉に至り和集博爾根が前隊二千餘騎と相遇ふ哈薩克、伏を山谷の中に設く達爾黨阿侍衛烏爾登をして輕騎を率て往き之を誘て谷中より出でしめ因て縱擊して之を破り五百七十餘級を斬り十一人を擒にし勝に乗りて進て努拉に至り哈薩克人楚魯克を擄にす阿睦爾撒納、服を易へて遁る而して哈達哈の軍も亦蒿哈薩拉克山の下に至り哈薩克の兵千餘騎、巴顏山よりして西行するを偵し札薩克三都布等を遣りて之を破らしめ百餘級を追斬し昭華什等を擒にし多く軍械馬匹を得たり阿布賚も亦遁れ去る時に哈達哈、阿布賚が親から兵を領せるを知らず故を以て兵を勸して追捕せず兩軍進て伊什勒に會し昭華什、魯楚克等を縱還し阿布賴に説きて阿睦爾撒納を縛送せしむ往來數月、終に要領を得ず九月、清廷、兩將に命じて軍を撤して回らしむ回れば則ち阿睦爾撒納又入りて博羅塔拉に至り亂黨を煽動し諸台吉宰桑等多く叛す二十二年、清廷、將軍兆惠、參贊富德等をして諸叛徒を剿せしむ阿睦爾撒納又哈薩克に奔る五月、富德之を追て塔爾巴哈台に至る叛黨輝特汗巴雅爾が險に伏せるを偵して之を擒にし六月、餘黨を追て愛唐蘇に至る河を踰ゆれば即ち哈薩克なり哈薩克兵二百餘、忽ち出で、道を遮る追兵僅に三十餘騎、慶戰之を破り侍衛奇徹布



之に死す然れども是時、阿布賚既に楚魯克、昭華什の言を聞き頗る傾聴の色あり尋て使をして將軍贊參に各馬一疋を致し來て款を納れしむ兆惠乃ち侍衛努三を遣り往て阿布賚に約して阿睦爾撒納を執へしむ阿睦爾撒納驚き露國に奔る阿布賚因て阿睦爾撒納の姪達什策凌及び宰桑烏巴什等を縛して軍門に至り又良馬四を奉し托忒文の表を賚し使人根扎噶喇(或は亨集噶喇に作る)等をして來り献せしむ阿布賚の弟阿比里斯も亦使二人を附して來る九月、根扎噶喇等、熱河に入朝す蓋し是より哈薩克の馬市を烏魯木齊、烏里雅蘇台に開く

案するに熱河志に六月、定邊右副將軍兆惠奏言、哈薩克阿布賚、遣使四人、進馬四匹、告稱、願率全部歸順、其弟阿比里斯附遣使二人、賚托忒字表文、投誠入覲とあり然れども兆惠が上奏は七月に在るべし兆惠傳には七月、奏擒獲巴雅爾於塔爾巴哈台及其孛、哈薩克汗阿布賚畏威歸順、表献馬匹とあり事情、七月を以て勝れりとす又阿比里斯は阿布勒必斯の誤聞なるべし朔方備乘に六月、阿布賚以兵三萬、助擒阿睦爾撒納、遣其弟阿布勒必斯爲前隊、與我兵遇、奉將軍馬一、參贊馬一、陳情請罪、願受約束とあり然れども阿布勒必斯も亦其實阿布賚が親弟にあらず新疆讖略哈薩克世次表に阿布賚が弟に阿比里斯無く右部の汗阿布勒班畢特の子に阿布勒必斯あり阿布勒必斯、阿布勒必斯は同名なり恐らく當時右部未だ全部來り服せずと雖、阿布勒必斯一人其意ありて左部の使人に附して人をして來り視せしめしならん後來、右部の服する甚だ容易なりしは蓋

し此に由らざんばあらず然るに當時未だ之を察せず何て阿布賚が弟と爲せしのみ但弟と稱して來り通せしも知る可らず

明年、清廷、額魯特散秩大臣和碩齊をして之を邊界に護送せしむ適、叛黨土爾扈特巴圖爾烏巴什、舍稜等、哈薩克に入り將に俄羅斯に奔らんとす清廷因て副都統唐喀祿を遣り和碩齊と偕に之を追はしむ舍稜、和碩齊を欺き唐喀祿を誘殺し哈薩克を蹙え遂に土爾扈特烏巴錫に投し巴圖爾烏巴什は痘を患て死す和碩齊罪を畏れて哈薩克に遁る六月、哈薩克人哈爾津、和碩齊を獲て之を軍前に献ず是歲、參贊大臣富德、叛黨哈薩克錫喇を追て右部に至る右部、方に霍罕と塔什干城を争ふ塔什干は古の石國、當時霍罕八城の一たり右部の内に在り右部の汗、之を收めんと欲す霍罕の伯克額爾德呢と河上に戰ひ勝を決せんと殆す富德、軍を駐め莽固爾岱、赫善を遣り單騎往て之を諭さしむ右部、即日命を聽き戰を息む右部も亦是より通ず

案するに朔方備乘に其部曰烏拉克玉茲、汗曰阿比里斯、其巴圖爾有三、曰吐里拜、曰輝格德爾、曰薩々克拜、阿比里斯駐塔什干城、不事事受成而已云々、初阿布賚告於順德謂曰、云々、鄂圖爾玉茲則我爲政矣、他如奇齊克玉茲、烏拉克玉茲、族兄爲政、當與偕來作中土臣、乃使其弟阿布勒必斯往、而參贊大臣富德方以兵索逆賊哈薩克錫喇、至右部云々、是時吐里拜等方與塔什干回人吐爾古、戰於河上、兩不相下、蒙固爾岱、赫善因諭以睦鄰守土之道、並宣示聖主威



德、乃大感悟、罷蠻觸之爭、於是吐里拜等、感德畏威、詣軍門納款、奉馬進表以降とある頗る諸書より詳にして取る可きに似たり然れども阿比里斯、阿布勒比斯を兩人と爲し一を右部の汗とし一を左部汗の弟とす此れ欽定諸書と大異あり且つ下文に云く西踰錫爾河、爲塔什罕、其城寄居右哈薩克部内、而別自爲部、不相統也と云へる上文の阿比里斯駐塔什罕城と云へるに合はず新疆識略は右部世次表阿布勒必斯名下に於て乾隆二十三年、參贊大臣富德率兵、追捕準噶爾餘黨、至哈薩克右部境、會其與塔什罕部構釁、云々、阿布勒必斯聽命、即日遣使入貢云々と云へり此れ命を聽きし者は阿布勒必斯なり阿布勒必斯は右部に於て別に王爵たり左部汗阿布賚と相善かりし者の如し西域水道記に塔什罕城住哈薩克西、乾隆初、霍罕伯克額爾德呢取塔什罕城、哈薩克左部汗阿布賚與右部阿布勒必斯、攻霍罕、復塔什罕城とあり此に由て之を推すに阿布勒必斯、塔什罕を争ふが爲めに左部汗に親しみ更に大國の助を得んと欲し左部汗の使人に附して名を以て清廷に通せしむ然れども此事、右部汗の關かり知る所に非ず故に二十二年には右部汗を稱せず因て或は左部汗の弟と稱せしならん二十三年、大軍其境に臨むに至りては本と其の大に欲する所、故に即日命を聽き霍罕伯克も之を聞き俄に手を斂めたるなるべし而して事の此に至れるは右部汗の知らざる所、阿布勒必斯既に清廷に歸して右部汗も亦從はざるを得ざるに至る此れ朔方備乗に事を事とせず成るを交くるのみと云へる所以か然らば朔方備乗の阿比里斯は阿布勒必斯が父右部汗阿布勒班畢特

なるべく吐里拜は阿布勒必斯に當れり吐里拜が汗以外に在りて政を專にせるは阿布勒必斯が汗以外に於て別に王爵たるに同じ恐らくは名稱の誤傳ありて事實の晦昧を致せるのみ霍罕又浩罕に作り豪罕に作り又放罕に作る其實は愛烏罕即ち今の阿富汗斯坦なり

而して北部も亦是歲五月、叛黨布庫查罕を獲て之を献す然れども極めて遠くして至る者少し其人最も寇抄を好み露國に迫近す故に露人常に兵を置いて之を防ぐ後來、土爾扈特汗烏巴錫が復歸の日、其の部人の劫掠せし額勒里、努拉里は皆此部の台吉なり

案ずるに北部(即ち西部)は乾隆四十七年以後始めて入覲せる者あり然れども此より前、曾て來通せざりしにはあらず朔方備乗に二十三年五月、哈薩克拜濟格特部落之拜布拉克巴圖魯等、獲布庫查罕云々、皆献於軍、械送京師とあり拜濟格特は新疆識略に哈薩克公卓勒齊、稟控台吉罕巴爾所屬拜吉格特之哈薩克、潛在卡倫界内游牧、偷竊牲畜一案を載す拜濟格特、拜吉格特は譯字の差のみ其實相同ければ此れ西部罕巴爾の部落なり但罕巴爾は嘉慶中の人なれば乾隆二十三年には其父薩呢雅斯若くは其祖庫楚克が時なるべし拜布拉克は世次表に見えず如何なる人なるを知らず

二十五年、左部汗阿布賚、其の叔父の子都拉特柯勒敢て徐行せず九月初三、烏里雅蘇台を發し十八日、已に十月初旬を以て熱河を至らしむ都拉特柯勒敢て徐行せず九月初三、烏里雅蘇台を發し十八日、已に波羅河屯(即ち灤平)に入れり清廷之を嘉す是歲、伊犁に始て互市を開き綉緞布疋を用て以て牛羊馬



匹に交易す明年、侍衛を遣りて來使を送還し因て烏里雅蘇台の互市を禁ず二十七年、右部汗阿布勒瑪木比特、使を遣して朝獻し并せて進逃せる額魯特の人口を送還せしむ是歲五月、烏里雅蘇台互市の禁を弛べ唯、其の私市を禁ず二十九年、塔爾巴哈台城成る（但當時雅爾在在り）市を塔爾巴哈台に開く是より烏魯木齊、烏里雅蘇台の市廢せり

案ずるに阿布勒瑪木比特は右部汗阿布勒瑪畢特なり朔方備乘に之を左部に混せしは右部汗を以て阿比里斯と爲したるに因りて誤れるなり當時哈薩克の入觀は大抵烏里雅蘇台を経て熱河に至るを例とす故に烏里雅蘇台を互市場とす而るに當時清廷の方針は外蕃貿易を境上に於て行ひ内地には之を廢するに在り故に塔爾巴哈台城を築き内地貿易を此に移せり其の露國に對するも亦然り恰克圖貿易を留めて庫倫貿易を廢せり

當時、一面、朝獻年々にして絶えずと雖、而も亦一面、越境游牧する者あり烏梁海を侵害する者あり故に入界の制頗る嚴に多く卡倫を設け商人の來ると雖、初て至れば卡倫の官兵先づ查明稟報を行ひ而して後始て放行す然れども猶ほ越境游牧する者、常に跡を絶たず且つ塞外五寒、積雪、山の如し哈薩克等卡倫内に在て冬を過さんことを願ふ者は清廷も亦之を逐ふこと能はず因て百馬に一馬を抽て祖と爲さしめ以て卡内の過冬を許し夏季、卡倫を展設するに及べば悉く之を驅りて卡外に出でしむ然れども貧戸は遠く移るに堪へず隨て逐へば隨て來り遂に常住の者あるに至る而して窃盜牲畜の案屢々起る

清廷頗に堪へず悉く之を驅逐せんと欲して能はざるなり而して乾隆三十年以後に至り陸續、塔爾巴哈台に投誠する者あり凡そ九十餘戸、別に佐領を置て之を管せしむ卡外に在りと雖、卡内の諸部落の如し

案ずるに此れ後日宰桑諾爾一帶の地を失ふ所以の一因にして西域水道記に俄儂河之東岸、哈薩公庫々岱度冬處また果莫孫河西岸、哈薩克台吉罕巴爾度冬處と云へり庫々岱は右部哈薩克王阿布勒必斯の第六子、罕巴爾は西部哈薩克台吉薩呢雅斯の第四子、俄儂河は果莫孫河は皆宰桑諾爾の東南に流れ入る河なり此れ嘉慶中の事なり而して露人も早く眼を此邊に注ぎ水道記に康熙五十九年、俄羅斯使臣伊思邁羅付言、我國之人、今於鹽池以南、宰桑淖爾之處、修「建房屋」居住と云へり鹽池は宰桑諾爾の北方、達布遜諾爾なり此に據れば露人の著手は清廷の之を得し以前に在りと謂ふべし後、土爾扈特、露國より復歸し、清廷、新土爾扈特を科布多屬の布拉干河邊に置く布拉干河は額爾濟斯の上源にして額爾濟斯河溢して宰桑諾爾となり宰桑諾爾の水溢れて鹽池の水に會し遂に露國に入る土爾扈特人既に露國人に親みあり上源下流、氣脈又通じ易く遂に相招きて密かに交易を行ふ此れ嘉慶の初、和尼邁拉呼卡倫の禁を嚴にせし所以にして額爾濟斯河の左岸は哈薩克之に居り右岸は烏梁海之に居る俱に露國を防ぐに足らず後來禍根の伏する所實に此に在り

初、哈薩克の節を屈して款を清廷に納れしや意、霍罕と相争はんとするに在るのみ而るに清廷の天山



北路を得しや唯々謹で卡倫を守る之に過冬の地を借すと雖、敢て力を借して之を助けず是に由て哈薩克既に塔什罕城を復して又之を失ひ乾隆三十二年、阿布賚、都拉特柯勒をして伊犁に至り將軍の兵二萬及び攻城大礮を借らんことを求む以て塔什罕を奪回せんと欲せしなり將軍阿桂斥けて之に應せず然れども當時清朝國勢旺盛、哈薩克敢て是を以て叛かず朝貢時に至り互市常に通じ封爵を受くる者あり頂戴を賞せらるゝ者あり而して他國も亦未だ手を其間に動かさざるなり降りて道光に至りて西勢東漸し印度已に英人の手に落ち將に北、阿富汗に及ばんとす露國、是に於て前に北部哈薩克を防ぎし所の者を轉じ漸く進て哈薩克を併せ亦將に起て阿富汗を争はんとす是時に當りて清廷、前虎後狼、國歩日に艱く復た哈薩克を問ふに暇あらざるなり而して北面の界約屢々改まり歩々退讓、敢て露人と強を争はず露人坐ながらにして膏腴の地を得、一矢の費無くして科布多、塔爾巴哈台冬設卡倫の外、悉く其有に歸す是に於てか哈薩克が祖馬過冬の地も亦露境に入れり之に繼ぐに伊犁の亂を以てして今に至りて清廷の版圖に屬する者は唯、濶濟木博特（或は濶熱木別特に作る）一部落の哈薩克あるのみ（蓋し乾隆年間投降の九十餘戸なり）

## 二 戡定以後の叛亂及び平和克復

### 上、遣犯の亂、回匪の亂

準噶爾の故地、全く清廷の版圖に歸して以來善後施設、殆ど間然する所無し準噶爾遺民ありと雖、人

々皆自新を念て復た叛亂を醸す者無し何ぞ料らん突として城に據りて叛する者あらんとは事は乾隆三十二年に起り地は昌吉に在り昌吉、綏來地方は多く遣戸を置き以て屯田を營ましむ此輩既に遣犯たり固より善良の民に非ず而るに屯官、事を慎まらず變、倉猝に起り殆ど不測に瀕せんとす幸に蓄謀深慮の發する所に非ず故を以て數日を出でずして亂輒ち定まる是歲八月中秋、屯官、酒を山坡に置く者あり偕に會して月を賞し流官遣犯の心を慰せんと欲す原と惡意ありしに非るなり既にして杯盤狼藉、男女雜坐、由來新疆の地、女子の住く者少し屯官既に酔ひ爲めに輿を引かんと欲し偏りて流人の婦をして歌はしむ流人固より怒り易し其の無禮を責め遂に激成して亂に至り屯官を殺し軍器を劫奪し因て昌吉城に據て叛す明日、飛報、烏魯木齊に達す時に烏魯木齊城中の兵僅に二百五十、然れども皆百戰之餘、意氣虹の如し叛徒を視ること蝨蟻と等し辦事大臣溫福之を率て行き洪山口に至る守備劉德が曰く今、賊衆多くして我が兵少し佚を以て勞を待つに若かずと遂に止まりて營す叛徒果して來り攻む劉德乃ち衆に令して進撃せざらしめ少間を待て進む叛徒、鎗を擧げて競ひ進む官軍動かす俄にして叛徒一人傷つく者あり色稍々動く劉德急に令して衆鎗齊く發して以て之を撃たしむ叛徒の馬皆戰陣に慣れず響を聞て奔逸し殆ど制す可からず官軍因て大呼して之に乗ず叛徒敗走す之を瑪納斯に窮追し悉く斬て以て徇ふ亂乃ち定まる流官遣犯原と兵を知らず何ぞ百戰精銳の將士に敵せん然れども不虞に備へずんば以て師す可らず少しく懲りて大に戒しむ古人の嘉する所なり爾來此事、屯官の戒となりて戎馬の聲



を聞かざりし者八十年

同治の初、粵匪未だ靖からざるに陝西回匪の亂又起る（事は第五編に詳なり）同氣相求め同聲相應じ延て天山南北兩路に及び土回蜂起し三年（我元治元年、西一八六四年）四月、庫車の回子、游匪と謀り城を焚て亂を作し五月、回疆の東四城皆陥り辦事領隊の各大臣多く之に死す烏魯木齊都統平瑞之を聞き兵を發して蘇巴什に至り賊に遇て盡く没す而して烏魯木齊も亦亂る是より前、甘肅省河州の阿渾（回教の傳導師）に妥得璘と云ふ者あり三婦人を盗み奔りて關を出て烏魯木齊に抵り提標參將索煥章の所に客たり索煥章固より回教を奉ず乃ち之に師事し妥得璘、心、索煥章が異志を蓄ふるを知り因て相結て亂を謀る提督業布冲額（或は蘇布冲額に作る）悟らず是に於て回子等、廻化城南關の禮拜寺に會し忒矛を前に列して共に議する所あり遣犯朱小貴之を偵知し密に提督に告ぐ提督、索煥章を遣りて往て調はしむ反り告て曰く之無しと朱小貴を斬て徇ふ城中大に譁し六月、妥得璘、衆回子を曠使し城に入りて大に掠めしむ業布冲額爲す所を知らず索煥章の宅に匿れ遂に藥を仰て死す時に烏魯木齊精銳の兵は既に蘇巴什に殲きて存する所の者は屯田兵數百人のみ都統平瑞、鞏寧城を守り如何ともすることを得ず昌吉縣も亦同日に變起り知縣恩錦出走し典史秦某一門盡く難に殉す而して奇台以東も亦平ならず既にして叛徒果して奇台を焚掠し古城を屠り阜康に竄す八月、阜康城も亦陥る時に恩錦、餘燼を糾合し鞏寧の糧を運轉す叛徒復た其の輜重を掠む城中糧絶ゆ九月、鞏寧も亦陥り平瑞は火に赴き護理鎮廻道伊昌阿は非

に投じ皆死す協領榮慶以下、難に殉せし者、百數十員、兵民數萬、瑪納斯の漢回も亦叛し綏來の知縣段桂齡之に死し伊犁以東、烏魯木齊以西、復た完區無し而して巴里坤の回子馬天保、將に亂に應せんとせしも遊擊何瑄、搜獲して其黨數千人を駢へ誅し城防を設け民勇を練り守備頗る嚴、城内此が爲に肅然たり時に回目馬陞、大股の匪徒を率て東下し古城戒嚴す領家大臣保恒、蒙古兵を檄調し來り援けしむ而して濟木薩も亦破れ縣丞陶珣、印を棄てて逃る是より先、伊犁猶ほ幸に亂れず是に至て遂に亂れ十月、惠寧先づ騷で惠遠之に繼ぎ匪黨千餘、關を毀て出で勢に乗て剽掠し所在の奸回皆響應して起る領家大臣他某、鈞某皆之に死し兵の死する者數千十一月、古城の漢城遂に陥り游擊以下節に殉ずる者多く唯、滿城のみ僅に存す清廷是に於て文祺に命じて烏魯木齊提督たらしめ來て西路の軍務を督せしむ文祺、文麟を奏派して奇台縣に赴き糧餉を籌せしむ奇台に兵民合て五千餘人あり文麟をして之を統帶せしめ文祺自から官兵及び纏頭回二百餘人を率る哈密より西上し巴里坤に至り適々病で死す巴里坤領隊大臣色普詩新代りて提督の印務を掌る伊犁の參贊大臣榮某、領隊大臣榮某同く鞏寧城を援け復た告車台に敗れ陣亡する者二千餘人、塔爾巴哈台の游擊米慶は回教徒なり阿渾伊瑪木と陰に亂を倡ふ參贊錫霖、領隊博爾果蘇等、誠を推して開導すれども止むること能はず四年正月、匪黨二百、官軍の不備に乗り蜂擁して城に入る錫霖之を聞き急に兵を麾いて之を拒き因て軍器を失ふこと大半、叛徒撫を受くるの説を以て進む者あり參贊領隊均しく慨然として之に赴き米慶と城外の禮拜寺に會し方に招撫



を議す窩外俄に嚙く博爾果蘇、變の作れるを察し米慶の胸を刺して之を墜し遂に錫森以下數人と悉く節に殉す時に新授の參贊大臣武隆額既に任に就きて城中に在り變を聞て俄に關を閉づ叛徒之を攻むれども下すこと能はず遂に四散して去り二道橋を殺掠し商民千餘、屠戮遺すこと無し五金廠の鑛總劉某、鄉約騰某等、廠の夫役數百人を集めて來り援け將に馳て城圍を解かんとし三工地に至る把總趙某が叛徒に遮留せらるゝに會す夫役本と紀律を知らず又軍械に乏し叛徒之を偵し道に要して阻撃す夫役皆潰ゆ是時に當りて伊犁の惠寧城既に陥り圍城の兵民、殉難せる者殆ど二萬人、領隊穆克登額之に死す而して古城の滿城も亦圍困已に久し叛徒、地雷を發し城將惠慶力を悉して拒守すれども危きこと旦夕に在り巴里坤の領隊色普詩新は原と古城の協領たり妻子、圍中に在り之を聞て心急なり滿漢の兵二百を率ゐる富家塙に至り叛徒千餘に遇て之を破り遂に留まりて營す明日、賊大に至り力戰すること五六時、鎗礮、筒皆熟し子薬も亦將に盡きなんとす文麟が練軍千五百騎、戰場を距ること僅に二十里に在れども敢て來り援けず甚だしきは壁に登りて傍觀する者あり忽にして賊の前隊、降を乞ふと大呼す滿兵之を聞て稍々懈る叛徒、隙に乗て營に入る色普詩新及び把總高官吉、佐領惠斌等皆陣亡し官兵脱する者數人に過ぎず然れども叛徒も亦斃るゝ者數千、是より巴里坤兵を畏る二月、古城遂に陥り惠慶以下死する者七千人、古城陥りし日、廻化城の勇目徐學功、團練の義勇を率て急に烏魯木齊を攻む古城の圍衆之を聞て回り救ふ時に回衆妄に名號を借する者多く馬陸、馬泰、馬仲、馬明、馬官等皆大元帥と稱

し妥得璘を尊びて清眞王と稱す（清眞二字は回教の宗旨）四月、塔爾巴哈台の鐵廠復た夫役を集め城に赴て防守す回衆私に哈薩克の衆に賄ひ助けて官軍を攻めしむ適々棍噶札拉參胡圖克圖、喇嘛僧衆及十蘇木蒙古等二千餘人を率ゐる來て塔爾巴哈台を援く叛徒、勝を恃み備を弛べ馬を下り徒歩して前む棍噶札拉參、伏を設けて靜に待ち相離るゝこと數歩に至り衆を壓て急に起り首として自から陣を斫り棍徒數人を墜す蒙古の兵繼て進み武隆額も亦城より出で、夾み攻む叛徒破れて禮拜寺に入り溝を深くし壘を高くして守る武隆額、二道橋を攻て克たず悍噶札拉參も亦屢々戰て利あらず因て移て南湖に駐す五月、伊犁の叛徒、綏定城を攻む領隊塔某、游擊沈某馳せ援く閏五月、伊犁西六城の兵、皆惠遠の大兵と合し偕に進て惠寧の回城を剿せんとし反て地窩堡に敗れ三千餘人を失ひ塔某も亦之に死す伊塔一帶、殆ど鼎沸の狀を呈せり

是より先、初古城の破れしや烏魯木齊攻めらると聞き一時、叛徒皆其の巢穴に歸る文麟、奇台に駐守し猶ほ楮柱の勢を爲す適々巴里坤の領隊訥爾濟、文麟が軍餉五萬を送り草地を過て奇台に抵る道にして叛徒に遇ふ文麟急に練勇を遣りて之を拒がしめ自から訥爾濟と偕に輜重を棄て、巴里坤に奔る是に至て奇台も亦失す戸民隨て逃るゝ者二萬人、巴里坤の官兵、城を閉て納れず文麟、戸民をして郭外に棲止せしめ羊を買て食と爲さしめ獨り騎に乗りて城に入る既にして哈密の漢城陥り巴里坤の糧道絶ゆ文麟乃ち官兵練勇を率て松樹塘に屯し將に進みて哈密を復せんとす叛徒迎へ戰ひ詐り破れて官兵を誘



ふ官兵、伏に中りて駭散し文麟も亦退走、前隊の官兵十の八を傷つく叛徒遂に長駟して巴里坤城東に逼る何瑄拒戦甚だ力む叛徒の才矛林の如し城中皆畏る獨り何瑄、衆に誓て背城の計を成し衆心始て定まる是に於て城を出で、戰ひ大に敵を破り捕獲甚だ多し鎮標千總傅國相、隊を帶て阜康の練營に赴き其の運糧を護り賊に襲はれて潰走し官兵存する者幾くも無し西路益、危し八月、巴革知縣恒順、奇台の勇目張和を率る阜康に赴き團目孔才と偕に會剿を謀る妥得璘之を聞き馬陸をして迎撃せしむ九月、恒順が兵敗れ恒順、營を棄て、走り張和、巴里坤に至り戸民の壯丁二千人を募り以て奇台を救はんことを訥爾布に請ふ時に妥得璘、烏魯木齊に在りて別に一城を築き王府を建て馬陸を升せて統兵總元帥と爲し意氣大に張る五年(我慶應二年、西一八六六年)正月、伊犁の惠遠城遂に陥り將軍明緒闔門之に殉す兵民死する者數萬、前任將軍常清も亦執へられて害に遭ふ、二月、棍噶札拉參が軍、大に疫し南湖より退て頭台に駐す武隆阿、兵を派して夜、公文を送り途にして叛徒に獲らる叛徒、因て官軍の虚實を知り遂に南湖の營を攻破す棍噶札拉參益々退て青格爾河に抵る棍叛徒に進て綏靖城を陥れ武隆額殘兵百餘を率て巷戰し手づから數人を刃して死す領隊郭勒那以下皆殉す博爾果蘇の妻子も亦兵民百餘人と同日にして害せらる額魯特の衆逃れて布隆托海に入る棍噶札拉參之を收め阿爾泰に至り科布多屬の烏梁海の地を借り暫く安插遊牧せしむる者數萬人、漢民亦逃れて到る者七八千、時に伊犁の綏定、廣仁、瞻德、塔爾奇四城、相繼て叛徒に降り唯、拱宸の一城のみ堅守して下らず四月、糧盡き亦降る是に於て伊犁全

境、復た一寸の乾淨土無く榮全、布倫托海に一城を築き僅に署理伊犁將軍の名を留むるのみ天山北路獨り巴里坤の漢城有て終に堅守して下らず而して烏魯木齊屬の漢民、叛亂ありて以來、能く團結自から保し勇を練り冠を防ぎ其の田を公種公牧し冠至れば之と戰ひ冠去れば耕農に服し團長を設けて之を總理せしめ徐學功、孔才等之が首となり以て其郷を護る

#### 下、露國の伊犁代收、清廷の立約收回

阿睦爾撒納の露國に奔りしや清庭之を索めて露官敢て匿さず舍稜の繼で遁れしや露官、約を守りて肯て受けず而して土爾扈特の大衆を率て復歸せしや清廷、理藩院をして一片紙を以て薩那特衙門に行文せしめしのみ今の露國を以てすれば決して此の如くにして止むの理無し而も當時終に異論を聞かざりし者は何ぞや蓋し當時の露國は未だ今日の露國の若きに非ずして清廷も亦今日の清廷の比に非りしを以ての故のみ降て道光の末に至りて鴉片の禁一跌して清廷の尤大無能、暴露して殆ど餘蘊無し是に於てか前日、舌を咋み牙を鳴らせる者四方膺至し洋氣日に熾にして外患日に迫り咸豐八年の春(我安政五年、西一八五八年)に至り四國聯盟、海道より直に天津を衝く露、其一に居る既にして英佛兩國の兵船、大沽を陥れしも露と米とは傍觀して與からず人皆之を怪しむ何ぞ料らん露は前門より戰を挑み後門より款を議せんとは是時に當りて太沽守を失て京城戒嚴す清廷、露の聯盟内に在るを懼れ陰に黑龍江將軍奕山をして露官と和約を訂せしめ以て之を問す初、清廷の尼布楚界約を定めしや大體、黑龍江を以て兩國交界



を定むと雖、猶ほ雅克薩を收め以て清廷の管屬と爲す是に至りて全く江北を棄て、露に歸し新に烏蘇里江北の地を約して兩國共管の域と爲し又松花江行船の權を以て獨り之を露に許す是に於て露人の前に取らんと欲して敢てせざりし者必しも迫りて取らず他日取らんと欲して未だ得ざる者、躍然跳りて將に其手に入らんとす露の得意想ふべきなり十年（我萬元年、四一八六〇年）聯盟軍の再び至りしや津門失陥し鑿與俄に熱河に幸し海澱守らず開明園、一炬して焦土となりぬ露又與からず清廷之を德とす是に於てか北京條約十五條を立て其の第一條に明記して烏蘇里江北共管の地を讓りて之を露の專管に歸す露人、一矢一兵の損無くして烏蘇里江、興凱湖の東北、大約東西二千六百里、南北四千六百里の新版圖を得たり但に此の如きのみならず是より前、奇爾吉斯既に露國に歸して其の境界、科布多、塔爾巴哈台と相接し分界清からず乃ち又其の第二條に於て其の分界を定め常駐卡倫の在る所を以て境界と爲すことを許す露人の所謂奇爾吉斯は清人の所謂哈薩克なり哈薩克、冬季の寒に耐へず常に來りて清廷の卡倫内の放牧す哈薩克原と清廷羈縻の國たり故に清廷甚だ咎めず故を以て或は長年去らざる者あり此れ露國の因て以て利と爲す所なり北方互寒、卡倫常設に難じ故を以て夏季安設の卡倫あり冬季安設の卡倫あり後日分界を論ずるに至り露人遂に冬季安設の卡倫を以て常設の地と爲し分界大臣之を争へども得ず遂に宰桑諾爾一帶膏腴の地を割て之に歸す而して露の境域、伊犁、塔爾巴哈台兩城を去る近き者は數十里、遠き者も亦百里に過ぎず伊犁兩城既に露國の境界に接し露人歩々此の兩城に逼り來る縱

令ひ回匪の亂無からしむるも萬、永く事無きを保し難し何に況や亂離糾紛、將軍參贊は何の處に在るを知らず清廷の政令は伊犁兩城に及ばざるをや露人豈に坐ながら此の機會を視て漫然爲すこと無き者ならんや果然是に於て伊犁代收の舉あり

露人伊犁に據る

同治十年の春（我明治四年、四一八七一年）露人、馬を盗みて伊犁に逃れし者あり（哈薩克人なるべし當時既に露籍に入る故に露人と稱するのみ）從て之を索回せんとす時に纏頭回子（下編に詳なり）伊犁を陥れて之に據り匿して出さず露人乃ち兵を遣りて纏頭回子と戦ひ利あらずして去る五月、露人、兵を増して再び來り大に戰て之を敗り拱宸城を取り瞻德城を陥れ遂に綏定、惠遠二城を抜く回子支へず各城靡然として皆下る露人乃ち兵六百を伊犁に駐めて之に據り聲言して云く清廷の爲めに伊犁を代收すと電音傳へて北京に至る聞く者愕然たり既にして又將に烏魯木齊を代收せんとすと傳ふ清廷之を聞き以爲らく露人更に廻化を收めば措辦益々難からんと急に景廉に命じて烏魯木齊都統と爲し進て巴里坤に駐し速に恢復を計らしむ露人果して纏頭回子を糾集し綏來に赴き交易すと稱し駱駝羊馬數千を驅り洋貨銀鈔を載せ行て石河に抵る綏來を距ること僅に八十里、徐學功、馬隊を率て之を遮り十餘人を斬り其餘を縱還し盡く其の羊馬駱駝等の物を鹵獲す露人はより復た敢て烏魯木齊を窺はず明年、景廉、師を率て古城に抵り學功を調して綏來の沙山に至らしめ西路の賊勢を面詢し其部下三千餘人を集め屯田を開かしめ専ら且つ戦ひ且つ耕すの策を建て以て漸く恢復を圖る而して文麟も亦團目孔才を招き古城に赴き城



堡を修め屯田を興さしむ孔才乃ち學功が散勇二千餘人を收め以て耕戰の事に従ふ是に於て兵食稍々裕なるを得たるも竟に進戰の氣に乏し既にして關内の甘回既に平て巨魁白彥虎遁れて瑪納斯に竄し烏魯木齊の叛徒と連絡し分出して各處を騷擾す清廷、景廉を以て欽差大臣と爲し新疆の軍務を督辦せしめ諸將に命じ關を出で、剿討せしむ而して陝甘總督左宗棠、之が軍餉を接濟す既にして又左宗棠の議に依り金順をして景廉に代りて欽差大臣たらしむ是より官軍、手を得て五年にして遂に南北兩路を平定す而して露人猶ほ伊犁に據り白彥虎、露國に奔り清廷之を索むれとも復た應せず

是より前、榮全、署理伊犁將軍を以て塔爾巴哈台に在り露官、阿雅古斯に會して共に伊犁の交還を議せんことを求む時に南北兩路未だ平ならず榮全、其の要挾の意あるを察し謝して往かず光緒四年(我明治十一年、西一八七八年)全境既に戡定に就く伊犁の露軍未だ撤退せず金順時に烏魯木齊都統たり提督殷華廷を遣り伊犁の露官に就き以て交還を求めしむ露官の曰く此事重大、我敢て損に議せず應に土爾其斯坦總督に咨商し更に定議を行ふべしと既にして回報あり此事須らく貴上司より我が駐京公使に商議せらるべしと是歲九月、清廷、吏部侍郎崇厚をして全權大臣として出で、露京に使し伊犁交還の事を商議せしむ露廷甚だ拒まず唯、其の通商、分界の利及び代收代守の費を得んことを求む清廷、初聞て未だ其の底細を悉せず稍々之を危ぶむ既にして又露官の來文を得るに云く露商、前に石河に赴き貴國官吏の阻する所となり近ごろ又喀什噶爾に在て居留の露民三百餘戸悉く驅逐に遇ふ請ふ約に依りて速に邊禁を

弛べよと時に和約未だ成らず依るべきの文無し清廷益々之を危くむ蓋し清前廷に未だ曾て駐俄公使を派せず崇厚は實に其の第一次の公使たり未だ交渉の事に慣れず以爲らく我既に全權大臣たり復た必しも本國の制を受けず一々示を請はずして可なりと故を以て電音久しく至らず商議情形知る可らざるなり清廷の議に以爲らく商議各條、利害相權りて得失を償はずんば自から宜く別に辦法を籌すべしと崇厚及び左宗棠、金順、錫倫等に命じて籌異議奏せしむ六年(我明治十三年、西一八八〇年)八月に至り電音俄に露都より北京に至る是に於て清廷始て和約十八條の全文を得たり且つ云ふ八月八日を以て將に黒海に赴き異押せんとすと清廷の議論、洶々沸騰す然れとも時既に晚れたり畫押終に阻す可らず蓋し和約の要は伊犁の西境南境、帖克斯河(即ち特克斯河)以南の地を割て以て露領に歸し并に科布多、塔爾巴哈台兩屬交界不妥の處を改め及び巴里坤、烏魯木齊、古城、嘉峪關等七處に領事を置き天山南北兩路の露商貿易は均しく納稅せず張家口、嘉峪關を経て天津、漢口に赴き途次通州、西安、漢中を過ぎて貿易を行ふことを許し松花江に輪船の用を駛走することを許し又伊犁代守の兵費五百萬盧布を賠償し以て伊犁を收回するに在り然れとも兵費五百萬は多しと雖、必しも争はず伊犁の南境を割て南北兩路を阻隔し伊犁をして孤立の狀あらしむる者、殊に辯難の衝たり而して許多の利權を讓れる者、亦衆人の意に滿たず一時當然、皆崇厚か容易に畫諾せるを咎め激せる者は或は崇厚を斬て批准を拒むべしと謂ふに至る然れとも崇厚か露都に赴きしより已に二年を経たり商議必しも然く容易なりしに非ず口舌の勞、



幾何なりしを知らず唯々其の收回の功を急にし獨り美名を擅にせんと欲す大事に係ると雖、復た訓示を請はず古義に泥みて專決を行ひ以て國論の鼎沸を致す崇厚が不用意の責、亦決して辭す可らざるなり

七年正月、崇厚、露都より至る清廷乃ち其の專擅の罪を鳴らし革職拿問、將に置くに重辟を以てせんとす唯々其の露國の體面に碍あり再議を求むるに妨あるを以て後、其罪を宥して問はず時に曾國藩の子紀澤、出使英法大臣たり英京に駐す清廷、肯て原約を批准せず二月、曾紀澤に命し露京に赴き露廷に就て再議を求めしむ是より先露國、清廷の崇厚を誅して批准を拒まんと欲するを聞き急に邊備を増し兵船を派し東洋海面に游弋せしめ以て其の反省を促さんとす是に至りて清廷も亦一面、曾紀澤に命して再議を求めしめ一面、左宗棠に命して西北南路の邊防を籌畫せしむ宗棠乃ち三路に分ちて軍を進む東路は精河地方よりし其衆一萬二千、伊犁將軍金順之に主たり必しも深入を以て功と爲さず以て其の逃竄を防がしめ中路は阿克蘇より特克斯河に向て發し其衆五千、廣東提督張曜之に主たり皖軍千人、湘軍二千五百人を以て助と爲し直に伊犁を衝きて其の後路を斷たしむ西路は烏什より布魯特の游牧を経て進み其衆萬餘、劉錦棠之に主たり以て伊犁の背後に出で援兵の來路を塞がんとす而して譚上連か歩兵二千餘をして喀什喀爾に屯せしめ陶鼎金、王福田が兵二千餘をして哈密に屯せしめ以て後路の聲援たらしむ時に塔爾巴哈台の兵、未だ卑弱なるを免れず因て徐學功、孔才等か舊部の勇二千を募て以

曾紀澤

左宗棠

曾國全  
李鴻章

て參贊大臣錫倫が軍に増す四月、部署既に定まり宗棠、肅州を發し五月、哈密に抵る而して曾紀澤は六月を以て英京より露京に入る是時に當りて中外喧傳す露艦二十三隻、黑海を出て阿非利加を繞り將に清國洋面に至り遼東の海口を封鎖せんと天津、奉天、山東各地皆戒嚴し山西の巡撫曾國荃は京東の軍務を督辦して山海關に駐し直隸總督李鴻章は天津海防を整飭し危機實に一髮の間に懸れり然れとも曾紀澤の露廷に向て請ふ所は辭介頗る巧に敢て復た原約を破棄せんと稱せず只々言ふ本國大皇帝の特に本大臣を派して貴國に求めしむる所は約内行ひ難きの處あり詳細商議せしむるに過ぎず凡そ貴國に損ある所の者、貴國固より應允すること能はずと雖、貴國に利あらざる所の者は亦貴國の商量に聽くと露廷豈に遽に之に應ずる者ならんや忽ち聞く露帝將に暑を黑海に避け外務大臣格爾斯も亦扈從し去らんとすと紀澤乃ち往て格爾斯を訪ひ之に告て曰く敵國の意三あり原約、敵國に於て甚だ相宜しからず應允に難き者あり此れ一、約内言明、詳ならざる所あり恐くは後日照辦に難からん故に詳細を加へんとす此れ二、舊約に准す所の利益は必しも再たひ新約に列舉せずして可なり此れ三、敵國此の三意あり故に本大臣をして來り請はしむ請ふ所、六條に分て之説かん第一、敵國、自己の土地を以て他國に讓與することを願はず貴國已に伊犁を交還するの美意あり請ふ全境を以て交還せられよ第二、伊犁、塔爾巴哈台の交界は舊に照して定立し其の實際少許の酌改すべき者は兩國より更に大員を特派して査勘面訂せしめん第三、嘉峪關の通商及び尼布楚、科布多兩條の道路を開きて行走せしむる等の事は第



一條議定の後に於て敵國も亦應允を拒まじ第四、貴國より領事を置く處太多し貴國も亦必しも議定の地に於て將來悉く領事を置かじ若かず嘉峪關に一員を設くる外に通商開辦の後を待ちて再び酌議を行はんに第五、領事を置くの地、未だ定まらず哈密、古城、巴里坤等處の内、貴國一處を擇びて貨物を貯積し張家口の状況と同一に辦理し嘉峪關を以て天津と同一に辦理せん第六、新疆の貿易は邊地境と異なり若し隨處皆免税せば殊に敵國に損あるを覺ゆ尙ほ貴國と商量して辦理せんと格爾斯曰く此の如くんば是れ原約を以て悉く駁斥を行ふ者、貴大臣の言、太だ我が意に満たずと遂に露帝に隨ひ黒海に向ひ去る

露廷の議に以爲らく欽差大臣の約せし所、清廷當に批准を行はざるのみならず、又之に重罪を擬せんとす縱令ひ再び商訂を加ふるも批難の人復た出でば清廷更に翻悔すること有んも亦知る可らず若かず駐清公使をして直に清廷に就て商議せしめんにはと時に駐清公使布策、前年以來和約の商議に參し猶ほ留りて露都に在り乃ち之を促して發程せしむ紀澤之を聞き急に露の外務衙門に赴き次官熱梅尼に問て曰く布大人現に行て何の地に至れる熱梅尼曰く現に瑞士に在り數日の後、家屬を安頓し將に急に貴國に向はんとすと紀澤曰く先日、格大人の照會に接するに云ふ最要緊なる者四件、一、伊犁の居民を赦免する件、二、伊犁代守の兵費を償還する件、三、露籍に入れる伊犁住民を遷して安置すべき土地の件、四、兩國邊界を改定する件、以上四件、未だ貴大臣の著實談を聞かず故に此に在りて和を議

すること能はずと然れども貴國如し我と商議するの意あらば我豈に商議の權無からんや熱梅尼曰く敵國、貴爵と商議するを欲せざるに非ずと雖、貴國の公法に照して辦理せざるを何如にせん故に北京に赴きて商議せしめざることを得ず紀澤曰く誠に貴説の如き者あり然れども本國、實に未だ萬國公法に習はず且つ崇厚は本大臣と相同からず原と専ら伊犁の交還を議するが爲めにして來る而るに自から以爲らく已れ全權たり便宜に專決にして可なりと吩咐以外の事に係ると雖、一も奏請する所無くして應允し復た敵國朝廷の意何如を問はず此れ人言の大に起れる所以にして本大臣は則ち然らず敵國の本大臣に吩咐せる所、前の全權大臣に比すれば更に切實を加へたり故に復た前の覆轍を蹈むを致さず今貴國若し本大臣と商議するに意あらば全く原議の如くなること能はずと雖、讓るべき處あらば本大臣必ず酌量して相讓らん熱梅尼曰く然りと雖、我知らず北京に於てすると此に於てすると孰れか便ならん尙ほ計較を要す紀澤曰く北京に於てせんは此に於てするの速なるに若かず儘、要緊事ありて貴國、敵邦の通融辦理を求むる者は本大臣即時發電して訓示を求めん回音唯々十餘日間の事のみ（當時電線は上海にのみ通じ上海より陸路遞送して北京に至れる者なり）若し本大臣此に在て應允すること能はざる所の者は北京に在ても亦應允すること能はざるの事に屬す且つ布大夫起程の日少しく遅延せば敵國に到る日は恐くは封河（白河結氷）の後に在らん其の久しく上海に在りて空しく日子を費さんよりは折回して此に在りて本大臣と商議するの便なるに若かず總て請ふ貴官の婉轉して貴國大皇帝に奏請



し布大人に命じて暫く發程を緩め本大臣と商議せられんことを熱梅尼曰く本國深く貴國と和平の商議を願ふ本日貴爵説く所の事は本官即ち本國大皇帝に電奏せんと既にして數日、露廷、布策を召還し格爾斯も亦知照を致して曰く本國大皇帝、清國の原約允准を強ひずと然れども猶ほ紀澤が全權の有無を疑ひ布策をして來て紀澤に問はしむ紀澤曰く我、朝命を奉して貴國に來る一は通好の爲めにし一は原約を商改するが爲めにす敵國固より本大臣に商議の全權を授く唯、貴國の甚だ相信せられざるが如きに因て近日既に電奏して旨を請へり奉到の訓諭は皆電報を用る字據は未だ至らず貴大臣如し疑ふ所あらば直に貴國の代理公使に電問せられよ即ち之を知ることを得ん敵國の再び批准を阻せんことを懼るゝに至ては實に杞憂に屬す請ふ貴國の放心せられんことを是に於て清廷は三箇月を期して議了せしめんことを求め露國は應ずるに一月内を限るを以てす時に格爾斯未だ歸らず布策専ら折衝の任に當る紀澤乃ち布策に告て曰く伊犁居民宥赦の件は必定允許せん代守兵費及び補恤銀も亦敵國、原議に照して允許せん唯、既に貴國籍に歸併せし人民に敵國より安置の地を給せんことは事、成例の據るべき無し且つ本國大皇帝の前年、崇大臣に吩咐せし所も本年、本大臣に吩咐せし所も均しく貴國の伊犁全境を以て敵國に交還せんことを請ふに在り而るに前日格大人の照會に接するに云く貴國、地を割て遷民を安置するを肯はず故に公使をして北京に赴きて商議せしめざるを得ずと又貴大臣の本大臣に語る所に云く敵國大皇帝より斷じて照准し難きことは必ず須らく貴國より通融辦理すべしと夫れ通商の

事は敵國始より多く駁する所無し然らば則ち貴國大皇帝の斷じて照准し難しと爲す所の者、自から知るべきのみ然れども割地は敵國の願ふ所に非ず唯、兩國の交誼を保全するを欲するより起見すれば亦必しも通融して特に允許を行ふを妨げず但貴國も亦大國なり必ず割地を要する所以の者は此の少許の地を食るが爲めに非じ固より遷民を置くが爲めにせん敵國も亦大國なり割地を願はざる所以の者は此の少許の地を惜むに非ず亦其の險要に係り之を失はば或は別國の覬覦を開かんことを恐るゝが故のみ且つや敵國既に伊犁居民の罪を宥赦せば遷出の民ありと雖、想ふに必ず多からし貴國若し果して遷民の爲めにして土地を要せば何ぞ必しも險要地方を取りて敵國をして多く不便を受けしむることを要せんや故に今、敵國伊犁西邊の地を以て修界の時に於て若干里を酌讓して貴國に歸與し以て遷民を置くに便にせん此れ實に敵國大皇帝の全國臣民の輿論をも顧みずして格外に通融する所に屬す伊犁の南境帖克斯一帶地方に至ては敵國最緊要の地、凡そ敵國君臣皆以爲らく此の地方を割かば伊犁を收回すと雖、名ありて殆ど其實無しと故に勢、貴國に退讓し難しと（此他の條項は本篇に大關係無ければ今之を略す）然れども既に原約の許す所たり露國に於ては既得の權なり故に亦遂に拋棄せず必ず之が補償を得んと欲す故を以て一月期滿つれとも議未だ結ばず唯、露國も亦始より此の一月内に結了せんことを期せんに非ず殊に清國全權の意思強弱何如を試みしに在りしのみ而るに紀澤立意變せずして曰く必ず補償を求めんと欲せば伊犁交還の事は請ふ緩議に従はんと是時に當りて露國も轉國の機漸く熟し遂



に展限すること兩個月、補償を要せずして伊犁の南境を交還することを許し唯、原約をば舊に照して批准し別に專條を設け露國の商改を允許せし者を以て悉く之を專條に載せんことを求む初、露國、伊犁を代守すること八年、其の兵費及び補恤の銀、合て五百萬盧布、原約既に之が償還を許し清廷駁斥する所無し而るに清廷原約を批准せず露國此が爲めに軍艦を派遣し兵備を増設す是に因りて其費又加はる是に於て更に兵費四百萬盧布を添へんことを求む紀澤曰く兵費一事、名目正しからず敵國豈に兵を畏るゝ者ならんや如し代守の費を増せんことを求められば猶ほ商議に難からず必ず公費の名を以てせんとならば敵國決して應允すること能はずと既にして露帝、黒海より還り格爾斯も亦從て歸る時に商議已に頭緒あり大要已に定まり争ふ所は小節目に過ぎず露國既に伊犁の南境を交還することを許す而るに其内三莊ありて既に露國の村莊たり乃ち又之を得んことを求め兵費の名の若きは必しも争ふ所に非ず紀澤、地を指し界を定むることを避け皆之を分界大臣の勘定に歸す兩國已に互讓を經、復た大出入あらず然れども清國全權は一々之を訓示に待たざることを得ず時恰も封河の後に際し電音の往復猶ほ一月を要す故に二月期満ちしも猶ほ決すること能はず因て又展限して逐條商議するに原約殆ど完膚無し露の全權大臣曰く今原約各條、多くは商改に従ひ留むる所幾くも無し此の商改殆ど全き者無き約を存せんよりは若かず現に改むる所の各條を取て別に新約を訂せんには此の如くならば我が兩國此約に因て生ぜし所の嫌隙、一掃して痕跡を留めざることを得んと紀澤曰く幸甚し露國全權大臣曰く

和約成る

然りと雖、此事、必ず奏准を要すと遂に露帝に奏して原約を廢し新約を立て別に通商章程を定め明年正月に至り事全く定まる蓋し原約を廢棄するは清國總理衙門の本意、而も全權の口を開くに憚りし所、一朝、露の全權より之を發す故に事順にして容易に成れり  
是に於て和約二十條、專條一件、陸路通商章程十七條、卡倫單一件、光緒八年正月(我明治十五年 西一八八二年)二十五日を以て兩國全權、露都に於て畫押し清廷も亦批准を行ひ伊犁將軍に命じて交收の事を督辦せしめ參贊大臣錫倫をして特派大臣を以て伊犁に赴き土地を收回せしむ露國、錫倫が前に塔爾巴哈台に在りて叛徒を殺せるを鳴らし之を拒まんとするの色あり清廷、參贊大臣升泰を改派し同年秋、遂に伊犁に赴き露國の官吏と約に照して應辦の事を辦理し九年春、金順始めて伊犁に入り露官に交代し舊に依りて駐防す此約や伊犁の南境、露國より收回せし者、原約に照せば大約廣さ二百餘里、長さ六百里を増し賠償は原約より四百萬盧布を増し伊犁の西境、霍爾果斯河以西の地は永く割て露領に歸す而して後日分界大臣、露國の分界官吏と議定分界の日、清廷の分界大臣、少しく意を經ず得て又失ひし者ありと云ふ  
伊犁已に收回を經、然れども大亂の餘、人烟稀疏、田園荒蕪、復た従前の例に依て事を辦ずること能はず改張善後の策亦隨て起らざるを得ず  
案するに朔化州屬、亂前亂後の戸數多少の比較左の如し



| 區分  | 亂前戸數    | 亂後戸數  | 區分     | 亂前戸數    | 亂後戸數  |
|-----|---------|-------|--------|---------|-------|
| 迪化州 | 四千三百餘   | 三千六百餘 | 濟木薩    | 二千八百餘   | 三百五十餘 |
| 昌吉縣 | 三千九百餘   | 四百數十  | 呼圖壁    | 千七百三十二餘 | 二百八十餘 |
| 阜康縣 | 三千零九十餘  | 二百十餘  | 庫爾喀喇烏蘇 | 八十      | 未詳    |
| 綏來縣 | 三千七百餘   | 八百五十餘 | 精河     | 四十餘     | 未詳    |
| 奇台縣 | 四千三百六十餘 | 五百七十餘 | 共計     | 二萬四千餘   | 六千三百許 |

巴里坤、伊犁は未詳なるも巴里坤は減損少かるべく伊犁は減損最も多かるべく結局迪化州其の中間に在れば平準を得るに近かるべし是に由て推せば大約四分一に減じたる者の如し

是に於て大に従前の制度を改め新疆を以て一行省と爲し甘肅新疆省と稱し都統を廢して巡撫を置き迪化、鞏寧二城を合築して一と爲し以て省城に充て天山南北兩路を總轄せしめ仍ほ西大段を留めて將軍の管轄と爲し従前の烏魯木齊、巴里坤、古城の駐防滿兵を以て悉く伊犁に歸併し之に易ふるに綠營兵を以てし領隊大臣を廢し烏魯木齊に撫標を設け提標を喀什噶爾に移し新に布政使を置き鎮迪道に按察使銜を授け以て新疆全境の刑名を管せしめ迪化州を升て迪化府と爲し同城に迪化縣を置き昌吉、綏來、阜康、奇台の四縣、舊に依て迪化府に隸し奇台縣を古城に移し(後、奇台を舊に復し古城に孚遠縣を

設く)又伊犁將軍の下には參贊二人、副都統二人を置き各一人を塔爾巴哈台に分駐せしめ將軍は惠遠城を修理して之に治し理事同知隨て同城に在りて仍ほ旗務を辦理し別に伊塔分巡兵備道を置いて伊犁府及び塔爾巴哈台、精河、庫爾喀喇烏蘇三廳を管理せしめ綏定城は西六城の要隘なるを以て伊犁府を置き同城に綏定縣を設け廣仁、瞻德、拱宸、塔勒奇の四城之に隸し寧遠城は東三城の要隘なるを以て寧遠縣を置き伊犁府に屬せしめ惠遠、熙春の兩城之に隸し伊塔兵備道を此に駐せしめ其の拱宸は最も露境に緊接せるを以て特に分防通判を置いて之を管せしむ此を善後事宜の概要とす(但南路に關する者は第五編に詳なり)而して其の劃策は多く當時の巡撫劉錦棠の力に出づと云ふ

### 第二十三章 青海及び西套の額魯特

#### 一 青海の額魯特

青海は古に於て西羌の地たり秦漢の際、匈奴盛強にして烏孫、月氏諸戎を逐ひ其の疆域直に西羌と相隣す漢其の互に臂助を爲さんことを懼れ力を悉くして匈奴を伐ち張掖、武威、酒泉、敦煌の河西四部を置き以て其間を阻隔し相通ずることを得ざらしむ然れども唯々之をして相通せざらしめしのみ未だ能く之を服せるに非るなり王莽が時に至り始めて西海郡を羌中に置きたりと雖、徒に名を好みしのみ亦直に其地を有せしに非るなり漢魏の際には大抵附く所無し永嘉の亂に五胡侵入し中原麻の如し是に於



ト烟帖木  
兒

て西海遂に吐谷渾の據となり唐の龍朔中、更に吐蕃に陥り其後永く西藏に服屬し四大部の一たり(衛藏、喀木、青海を西藏の四大部とす)元の時、曲先答林元帥府を置き其の末造に及び宗室ト烟帖木兒を寧王と爲して之を鎮せしむ明の洪武の初、之を招諭すト烟帖木兒乃ち使を遣はして朝貢す太祖喜びト烟帖木兒を封して安定王と爲し安定、阿端、曲先、罕東の四衛を置き皆部人を以て指揮と爲し之を西寧を隸す四衛皆青海を環りて之を設く罕東は其の西北三百餘里に在り曲先は西北三百里、安定は西南三百餘里、阿端は南四百八十里、四衛の外は番人之に居る蓋し西羌し遺類なり正徳中、韃靼の亦不喇(蒙古源流の伊巫哩大師)其主小王子(即ち達延汗)と相攻めて勝たず鄂爾多斯の衆を率て西、哈密に奔り既にして青海の富饒なるを知り襲て之に據る四衛是より廢し其人分散遠く従り留まる者は其の役屬する所となる其後韃靼のト兒孩又内難を避け奔て之に依る是より甘肅西寧屢々邊患を受く明人之を稱して海夷と云ひ又海寇と云ふ亦不喇、青海に據ること二十餘年、嘉靖中、小王子の孫吉囊、五萬騎を率ゐ突として河套より皮囊を以て河を渡り西、亦不喇、ト兒孩の營を襲ひ大に掠めて去る是より亦不喇其衆の大半を失ひト兒孩僅に衆を斂めて自から保つ西寧此が爲めに休息を得しこと數年、既にして古囊の弟俺答も亦青海の富を羨み併て之を有せんと欲し(吉囊、俺答の事は既に第二編に詳なり)其子賓兔、丙兔等數萬の衆を領して往き遂に奪て之を取り其の師を還すや二子を留めて其地を守らしむ二子皆傑鷙にして松山、西寧に據り邊患又起る

ト兒孩

案するに俺答の二子賓兔、丙兔、諸書殆と参照すべき者無し蒙古源流は鄂爾多斯の家系に詳なれども阿勒坦(即ち俺答)が子孫は大抵録する所無し故に多く知らず但秦邊紀略の注に賓兔を潰兔亦に作る或は別に據る所あるべし然れども今殆と考ふべき者無し

然れども是時に當りて西藏に活佛あり索諾木札木蘇(即ち鎮南堅錯)と云ふ其名、諸法王の上に在り實に第三輩の達賴喇嘛たり帕克思巴以來、蒙古最も喇嘛を尊信す俺答、青海を取りて其地、西藏に近く年も亦已に老いたり因て西天佛子を渴仰し漸く兵禍を厭ひ明朝の封を受け二子を約束して侵掠を得ざらしむ丙兔等乃ち寺を海南に建て久居の計を爲し寺額を明朝に請ふ廷議之を難かる穆宗殊に許して之に仰華寺の額を與へ萬曆二年、又市を甘肅、莊浪の二所に開く其後、俺答、道を甘肅に假り活佛を西藏より迎ふ活佛至り重く殺生を戒しめ俺答に勸めて東歸せしむ俺答東歸して其の子姪切盡、火落赤永邵卜の徒、仍ほ多く留りて青海に在り

西天佛子

案するに此れ明史及び通鑑輯覽諸書、記する所の概要なり今之を蒙古源流に参照するに頗る此間の消息を窺ふに足る者あり而して切盡、火落赤、永邵卜の名、最も考證を要す源流には固より此等の名無し然れども之を考證し得ば當時の状況に於て思、半に過ぐる者あらん故に今少しく之を説かん切盡は明史西番諸衛傳に有「切盡台吉者、河套會吉能從子、俺答從孫也」とありて通鑑輯覽は切盡を徹辰に改む而して源流諸廷達喇濟農(即ち吉能)の弟諾木塔爾尼郭幹台吉の子に庫圖克台徹辰鴻台吉



あり蒙古人、徹辰を以て稱せらるゝ者多し獨り此人のみならず徹辰は原と聰明の義、其人、衆に勝れたる者は多く徹辰を以て稱せらる唯、此人殊に阿勒坦を輔けて汗業を成さしめ其の子孫世々汗の執政たり且つ活佛を迎ふるに於て最も其力を見る故に蒙古之を徹辰台吉と稱し其名最も著はれしのみ源流卷六の末段以下、此族と汗との事を詳述せり今其文を約略摘録して之を證明せん云く其庫圖克圖徹辰洪台吉（庫圖克台徹辰鴻台吉と譯文の差のみ）庚子年生、歲次壬戌、年二十三歲、行兵四衛喇特、于額爾濟斯、征剿土爾扈特、擊殺喀喇博羅羅監云々、歲次丙寅、年二十七歲、行兵四伯特云々、於是收服三部落圖伯特、帶領巴克實喇嘛阿斯多克、賽音班第阿斯多克、幹齊爾托密桑噶斯巴等三人、至蒙古地方云々と圖伯特は即ち西藏なり此れ後日阿勒坦か第三輩達賴を迎へし所以の起因にして丙寅年は嘉靖四十五年に當る又云く至二十七歲（源流此處、文理錯雜せり然れども余は前後を考へ合せて徹辰台吉の事に係るを知る）經見其叔（實は叔祖）阿勒坦汗、諫云、從前失陷城池、與中國人結讎、以致出亡夫統、今汗壽已高、漸至於老、事之有益於今生、以及來世者、惟在經教、先賢會言之、今聞西方純雪地方、有大慈大悲觀世音菩薩出現、祈遣使請來、照從前神祖呼必賚徹辰汗、與胡土克圖帕克巴喇嘛、設立道教、豈非盛事乎、阿勒坦汗深爲嘉許、遂與右翼三萬人和好、即於丙子年、令阿勒坦汗之阿都斯達爾罕、阿依々達爾罕、徹辰鴻台吉之鴻郭岱達延巴克實、充爲使人、往請聖識一切之索諾木札木蘇胡圖克圖と嘉靖丙寅の後十

年は萬曆四年に當る又云く歲次丁丑、右翼之萬人、乘馬往迎と丁丑は萬曆五年なり以上は蒙古人の所傳にして之を漢人の記する所より視れば通鑑輯覽萬曆五年に初詣達諸部、嘗越甘肅境、掠西番、既通款、其從孫徹辰台吉、連歲盜番、不得志、求詣達西援云々とあり大抵其事相符す蓋し其實は源流の云へるが如く活佛を迎へに往けるなるべし然れども此輩一萬人を以て行く途中、劫掠を行ふに非んば食を得る所無し他人の食に因て往來するは彼等が常事にして彼等は此を以て惡事と爲さざるも漢人より之を視れば此れ劫掠たり一萬人を以て劫掠を行ふ此れ人の國を侵略せる者なり故に認めて志を得ざるが爲めに救援を求むと爲す記する所異なりと雖、事實は相同し是に於て漢人は言ふ此れ名を迎佛に借りて實は劫掠を行ふなりと然れども彼等が主意は固より迎佛に在りて名を借りたるに非ず唯、劫掠は其の常事にして若し欲する所を得ざれば殺戮も憚かる所に非ず彼等本と自己の性命を惜しむことを知らざると同時に人の性命を尊重することも知らず人の性命すら尙ほ且つ尊重することを知らず何に況や人の牧産財物をや彼等唯、活佛の供養は無量の大功德たるを知れるのみ人の財物を掠め人の性命を奪ふも供佛施僧の爲めにすれば敢て凶惡を行て惡事と爲さず彼等の無智蒙昧此に至れるなり故に漢人より視れば名を借りて劫掠を行ふと爲とも余よりして之を言はしむれば迎佛も實事たり劫掠も實事たり唯、視る所の異なるより記する所の異なるのみ而して其の第一次の迎佛は永謝布の巴爾郭岱青、鄂爾多斯の哈坦巴圖爾、土默特的瑪哈沁巴克實、第二次は鄂爾



多斯の青巴圖魯、土默特の卓里克圖諾延、第三次は徹辰洪台吉、土默特の達顏訥顏なり此に由て之を觀れば切盡台吉は即ち庫圖克圖徹辰なること瞭然たり

次に火落赤は西番諸衛傳に切盡弟火落赤と云へり源流に火落赤の名無し然れども諾木塔爾尼郭翰台吉之尼袞特古斯徹辰福晉、生子庫圖克台徹辰鴻台吉、布延達喇古拉齊巴圖爾、賽音達喇青巴圖爾とありて切盡既に徹辰鴻台吉たらば其弟火落赤は恐らく布延達喇古拉齊なるべし古拉齊の音は火落赤に近し古拉齊は又郭拉齊に作り一種の稱號にして一人の專名に非ず故に其子も亦郭拉齊の稱あり即ち源流に布延達喇郭拉齊巴圖爾生子莽固斯雖爾德尼郭拉齊と云へる是なり而して此の莽固斯郭拉齊を卷八には稱莽固斯呼拉齊、號爲額爾德尼呼拉齊洪台吉と云へり然らば古拉齊、郭拉齊固より相同く郭拉齊、呼拉齊も亦相同くして呼拉齊火落赤の相同きことは論を待たず此の如く考へ來れば明史の火落赤は源流の布延達喇古拉齊巴圖爾なること又疑無し明人其の專名に非ることを知らずして之を專名と認めしは濟農の稱を知らずして專名と爲し吉囊、或は吉能と書せるが如し又嘉靖三十年の世宗實錄に俺答云々其子脫々復率十餘騎、詣宣府寧虜堡暗門、呼通事出、擗刀爲誓、求通貢市、留其裔虎刺記等、以爲質而去夕今俺答等、求開馬市、既以親信之使虎刺記爲質、復縛送我叛人云々などあり虎刺記、呼拉齊亦相同じ蓋し同人なり布延達喇は壬寅年生にして嘉靖三十年辛亥には年十歳なれば質子たることを得べく俺答が從孫なるが故に之を親信の使とは云へる

なり又明の會典貢者六枝の内に一合羅氣把都兒吃吉等とあり合羅氣又呼拉齊と同じ此れ合羅氣把都兒は即ち布延達喇古拉齊巴圖爾なり然らば何故に其兄を一枝に算へずして弟を算へたるかの疑あらん然れども之に答ふるも亦難からず兄徹辰台吉は専ら西北に在り衛喇特、青海の事に從へるが故に清廷には多く親しみ無く且つ源流にも龍虎將軍を贈られしも未だ領授せざるを云へるに其弟は曾て質子たりし親みあり明人の此を算して彼を算せざるは此が爲めなり但其實は明人の所謂る火落赤は布延達喇呼拉齊に非ずして多くは其子莽固斯呼拉齊なり何とならば源流に布延達喇右拉齊巴圖爾、壬寅年生、年三十一歳、賽音達喇青巴圖爾、乙巳年生、年二十八歳、歲次壬申、行兵托克摩克、於實喇摩楞地方、擊敗阿克薩爾汗云々、撤兵而回、至尼楚袞哈薩拉克地方、阿克薩爾汗領兵十萬、追至交戰云々、古拉齊巴圖爾由正中冲入、所乘之馬、爲阿魯庫克射斃、易馬而戰、馬膝又中、箭而倒、爲殿後兵所擊、而青巴圖爾來援其兄、同殞於陣とあれば古拉齊巴圖爾は隆慶六年、三十一歳を以て既に陣亡せるなりされば明と馬市を通じ若くは邊界を侵し、は布延達喇古拉齊に非ずして莽固斯呼拉齊なること明なり明人其の父子同様なるを以て誤て切盡の弟と爲せるなり又通鑑輯覽は火落赤を浩爾齊に作る源流にも浩爾齊を號とせる者あり烏格新之巴克蘇岡里浩爾齊とある是なり然れども此は阿勒坦が父の幼時の人なれば此と同からず之を要するに浩爾齊も呼拉齊も譯字の差のみにして一の稱號なれば前後に之を以て稱せらるゝは一人のみに非るなり



又永邵トは部名にして人名に非ること既に述べし所の如し（第二編土默特の條に詳なり）通鑑輯覽は永什布に作る（續文獻通考は永恰トに作る聲音相同からず甚だ非なり）萬曆二十三年に於て永什ト者、順義王諸達從子也、部衆盛強、先嘗授都督同知、再進龍虎將軍、自以貢市在宣化、守臣遇已厚、不可違、乃隨諸達、西迎活佛、留據青海、歲爲邊患、と云ひ明史は俺答庶兄子永邵ト遂留青海、不去と云ふ（紀事本末には單に兄の子とせり）然れども俺答の兄は所謂吉囊にして庶兄無し唯々源流阿勒坦が弟に博迪達喇鄂特罕台吉と云ふ者あり遂將阿蘇特、永謝布二處、令博迪達喇佔據而居と云へり永謝布は即ち永邵トにして初、大部たり阿魯克台以下伊斯滿太師、伊巴哩太師等皆之に據り後、達延汗の子烏巴繼察之子、兄弟相害して其地遂に博迪達喇に歸す然らば明史、紀事本末、通鑑輯覽諸書に見ゆる永邵ト（永什布も同じ）は蓋博迪達喇が子にして阿勒坦が弟の子なり其名は詳ならざるも源流に迎佛の事を記して初次往迎者、乃永謝布之巴爾郭岱青云々等八百人とあり隨諸達、西迎活佛と云へるに相當す想ふに此の巴爾郭岱青ならん以上考證する所に由て大抵當時阿爾坦が部屬の青海に入りて活佛を迎へ因て以て侵略を行ひし情形を推知するに足れり

俺答既に死して傳へて其孫播力克に至り權勢軽くして諸部を制すること能はず是に於てか又丙兔の子真相、莽刺川に移り火落赤、捏工川に移り漸く西寧に逼る諸番族皆支ふること能はず折れて其用となり河洮の間騷然、西陲大に震ふ河套のト失兔之が聲援を爲し播力克を誘ひ仰華寺に詣りて佛を拜せしむ播力克、衆を率て行く其徒、此を持して重と爲し意氣頗る昂れり明朝、兵部尙書鄭洛をして經略使を以て邊防を籌せしむ鄭洛乃ち馳て甘肅に至り令を下して曰く青海よりして其の故居に歸る者は道を假すことを聽せ北部よりして青海に入る者は兵を勸して之を拒めと河套、土默特の屬是より復た西に據り松山、莊浪と相觸角す萬曆二十六年、巡撫田樂、龍首山を合圍し斬馘すること七百餘級、青把都兒遁れ去る是より復た大叛亂無し而して天山北路の和碩特、烏魯木齊より移りて之に代はる

案ずるに明史の播力克は通鑑輯覽の徹哩克なり源流は土默特之卓里克圖諾延と云へる即ち是なるべしト失兔、輯覽に布色圖に作る亦即ち源流の博碩克圖濟農なり漢人或はトを以て姓と爲しト兒孩の子孫と思へる者あり笑ふ可きなり秦邊紀略の注に明正德間、夷亦不刺乃擁衆萬餘、寇涼邊、又請居哈密、主西域貢、爲中國外藩、議者不許、四年、乃侵青海之四衛、掠諸蕃、盡有其地、則固夷人中之有才能者、中國不善用之耳、而永邵ト、ト兒孩之屬皆依焉、及扯力良、俺答皆往來海上、火落赤、真相黨惡于南、賓兔、宰僧、青把都兒倚角于北、所以洮河寧莊、多夷患也とあり明史に亦不刺が外藩たらんことを請ひしを載せず別に據る所あるが但永邵トをト兒孩の上に置き扯力良を俺答の上に置けるは皆時代を顛倒せる者、殊に扯力良は即ち播力克の訛轉にして俺答が



孫なるをや漢人の蒙古の事情に暗き此の如し然れども火落赤、真相は南に賓兔、宰僧、青把都爾は北にと云へるは萬曆を去ること甚だ遠からざる世の傳説と云ふことを得べし宰僧は明史に松部宰僧等犯陝西とあり賓兔が後に於て松山に居りしなるべく其人は宣鎮圖説に有威兀慎、乃先故順義王黃台吉之第三妻也云々、其子乃我著進台吉、即宰生黃台吉云々、部下有一萬餘騎、雖邊一百餘里とある宰生、宰僧聲音相近し同人なるべし萬曆以後、宣大地方は侵略に難きが故に西に移りて侵略を行へるならん又青把都兒は一人の專名に非れば此を以て稱せらるゝもの多く其人知り難きも蒙古源流の迎佛の條に二次往迎者、乃鄂爾多斯之青巴圖魯土默特之卓哩克圖諾延、率千人前往とある青巴圖魯なるべし明史に青把都兒の事を載せず唯、萬曆二十八年の事を叙して著力兔、宰僧、莊禿賴等乞通款とあり著力兔は卓哩克圖なるべければ莊禿賴は青把都兒にはあらざるか秦邊紀略甘州北邊山丹衛に龍首山即甘峻、明之夷人青把都兒、先據昌寧湖、漸次駐于此、數爲邊患、萬曆間、巡撫田樂合圍龍首山、斬賊七百餘、青把都兒單騎遁去、當時以爲甘山之捷、即此也、又涼州北邊昌寧湖に明萬曆間、夷首把都兒據之、與莊浪、大松山之夷濱兔赤、宰僧、青海之夷永都卜、彼此相爲聲援、侵犯內地、萬曆二十六年、巡撫田樂徵兵敗之、青把都兒遁去とあり然らば昌寧湖、山丹衛一帶に出沒せし者なり

明末清初の際、衛喇特盛強にして和碩特の願實汗之が長たり元の太祖の弟哈布圖哈薩爾の後裔にし

て原烏魯木齊の古牧地に居る青海の富饒なるを知り故地を棄て、舉族、南に徙り青海頭に據る願實汗名は圖魯拜琥、其祖博貝密爾咱より以來、世々衛喇特汗と稱す兄弟六人あり獨り仲兄拜巴噶斯、別に自から西套に據り其餘は悉く隨て青海に入る其の故地に留まれる者は一二の諸父兄のみ時に土爾扈特も亦北、露國に徙る其の族人保爾阿噶勒琥は北に徙るを好まず願實汗と偕に南に徙る願實汗の南に徙りしや其意本と西藏を得るに在り時に西藏に汗あり藏巴と曰ふ清の太宗の崇德二年、願實汗、使を遣はして盛京に至らしむ清廷、喀爾喀三汗の勸に因り書を其の使人に託して西藏の達賴、班禪に轉致せしむ七年、達賴、班禪の使人、盛京に至る藏巴汗も亦使人をして偕に來らしむ藏巴汗本と達賴の第巴桑結と相善からず桑結之を傾けんと欲し其の部衆を虐し釋教を蔑にするの罪を鳴らし兵を願實汗に乞て之を討す願實汗因て藏巴汗を撃て之を戕し衛、藏二部を取りて之を達賴、班禪に分給し自から巴爾喀木の地を收め租賦を徴し長子達延を西藏に置いて其衆を轄せしむ此を鄂齊爾汗と爲す西藏是より和碩特の有に歸す而して第六子多爾濟をして鄂齊爾汗を佐けしむ此を達賴巴圖爾台吉と爲す

案ずるに願實汗の意、西藏を以て重しとし長子をして出で、之が汗たらしめ第六子をして之を佐けしむ所謂之を佐けしむとは西藏に往て之を佐けしめしに非ず青海に在りて青海の事を管せしめしなり蓋し西藏を本宗とし青海を支庶とす故に此の如しされば後來、青海諸族に事あれば清廷、諭旨を達賴巴圖爾に下せり秦邊紀略に亦不刺據青海二十餘年、爲吉囊所襲、惟卜兒孫獨全、遂稱卜



失兔罕、盤據四衛、今之達賴黃台吉、卜兒孩之子、麥力幹、達爾加黃台吉、皆卜兒孩之孫也。此れ卜兒孩とト失兔とを同一にせるのみならず、願實汗をも併せて同一人とせり。其非、言を待たず。達賴黃台吉は即ち達賴巴圖爾にして大台吉たるが故に黃台吉と稱す。而して達爾加黃台吉と云へる者も實は同一人にて多爾濟、達爾加は譯音の異文のみ此を別人とせるは蓋し誤なり。此名本と西藏語のタルチエより取る即ち金剛の義、漢人多く多爾濟と音譯す。然れども達爾加反て原音に近し。麥力幹は後に見ゆる墨爾根台吉即ち願實汗の孫なり。

願實汗既に青海、西藏を併せ、屬下諸台吉の貢使益々至り、西寧に駐する者多し。甘肅の巡撫王世功、其の貢使入關の額を定め、餘は口糧を給して關外に留めんことを請ふ。清廷之を許す。順治六年、河西白帽の回子騒ぐ。願實汗の二子鄂木布、瑚魯木什、大軍を助けて之を討し、且つ西寧城を招降す。清廷、鄂木布に上謝圖巴圖爾、魯魯木什に巴圖爾、額爾德尼岱青の號を與ふ。九年、願實汗、達賴喇嘛を導て入朝す。清廷之を嘉し、願實汗を封じて遵文行義敏慧願實汗と爲し、金冊印を賜ふ。十三年、願實汗死し、其の次子車臣岱青嗣ぐ。車臣岱青は即ち鄂木布なり。

案ずるに願實汗死して汗號は西套の鄂齊爾圖之を受け、車臣岱青は汗を稱せず。蓋し願實汗の後を承ぐと雖、本宗たらざるが故なり。

會々青海の屬、邊患を爲す。清廷乃ち車臣岱青、達賴巴圖爾に諭して曰く、遯ころ爾等、番衆を率て内地

を掠め、官兵に抗す。守臣奏報すること二十餘次、屢々諭せども悛めず。今特に官を遣りて甘肅、西寧等の地に赴て狀を勘せしむ。爾等或は親から至り、或は宰桑をして來り質せしめ、誣妄の罪、各々歸する所あらん。番衆等、原と貢を蒙古に納れし者は、爾等が轄に歸せん。如し明朝の所屬に係らば、應に仍ほ中國に歸すべし。漢蒙の定界と市易の隘口とに至ては、務て宜しく詳に察核を加へ、耕牧を分定し、境を越て妄に行ふことを得ること毋かるべし。蓋し青海、甘肅の間に黃番、黑番あり、原と瓜沙二州の番、土魯番の回子之を侵す乃ち移りて關に入る。明朝之を此に置く亦不刺の青海を襲ひしや、四衛の人或は遷りて甘州に赴き、或は西寧に奔り、或は流れて黑番と爲る。境界甚だ明白ならざる者あり、或は租を甘肅に納れ、或は添巴を和碩特に贈り、又噶爾丹に贈る故に、清廷其の分界を正さんことを欲せるなり。

案ずるに黃番又黃達子と云ふ。然れども恐くは蒙古種に非ず。回鶻種なるべし。孫思克傳に二十八年三月、北套生番犯内地、掠錫喇偉古爾番族、思克督兵截阻、斬獲甚多とあり。錫喇は黃なり、偉古爾は畏吾兒、即ち回鶻なり。此れ蓋し黃番なり。回鶻、唐末に憂黠斯に敗られ、西域及び河西諸地に入る。此れ其の遺類なるべし。黑番亦其屬類ならん。秦邊紀略西寧近疆に歸德碇云々、河州與歸德堡、今往來常不絕、假西寧道者、必由是峽、番族居之、而斗租石賦、不入縣官、願聽于夷、何哉、注に今黑番住牧、其族類未詳、皆納夷添巴とあり。此れ康熙中の事なり。添巴は明史西蕃諸衛傳に私債皮弊曰手信、歲時加饋曰添巴と云へり。



明年、多爾濟、表を奉じて其父の賻祭の恩を謝し并て西寧以東に驛站を設け貢使の往來に便にせんことを請ふ清廷許さず十五年、清廷復た車臣岱青に諭して曰く爾等、屬番に向て貢を取らば人數を酌定し路は正口よりし頭目をして先づ守臣に稟告せしめて而して後に邊に入ることを許す市易の定所に至ては應に西寧の鎮海堡、川北の洪水等の口より出入すべし任意に道を取ること勿れと然れども出入必しも定處あらず市易も亦定所を守らず

案ずるに秦邊紀略に多巴在西寧西五十里、今互市也、黑番回々築土室成衢焉、爲逆旅主人、凡九曲、青海、大通河之夷、爲居離斷、遠而西域回夷爲行賈者、皆于是乎在、世以西寧市口在鎮海北川、惡知所謂多巴耶、注に世所傳西寧市口、皆謂鎮海北川、即律例亦不載及多巴、豈爲市口未久乎、今皆番回居住、至市者、則夷人達賴下宰僧一、麥力幹部宰僧一、中國反不設官焉。とあり當時定處以外別に互市場ありしこと此其の一例なり宰僧は宰桑と同じ蒙古重臣の稱

西喇塔拉は甘肅の要隘にして水草肥饒なり青海蒙古常に之を欲し屢々此に遊牧す甘肅提督張勇往て之を責む乃ち罪を謝して去る張勇因て永固堡を設け八寨を聯築す既にして又相繼て來て近邊に徙る康熙四年、張勇奏請し爲めに甘肅、西寧の駐防を増す明年、勇復た奏請す近ごろ祁連山に蜂屯し内地大草灘に縱牧し曾て人を遣りて徙ることを諭せども悛めず請ふ兵備道を設けて之に備へんと清廷に命じて守備を嚴にせしめ仍ほ善撫して以て其心を柔にせしむ勇是に於て扁都口西水關より嘉峪關に至るの間

に邊牆を固築し以て守禦に資す明年、川陝總督盧崇峻奏す青海の諸頭目、八月に於て入寇せんことを約せり請ふ莊浪に赴て之に備へんと總兵孫思克をして南山の隘に屯し形勢を視て固守せしむ尋て西藏の達賴喇嘛、諸台吉等に檄して内地を擾すこと勿からしむ是より黃城兒、大草灘等の地に駐牧せし者、皆徙り去る清廷、駐防兵を撤す

案ずるに白如梅傳に聖祖仁皇帝康熙四年五月、裁併山西總督于陝西、即以如梅任之、是年冬、厄魯特台吉阿喇納所屬蒙古、越定差廟邊界遊牧、山丹衛遊擊房玉桂、理論不從、率兵驅逐、衆蒙古抗鬪、傷害我兵十數人、我兵合擊乃遁去、鎗斃及死傷者二百餘人、獲馬二百餘、牛羊千餘如梅疏報、不言我兵陣亡及陣獲馬匹牲畜、而僅云互相對敵、殺傷蒙古三十餘人、五年九月、上察其事、勅理藩院、遣官以所獲牲畜、給還蒙古台吉阿喇納とあり此を定差廟の捷と稱し清人は大捷の如く云へる者もあれど實際は猶ほ白如梅が疏報の如くなりし者の如し秦邊紀略涼州北邊定差廟の注に丁未年、夷擁衆欲越邊北行、甘涼之兵阻之、相持一月不解、一日對語、譯者方往來、甘兵偶發大砲、夷馬大驚、且有未及乘者、遂潰、甘兵乘勢逐之、斬夷哇二、夷婦一、世所傳定差廟之捷者此也、蓋夷恃爲必不敗盟、乃爲不備、故至于潰焉、非勝之也と云へり但丁未は康熙六年に當る二年を誤れり

十三年、吳三桂の亂に平涼提督王輔臣叛て之に應じ臨鞏の諸郡、相繼て逆に從ひ蘭州危きこと甚し孫



思克兵を移して協防す墨爾根台吉等、隙に乗じて山口より内地に入り官軍と拒戦し永固營の副將陳達之に死す孫思克草地より河を渡りて涼州に回り河西根本の重地を保し恩威を宣示す墨爾根台吉等塞を出て去る既にして準噶爾台吉罕都、拜達等、千餘の衆を擁し番民を掠め大草灘より邊牆を毀て遁る墨爾根台吉之を聞き其衆を挈へ來て大草灘に徙らんとす守汛兵之を禦ぐ乃ち復た黃草灘に屯牧せんことを乞ふ許さず清廷、尙書科爾廓代をして往て境界を定めしむ墨爾根台吉引き去る適々達賴の使者至る乃ち命して達賴巴圖爾等に傳諭して部衆を戡め邊患を爲さざらしむ墨爾根台吉は車臣俗青の子、達賴巴圖爾の從子なり

案するに秦邊紀略涼州近疆黃城兒の注に初正德間、海夷之亂、設兵黃城兒守禦、故城中有民、有兵、明季城荒、遂爲棄地、康熙十三年、麥力幹承滇黔之亂、借以養馬、久假不歸、且數爲邊患、久之、復議紛紜、竟不果、後夷以爲固有矣、今其部落住牧と云へり麥力幹即ち墨爾根にして滇黔の亂は吳三桂の亂なり然らば史には塞を出て去ると稱すれども其實は去らざりしなり罪を引て出て去るなど云ふに至ては捏報の飾辭に過ぎず又涼州近疆の末に云く今大草灘、大黃山、皆爲夷所盤據、當事者匿不以聞、近疆不載二地者、因其所諱而諱之也とあり然らば大草灘も黃城兒も畢竟皆青海蒙古に占領せられし者にして史は守臣の飾辭のまゝに諱して書さず所謂の當事者匿不以聞とは是なり又秦邊紀略水磨川の注に甲子年、麥力幹黃台吉由塞占口出、設毡布帳于堡

南五里、欲由毛卜刺而出昌寧湖、又寧遠堡の注に南邊之夷麥力幹、今甲子年、欲往昌寧養病などあり此れ皆當時の人の記述に係る然れども史は更に之を記せず由來邊臣の事を誤る多くは捏報の飾辭に在り清廷悟らず常に疆土を失ふ所以、此に觀て知るべきなり

十六年、準噶爾の噶爾丹、西套を襲ひ鄂齊爾圖汗を殺し又將に青海を侵さんとする西套の諸台吉以て達賴巴圖爾等に告げ防禦の計を爲さしむ清廷之を聞き靖逆將軍張勇に諭して曰く噶爾丹、青海を侵すに如し遠く達布素圖瀚海より往かば之に聽せよ如し大草灘を經んと欲せば堅く信約を立て内地を擾すこと勿からしめよと既にして噶爾丹、從者の異志ありしと道路の太だ遠さとに因りて兵を撤して去り書を張勇に致して云く我祖多克辛諾顏、曾て顧實汗と偕に青海を取りしに今和碩特獨り之を佔據す故に往て之を索めんと欲せしのみ唯々將軍の所轄に係れるを以ての故に果さずと尋て噶爾丹、和碩特諸台吉の己を襲はんことを懼れ密に使を遣りて昏を議し其女を以て博碩克圖濟農の子根特爾に嫁せしは張勇、狀を得て聞す噶爾丹、名を議昏に借り實は往て之を侵さんことを謀る甘肅は方に往來の衝に當れり請ふ兵防を増せんと清廷之に従ふ博碩克圖濟農は顧實汗の第五子伊勒都齊の子なり噶爾丹の將に喀爾喀を侵さんとせしや使を青海に遣り其兵を助けんことを乞ふ達賴巴圖爾、達賴喇嘛の言に遵て之を許さず二十五年、瑚魯木什來朝し歸るとき噶爾丹の喀爾喀を侵すを謀し所部の兵を邊に屯し以て大軍を助けんことを謀る適々噶爾丹敗る乃ち還る二十九年、清廷、學士達瑚、郎中桑格を策妄阿喇布坦の



處に使せしむ還て嘉峪關に至る青海台吉阿吉羅卜藏之を掠む甘肅提督孫思克、遊擊朱應祥をして其の宰桑を誘執せしむ乃ち懼れて使人を還す思克又副將潘育龍、遊擊韓成等を遣りて之を撃ち斬滅四百餘、駝馬牛羊、千を以て計ふ阿奇羅卜藏遁る思克乃ち青海諸台吉に檄して掠はる所を歸さしむ時に達賴巴圖爾已に死す其子薩楚墨爾根、其の宰桑をして阿奇羅卜藏を詰責し且つ掠むる所の者を察獲して之を獻し又代て罪を謝す然れども是時青海未だ全く清廷に服せず第巴桑結固より噶爾丹に黨せり乃ち私に薩楚墨爾根を煽し兵萬餘を率て雜谷、桑湯、對河等の番地に屯し以て觀望の計を爲さしむ噶爾丹敗死すと聞き兵を撤して去る杜爾伯特台吉緯克圖、噶爾丹の亂を避け奔りて衰布台吉に依る邊吏往て詰る情を以て告ぐ乃ち究治せず衰布は願實汗の第三子達蘭泰の子、嘉峪關外に游牧す準噶爾及び諸回使の來往必由の處に居る順治十三年、葉爾羌、曾て使を清廷に通し肅州に抵る衰布、其の前に其屬を奪ひしを以て之を襲はんとす甘肅巡撫周文煜、葉爾羌使人を甘州に徙す衰布千餘騎を携へ道を分て入襲せんとし備あるを聞て回る後、清廷の使を策妄阿喇布坦に通せしや衰布爲めに糧糗駝馬を助け且つ教導して之を遂せしむ

案するに秦邊紀略甘州近縣巴系墩川の注に順治八年、叛回餘黨數百善鳥鎗者、逸出降于滾下、滾下親率諸回、住牧于巴系墩川、其部落多游牧于大草灘之地焉と云へり滾下は即ち衰布なり是より前、副都統阿南達、布隆吉爾に在り青海の使の噶爾丹が所より歸る者を素爾河に擒す阿勒達爾

宰桑と云ふ又噶爾丹敗れて其の陣中に博碩克圖濟農か使人羅墨額木齊、善巴等を得たり清廷、羅墨額木齊を留め善巴をして清廷の使と偕に往き以て博碩克圖濟農及び薩楚墨爾根を諭さしめて曰く噶爾丹既に敗れて西に走る青海台吉若し舊に仍て睦を修めんとならば各々邊界を防ぎ噶爾丹の至るに遇はば即ち擒解を行へ若し知て故さらに縱さば此後永く汝等を讎とし絶たんと達賴喇嘛の青海に遣はして蒙古事務を管理せしむる者を善巴陵堪布と云ふ之を聞て諸台吉を察罕托羅海（青海湖中の一島）の盟壇に集め之に告て云く噶爾丹、鄂齊爾圖汗を殺す實に我等の讎なり但素と達賴の言を奉す今又應に人を遣りて之を議すべしと既にして西藏の達賴汗、青海八台吉等を約して清廷の捷を慶せしむ達賴汗は鄂齊爾汗の子なり鄂齊爾汗、康熙四年を以て死す其子朋素克嗣ぐ即ち達賴汗なり初、願實汗十子あり長子は即ち鄂齊爾汗たり一子は西套に在り其餘八子皆青海に在り之を八台吉と稱す是に於て清廷、一面、人を遣りて達賴汗を獎し且つ第巴桑結を責め其をして濟隆胡圖克圖と博碩克圖濟農か子婦とを執へて獻せしめ又班禪をして進京せしめ一面、使を青海に遣りて羅墨額木齊と阿勒達爾宰桑とを歸し以て諸台吉を招撫せしむ衰布之を聞き先づ宰桑馮木特をして來て内附を請はしむ時に額駙阿喇布坦、都統都恩噶爾、巴林台吉德木楚克、西寧喇嘛商南多爾濟等招撫使たり清廷命して馮木特を携へて偕に往かしむ使者馮木特をして馳せ歸りて衰布に告げ來り會せしむ衰布方に達賴の塔を建つるの故を以て親から來ることを得ず長子額爾德尼額爾克托克托龍をして來らしむ時に西藏の達賴汗の子拉藏も亦達賴の塔



を建つるが爲めにして青海に赴く額爾德尼額爾克托克托鼎、中途にして誤て拉藏、兵を以て來りふ襲ふと聞き懼れて歸る衰布又次子朋素克をして代り來らしむ拉藏之を責めて曰く爾が父獨り私に使を遣りて内附を請はしむ豈に青海に貳せんと欲するに非ずや我將に兵を興して爾が父と難を構へんとす朋素克馳せ歸て父に告く衰布、兵を備へて待ち又馮木特をして往て招撫使に告げしめて曰く先づ我が地に臨まれずんば諸台吉の疑自から息まんと使者、其言に従ふ拉藏、人をして衰布に告げしめて曰く爾獨り天朝の寵を希ふは宜しき所に非ず我は將に諸台吉と偕に内附せんとするのみと是に於て諸台吉と偕に招撫使を迎ふ阿喇布坦等既に祭罕托羅海に至る諸們罕も亦出で迎て曰く皇上、青海の衆をして安樂を享くることを得せしむ何の幸か之に如かんと諸們罕は西寧の大喇嘛にして青海人の尊奉する所なり使者乃ち諸台吉に諭して曰く達賴俗青當に身を以て人朝すべし否らずんば必ず子弟をして代り來らしめよと時に薩楚墨爾根も亦既に死して其弟策旺喇布坦之に代り達賴俗青と稱す名號、八台吉に冠たり是歲、聖祖、寧夏に幸す使者故に之に約して入朝、期悞まること勿らしむ達什巴圖爾、諸們罕、善巴陵堪布及び拉藏等偕に諸台吉に檄し將に四月を以て啓行し博碩克圖濟農及び額爾德尼台吉をして衆に代て入覲せしめんとす使者歸り寧夏に至り更に議すらく露處に入覲するは未だ朝典に協はず應に秋後を以て京師に朝せしむべしと清廷之に従ふ乃ち都思噶爾、商南多爾濟兩人を鎮海堡に留めて入覲を待たしむ十一月達什巴圖爾、諸台吉と偕に入覲す明年正月、清廷、達什巴圖爾を封して親王とし朋素

克、納木札勒を封して多羅貝勒とし額琳沁達什、朋素克を封して固山貝子とし根特爾には輔國公を授く皆入覲せる者なり達什巴圖爾は顧實汗の第十子、時に顧實汗の諸子皆死し此人獨り存す八台吉の子孫に於て尊行たり故に親王を授く貝勒朋素克は西藏の達賴汗の弟、納木札勒は墨爾根台吉の子、自から額爾德尼と稱し嘗て祖父の號を襲はんことを請ひ又黃草灘の地を得んことを求む清廷唯々之に土謝圖俗青の號を許して黃草灘を與へず是に至て其弟額琳沁達什と偕に叔祖達什巴圖爾に隨て來る貝子朋素克は衰布の次子、根特爾は博碩克圖濟農の次子、衰布は建塔の故を以て博碩克圖濟農は病の故を以て皆入朝を得ず俱に其子をして代り來らしむ而して瑚噶木什か子哈坦巴圖爾も亦疾を得て來ることを果さず其餘諸台吉多くは幼く且つ未だ出痘せず故を以て皆至らずらざる者は封爵隨て及ばず唯々羅卜藏達爾札の母、獨り其情を表陳し殊に輔國公を授けらる初、根特爾、噶爾丹の女を娶る噶爾丹滅びて清廷屢々其女を青海に求む青海、第巴桑結に因て代て疏請せしむ清廷以爲らく噶爾丹罪重し其女斷じて青海に留む可らず然れども博碩克圖濟農如し自から携へ至らば猶ほ生を賜ふべしと既にして博碩克圖濟農死し子察罕丹津嗣ぐ因て請ふて曰く噶爾丹が女、臣が弟根特爾の妻たり第巴疏請すれども允許を蒙らず聖恩如し顧實汗の子姓を眷顧せば乞ふ噶爾丹が女を以て仍ほ臣が弟に賜て完聚を得せしめよと清廷之を許す四十年、察罕丹津入朝し多羅貝勒を授けらる四十二年、聖祖、西安に幸す達什巴圖爾、策旺喇布坦等來朝す策旺喇布坦に多羅郡王を授く明年、衰布が諸台吉に先ちて内附せるを以て未だ入覲



せずと雖、特に命じて多羅貝勒を授く是に於て青海全く内附し諸台吉皆清廷の封爵を受く唯、瑚噶木  
 什、桑噶爾札の裔は獨り木だ封を受けず四十四年、達什巴圖爾以聞す乃ち瑚噶木什の孫達什敦多布、  
 桑噶爾札の孫敦多多布達什に輔國公を授く八台吉の子孫是に至りて一も封爵を得ざる者無し而して西  
 藏鄂齊爾汗の裔青海に在る者は未だ預からず五十年、噶爾丹達什、索諾木達什、車稜等皆輔國公を授  
 けらる索諾木達什は達賴汗の弟、車稜は索諾木達什の弟墨爾根諾顔の子、噶爾丹達什は索諾木達什の  
 兄多爾濟の孫、均しく鄂齊爾汗の裔なり尋て青海台吉墨爾根諾顔(前の墨爾根諾顔と同稱異人)の子拉  
 察布も亦輔國公に封せらる是歲、輔國公羅卜藏達爾札始て入朝し固山貝子に晋封せられ尋て盟長を授  
 けらる羅卜藏達爾札は墨爾根台吉の弟卓哩克圖俗青が子なり

初、第五輩達賴喇嘛死して第巴桑結之を秘し喪を發せず詭て達賴の請と稱して自から封爵を請ふ清廷  
 知らず以て圖伯特國王と爲す其後、班禪を召すに第巴之を阻して來らしめず清廷漸く之を疑ひ因て達  
 賴の久しく已に示寂せるを察得し之を第巴に詰る第巴以て能く之に答ふる事無し且つ私に擇て羅卜  
 藏琳沁策旺嘉穆錯を立て、第六輩の達賴とす既にして達賴汗死して拉藏汗嗣ぐ第巴之を憎み謀て拉藏  
 汗を毒す死せず兵を以て之を逐ふ拉藏汗乃ち西藏の衆を集め第巴を執へて共に之を殺し因て其の立つ  
 る所の達賴羅卜藏琳沁策旺嘉穆錯を廢す清廷之を聞き之に輔教恭順汗の號を賜ひ且つ其の廢せし所の  
 新達賴を献せしむ策妄阿喇布坦是より先、既に其の眞に非るを奏し是に至て又人をして往て迎へしむ

拉藏汗與へず明年、之を清廷に献ず道にして死す乃ち博克達の阿旺伊什嘉穆錯を立て、達賴喇嘛とす  
 裏塘の人索諾木達爾札二子を産む長を羅卜藏噶勒藏嘉穆錯と曰ふ幼にして慧悟唐古特人及び青海諸台  
 吉皆之に敬事す是に至て年甫て十歳、拉藏汗既に阿旺伊什嘉穆錯を立て達賴とす其名を聞て之を忌み  
 將に兵を以て之を殺さんとす索諾木達爾札懼れ襁負して青海に奔る青海の諸台吉迎て之を牀に坐せ  
 しむ(喇嘛は座牀を以て尊と爲す)是に於て眞偽の辯明ならず是非の論囂然たり清廷、其の久くして忿  
 争を醸さんことを恐れ大學士拉都琥をして往て之を視せしむ拉藏汗言ふ請ふ班禪の言を以て信を取ら  
 んと清廷以爲らく西藏の汗、青海の諸台吉と争ふ官を遣りて藏務を辨せしむるに非んば恐らくは事あ  
 るを免れじと是に於て始て侍郎赫壽をして藏に赴て事を視せしむ今の駐藏大臣あるは此に出でたり明  
 年、班禪及び拉藏汗奏す阿旺伊什嘉穆錯、能く經典を諳んず青海諸台吉も亦之を信ず請ふ冊印を給へと  
 清廷乃ち封して第六輩達賴喇嘛とし因て赫壽を撤回す然れども青海の諸台吉猶ほ拉藏汗の誣妄を許さ  
 固く羅卜藏噶勒藏嘉穆錯を執て眞の瑚畢勒罕(轉生人)と爲す清廷之を班禪に詢ふに拉藏汗の言の如し  
 諸台吉猶ほ辯難止まず清廷も亦其の難を構へんことを慮り再たび侍衛阿齊圖を遣り檄して青海兩翼の  
 諸台吉を盟壇に會し之に班禪の印文を示し因て論して羅卜藏噶勒藏嘉穆錯を徒して内地に置き索諾木  
 達爾札をして西寧の宗喀巴寺(黃教の祖寺、諾們罕住持の寺)に護居せしめ以て争端を聆めんと欲す諸  
 台吉達顏、色布騰札勒、阿喇布坦鄂木布、朋素克旺札勒等は皆命を聽さしも獨り達什巴圖爾の子羅卜



藏丹津及び察罕丹津は命を聴かずして曰く瑯畢勒罕年幼し痘を避くるが爲めに未だ遠く内地に行く可らずと乃ち命して暫く紅山寺に送らしめ繼て命して宗喀巴寺に送らしむ均しく命を聴かず將に兵を以て己に異なる者を脅かさんとす阿齊圖疏して以聞す清廷の議に以爲らく察汗丹津等若し諸台吉を攻めば色布騰札勒等必ず來り奔らん來らば應に邊内に置くべし察罕丹津の牧、松潘に近し請ふ兵を備へて之を待たんと乃ち西寧、四川、松潘諸路の兵に命じて之に備へ又朋素克旺札勒及び達顔に命して各々兵百人を選びて噶斯の路に屯せしむ土爾扈特台吉阿喇布珠爾、時に策妄阿喇布坦に阻せられて青海に在り從軍して力を効さんことを請ふ因て命じて兵五百を以て同く噶斯に屯せしむ察罕丹津始て畏て命を聽き羅卜藏噶勒藏嘉穆錯を送て宗喀巴寺に抵る阿齊圖又奏請す諸台吉を集めて盟を定め羅卜藏丹津、察罕丹津、達顔をして右翼を分領せしめ額爾德尼額爾克托那、阿喇布坦鄂木布等をして左翼を分領せしめ以て永く和睦せしめんと遂に其請の如くす達顔は薩楚墨爾根の子、達什巴圖爾か青海に長たりしとき私憾を以て其罪を許く清廷之を京師に禁じ叔父策旺喇布坦をして代て其衆を轄せしむ策旺喇布坦が來朝するに及び爲めに其罪を宥されんことを請ひ携へて與に歸る故を以て未だ封爵を得ず清廷、達顔が屬をして柴達木より噶斯に到るの察罕齊老圖地方に遊牧すしめ侍衛を其地に駐めて以て準噶爾の蹤跡を偵はしむ是に至て達顔來朝す之に多羅貝勒を授く同時に準噶爾台吉阿喇布坦も亦來朝す清廷之に札薩克を授け公品級の一等台吉を授く初、和碩特は準噶爾と世婚なり故に阿喇布坦、噶爾丹の從子を

以て察罕丹津の從子を以て察罕丹津の女を娶り因て青海に居る其族噶爾丹に従はずして此に遊牧せる者皆和碩特に附收し未だ曾て別に旗隊を編まらず是に至り始て編て旗隊と爲し分て其衆を轄せしむ是より前、準噶爾、沙拉より青海を襲ひ台吉羅卜藏丹津の牧を掠め復た噶斯口官軍の駝馬を盗まんことを謀る清廷、西安の兵をして青海の左翼に會せしめ四川の督標兵をして其の右翼に會せしめ協力防禦せしむ達顔既に封爵を受け因て奏請すらく噶斯の兵を増設して準噶爾を防がんと清廷之を嘉し西安の兵二千、西寧の兵二千を以て之に増す未だ幾くならざるに靖逆將軍富寧安、策妄阿喇布坦が兵を遣りて唐古特を攻めんとするを謀し馳疏して以聞す清廷以爲らく瑯畢勒罕の事初て定まる此れ拉藏汗陰に準噶爾をして憾を青海に修めしむるのみと理藩院尙書赫壽に命じ拉藏汗に諭して青海の察罕丹津等と相争はざらしめ又侍衛色楞をして青海に赴き諸台吉を諭さしむ何ぞ知らん事は意料の外に在て悉く此に出でざらんとは初、準噶爾久しく青海を襲はんとするの意あり噶爾丹の博碩克圖濟農と婚を結びし者、實に和好に因て以て其の間隙を窺ふに在り青海の全く清廷に服するに及び策妄阿喇布坦心頗る之を憾みとし口を其の曾て噶爾丹を助けしに藉きて其罪を討せんことを請ふ清廷悟りて許さず益々邊備を厚くす而して西藏の拉藏汗既に第巴を殺し信を清廷に得、貢使時に至りて廢缺すること無し策妄阿喇布坦益々和碩特族の己に附かざるを忌み之を害せんと欲す時に拉藏汗昏耄にして酒を嗜み毫も謀略無く復た準噶爾の久しく蓄謀あるを知らざるなり策妄阿喇布坦是に於て詭て婚を通し其女を以て



拉藏汗の子に許す拉藏汗、子あり長を噶爾丹丹忠と云ふ往て迎へしむ至れば則ち留めて遣らず居ること三年、既に子あり噶爾丹丹忠、巫術を善く策妄阿喇布坦之を憎み遂に誘執して兩釜の間に夾みて之を烙殺す而して拉藏汗知らず清廷も亦固より知らざるなり富寧安、巴里坤より出で、準噶爾を征し哨卒を獲て之を鞠訊し始て拉藏汗が策妄阿喇布坦と婚を通せるの狀を得、赫壽をして之を切責せしめ且つ其をして準噶爾を助けて青海を侵さざらしむ既にして策妄阿喇布坦果して噶爾丹丹忠夫妻を送るを以て名と爲し策凌敦多トをして準噶爾の衆六千を率る徒歩戈壁を繞り特幾斯より淨科爾庭を踰え突として西藏を襲はしむ拉藏汗之に備ふるとを知らず敵既に達木に至る始て覺りて其の次子索爾札と偕に之を拒げども敵せず奔りて布達拉(即ち今の拉薩)を守り使を遣はして援を清廷に乞はしむ策凌敦多ト進て布達拉を圍み噶卜倫沙克都爾札布等を誘て内應せしめ城門を開て入り拉藏汗を殺し并て其の第三子色布騰及び宰桑等を拘へ其の寶器を遷し因て新達賴阿旺伊什嘉穆錯を札克布里廟に幽す索爾札兵僅に三十餘を携へて潰走し亦途にして擒せらる唯、其妻獨り免れ間道より遁げ來る時に康熙五十六年なり是の時に當りて清廷方に定西、定北兩將軍をして西北兩路より出で、準噶爾を征せしむ未だ曾て事の此に至れるを知らざるなり唯、是より先、青海の察罕丹津、準噶爾が拉藏汗を侵すを代て告げ清廷、内大臣策旺諾爾布、西安將軍額倫特、侍衛阿齊圖等に論して分けて青海の要地に屯せしめしのみ議政王大臣等因て松潘、西寧の兵に檄して邊に備へんことを請ふ乃ち侍衛拉什をして察罕丹津に就て議を定

めしむ五十七年正月、拉薩汗か乞援の疏至る清廷更に色楞等に命して察罕丹津に會して進兵を議せしむ察罕丹津奏す大軍、藏に赴かば準噶爾必敢て潛に青海に至らし請ふ松潘等の兵を撤して口内に入れ士馬を休養せしめんと尋て拉藏汗被賤の報又至り索爾札の妻も亦至る清廷乃ち侍衛札卜密を遣りて察罕丹津に論し謀をして準噶爾を誘て青海に至らしめ以て之を撃たんとす至らず時に準噶爾兵五百、察木多を侵さんことを謀る察罕丹津詭て宰桑を遣りて之を裏塘に迎へしむ都統法喇、其の賊と相應ずるを疑ひ之を劾す察罕丹津、宰桑に傳諭し準噶爾の至るを待て駐防裏塘の官兵と偕に之を禦がしむ六月、額倫特兵を統て穆魯烏蘇より進み七叉河に至り侍衛色楞が拜圖より前往するを聞き七叉河より庫々塞爾一路に向て兵を進め遂に進みて齊諾郭勒に至り連りに賊兵を敗り追撃十餘里、賊を獲て問ふ云く札布齊杜喀爾等兵四千を率て喀喇烏蘇河西の小路より來ると額倫特、策旺諾爾布に移咨して接應せしめ遂に喀喇烏蘇を渡り狼臘嶺に至る侍衛色楞も亦兵を統て喀喇烏蘇に會す兩軍勝に乗り三處の山梁を奪ひ追殺すること二十里、二百餘人を殺す而して敵既に兵を分て我が後に出で餉道を截る官軍相持すること月餘、糧盡き矢竭き額倫特陣歿し從兵多く準噶爾に掠められ準噶爾の勢益々熾なり清廷之を聞き皇十四子允禔を撫遠大將軍と爲して進勦せしむ察罕丹津入覲し大軍に従て藏に赴んと請ふ清廷、撫遠大將軍をして之を善視せしめ且つ兵を以て其牧を護らしむ時に策凌敦多ト復た裏塘の營官、喇嘛等を誘て藏に入らしむ都統法喇、打箭爐に屯せり因て奏して云く裏塘より唐古特に至る皆瑚畢勒罕を敬せ

準噶爾の  
勢益々熾  
なり



り請ふ打箭爐の兵を移して裏塘に屯し機を相て準噶爾を勦せしめ復た索諾木達爾札をして營官、喇嘛等に諭し兵を裏塘に駐せるは瑚畢勒罕か郷衆を保護するの至意に出でたるを知らしめば裏塘境外は檄を傳へて定むべきなりと既にして大將軍請ふ所あり暫く今年の進兵を停め西寧に在りて駐紮し索諾木より柴達木に至るの間に五站を設けんと清廷其奏を許し唯々都統法喇、副將軍岳鍾琪をして綠旗兵六百を率ゐる先鋒となりて裏塘に赴かしむ第巴色布騰阿住、達瓦喇木札木巴等、抗して背て撫に就かず之を誅すること七人、檄を傳へて巴塘、察木多、乍雅の衆に宣諭す諸部落皆欵を納る進て巴塘を取り法喇、此に駐紮す策凌敦多ト懼れ掠むる所の兵を送り回し巴爾喀木より歸る云く唐古特には瘴氣あり準噶爾人久居に堪へずと唐古特の衆多く羅卜藏噶勒藏嘉穆錯を以て眞達賴と爲す清廷乃ち大將軍に命じて青海兩翼諸台吉に諭し大軍に隨ひ送て唐古特に還さしむ兩翼台吉皆命に應ず唯々清廷の王大臣等、藏地の險遠を憚り進兵の議を決せず聖祖以爲らく策凌敦多トか兵、遠道雪を衝き尙ほ能く藏に至る我が兵獨り赴くこと能はざるの理あらんや此時若し藏を安んぜずんば賊益々忌憚する所無けん大兵宜しく前進の議を決すべしと羅卜藏噶勒藏嘉穆錯を封して宏法覺衆第六世達賴喇嘛と爲し金印冊を賜ひ都統延信を平逆將軍と爲し青海及び内外札薩克阿拉善の兵を率ゐる護軍統領噶爾弼を定西將軍と爲し達賴を護し兵を率て拉里より進ましめ都統法喇は仍ほ調回して打箭爐に駐防せしむ策凌敦多ト中路より自から青海の軍を拒き宰桑を分遣し兵三千三百を以て南路を拒かしむ噶爾弼兵を三隊に分ち進て

準噶爾宰桑春不勒を章來爾戒に撃ち墨朱工喀に抵る第巴達克明、喇嘛鍾料爾等迎へ降る乃ち番を以て番を攻むるの策を用ゐる土司を招て前驅と爲し皮船を集めて河を渡り大小第巴頭目、各寺の喇嘛に宣諭し達賴の倉庫を封し敵の糧道を斷たしむ青海の軍も亦三たび中途にして營を劫せる敵を敗る準噶爾、進退敵を受け遂に大に潰え唐古特人康濟鼐、唐古特兵を集め其の多特に走るを偵して之を追撃し斬獲頗る多し又各寺の準噶爾喇嘛を索出し首たる者五人を斬り其餘は悉く監禁を行ふ遂に達木より進み新封達賴を藏に送る青海諸台吉皆從ふ阿曼伊什嘉穆錯を幽所より出して之を廢し新達賴を立て命じて兵二千を留めて青海に屯して偵禦せしめ明年、阿拉善王阿寶をして兵五百を以て藏中に駐せしめ署理定西將軍の軍に赴て參贊せしむ是より願實汗の子孫、種を西藏に絶ち復た汗を置かず四噶布倫を置て前藏、後藏を分轄せしむ

西藏の事纔に定まりて羅卜藏丹津の亂繼て起る羅卜藏丹津既に僭を襲て親王たり族中俱に眉を比ぶる者無く頗る驕志を抱く大軍既に西藏より歸りて諸台吉、軍に従ふ者皆賞あり察罕丹津功最も多くして和碩親王に晋封せられ額爾德尼額爾克托克鼐も亦多羅郡王に晋封せられ其餘も皆爵一級を晋めらる台吉車凌敦多布の如きは其母、所屬古特兵萬人を以て大軍に従はしめんと請ひ且つ糧餉を助献せしむ故を以て多羅貢勒を授けられ察罕丹津の從子輔國公丹衷も亦糧餉を助献し且つ兵を以て從て藏に入りしを以て固山貝子を授けらる而して羅卜藏丹津獨り晋む可きの爵無し意益々怏々たり西藏既に主無し



因て之に汗たらんを計り陰に策妄阿喇布坦に約して己を援けしめ以て顧實汗の故業を復せんと欲とし青海諸台吉を誘て察罕托羅海に會盟し悉く諸部をして故號に復し清廷の封爵を稱せざらしめ自から達賴理台吉と號して之を統べ聽かざる者は之を脅す貝勒朋素克旺札勒、輔國公濟克濟札布等敵せず其の脅從する所となる羅卜藏丹津因て其をして鄰牧邊界己に異なる者を掠めしむ羅卜藏察罕、車凌敦多布、拉察布及び土爾扈特台吉諾顏格隆、諾爾布等皆之に附く獨り察罕丹津は附かず將に與に難を構へんとす察罕丹津か牧は河東に在り松潘に近く羅卜藏丹津が牧は河西に在り布隆吉爾に近し川陝總督年羹堯豫め之を知り雍正元年七月、布隆吉爾に一城を築き兵を駐して之を鎮せんと請ふ時に羅卜藏丹津が反形漸く著る清廷の王大臣等、旨に遵て征討を議す會々羅卜藏丹津強て準噶爾貝勒色布騰札勒に兵を授けて西寧を掠めしむ色布騰札勒從はず使をして來り告げしむ清廷乃ち西寧、松潘の兵に命じて馳せ往て之を援けしむ拉察布は察罕丹津が從子なれども羅卜藏丹津に迫られ兵を以て察罕丹津が牧を掠む察罕丹津孥屬百餘を携て河州老鴉關外に奔る時に侍郎常壽、總理青海事務たり（今の西寧辦事大臣に同し）之を河州邊内に置く羅卜藏丹津又兵を以て河州界を掠む乃ち之を蘭州に徙す察罕丹津か屬額爾克札爾瑚齊は千餘戸を以て丹衷か宰桑噶隆色布騰達什は七百餘戸を以て皆相繼て來歸す羅卜藏丹津又兵四千を率て郡王額爾德尼額爾克托克托龍の牧を掠む托克托龍之を拒げとも敵せず亦妻を携へ間道より甘州に至り援を乞ふ其子阿喇布濟、索諾木達什等、衆を集めて應戰七日、敵始て退く乃ち間を得、兵五

百と賊屬千餘とを携へて來歸す署撫遠大將軍延信之を酥油口内に置く繼て鎮國公噶爾丹達什屬台吉阿旺達什、巴等を携へて甘州境に避く亦酥油口内に置く色布騰札勒及び輔國公車稜、弟班珠爾も亦從て至る之を西川口に置く察罕丹津の女婿台吉阿喇布坦、察罕丹津と相失し察罕丹津の宰桑巴圖等と戸千四百餘を携へ後れて至る時に清廷の議に以爲らく此れ族中相闘ぐ者のみ遽に兵を加ふ可らず先ず諭を傳へて兵を罷めしめ從はずして後に之を懲治せんと乃ち帝壽をして往て諭さしむ羅卜藏丹津詭て言ふ親王察罕丹津、郡王額爾德尼額爾克托克托龍等、唐古特に據らんことを謀り諸台吉服せず將に兵を興して與に勝負を決せんとするのみ清廷、其言狡猾、詰る可からざるを知り計を決して之を討し川陝總督年羹堯を撫遠大將軍とし四川提督岳鍾琪を奮威將軍とし以て其軍に參贊たらしめ大兵を統領し其罪を鳴らして之を討せしむ羅卜藏丹津又詭て兵を罷めんことを請ひ常壽を誘て察罕托羅海に至らしめ之を留執し叛黨をして西寧諸路を分掠せしめ番人を煽して應を爲さしむ副將軍阿喇納、吐魯番より急に噶斯に赴き其の穆魯烏蘇より藏に赴くの路を斷ち副將王嵩、參將孫繼宗等、賊黨を布隆吉爾、鎮海堡、申中堡、北川、新城等の處に撃ち岳鍾琪は松潘より西寧に至る途途五千里、雜谷土古の兵を以て歸德堡、上寺東策卜、下寺東策卜及び南川口外郭密諸番を勦し前鋒統領蘇丹等又之を協剿し到る處、捷を告げ悉く其の黨羽を剪る羅卜藏丹津始て懼れて常壽を送り回して罪を請ふ清廷許さず時に廷議以爲らく應に四月草生する時を期し直に進て之を剿すべしと岳鍾琪以爲らく青海の賊無慮十萬、今一萬七千を



以て之に當る宜しく其の不備に乗ずべし且つ塞外駐牧定處無し賊若し散して我を誘はゞ我反て四面に敵を受けん願くは精兵五千を借り馬之に倍し二月初を以て進發せんと之に従ふ明年、大軍至る色布騰札勒首として戸口二千餘を卒て迎へ降り署撫遠大將軍延信之を西川口に置く叛黨吹喇克諾木齊、札什敦多布等、噶斯に通る吹喇克諾木齊は叛を唱へし者なり朋素克旺札勒、達什車稜と偕に吹喇克諾木齊が宰桑都喇勒及び札什敦多布の母を執へて降を乞ふ岳鍾琪之に命じて吹喇克諾木齊を追剿せしむ果して擒にして至る羅卜藏察罕の屬台吉衰布色布騰、納罕伊什等を率て降り楚克賽納木札勒尋て車稜敦多布及び屬千餘戸を携て降を乞ふ拉察布は誅を懼れ巴爾喀木に奔る其子察罕喇布坦、晏舒克喇布理等迎へ降る其父を招て至らしむ諾顏格隆、諾爾布并に台吉根敦皆降を乞ひ且つ賊を剿して自から贖はんと請ふ岳鍾琪進剿し巴爾珠爾、阿喇布坦が烏蘭博爾克より遁れたるを偵し之を尾追すること一晝夜、伊克喀爾吉に至り其黨阿喇布坦鄂木布等二百餘人を擒にし西寧總兵黃喜林を遣り西爾哈羅色より柴達木に赴き噶斯の路を斷つ其黨の降れる者言ふ羅卜藏丹津は烏蘭木和爾に在りと相跡ること百六十里許、夜行、兵を分て馳撃し黎明にして達す敵猶ほ臥し馬未だ銜勒を施さず之を聞て驚起し皆潰走す羅卜藏丹津が母阿爾泰、妹阿寶を擒にす羅卜藏丹津擒に就かず其黨と偕に道を分て竄る而して侍衛達爾等、丹津琿台吉を華海子に阿布濟車臣台吉を布哈色布蘇に吹喇克諾木齊、札什敦多布を烏蘭克に擒にす羅卜藏丹津獨り番婦の衣を穿ち白駝に騎て遁れ準噶爾に走る官軍之を追ひ日に行くこと三百里なれども及ば

ず數日、桑賂海に至て歸る逆黨悉く糧して北京に至り獻俘禮を行ふ是役や喇嘛の叛に従ふ者多し時に塔爾寺の堪布諾門罕は察罕丹津の從子なりしも首として叛に應ず大喇嘛既に之に應ず其の輩、皆之に従ふ岳鍾琪之を知り先づ兵三千を以て西寧東北の郭隆寺(或は格爾弄寺に作る)を攻めて其の三嶺を奪ひ其の十七寨を焚き廬舍七千餘斬賊六千、石門、奇嘉、郭莽等の諸寺皆破る是より先、莊浪の西山二百餘里に亘り六族番あり其中に盤據し常に劫掠を事とす青海の事あるに當りて餉道を截り將吏を戕ひ屢々之を剿すれども東閃西匿して悉く掃ふ可らず是に至て再び岳鍾琪に命じて兵二萬を以て往て剿せしむ番賊、其の故智に狙れ老弱輻重牲畜を徒して盡く東山に置き唯々饒騎を留めて以て出沒に備ふ因て兵を二路に分ち一半を以て西山の隘に據り一半を以て夜、其東を襲ひ擒斬すること大半、即ち兵を止めて東山を守らしめ回て西山を攻む番族皆石堡城に聚る鍾琪乃ち夜、死士を遣り降番を以て教導とし繞りて其背に出て禽斬すること五千、番賊窮蹙して降を乞ふ是に於て青海全く平ぐ始て内札薩克の例に従ひ百戸に一佐領を置き百戸に及ばざる者は半箇佐領と爲し盡く札薩克を授けて之を領せしめ每族に協理台吉及び協領、副協領、參領各一を置く凡そ二十九旗、其の十九は皆八台吉の裔たり其餘、顧實汗の兄の裔一、弟の裔一、和碩特合て二十一旗、附收せる者、準噶爾族二、土爾扈特族四、輝特一、喀爾喀一而して諾門罕の徒衆も亦一に居る故に共に三十旗、分て兩翼と爲し左翼は東、西寧邊外棟科爾廟に至り西、嘉峪關邊外洮賓河界に至り南、西寧邊外博羅充克々の北岸より北、涼州邊外西



喇搭拉界に至り右翼は東、棟科爾廟より西、噶斯池界に至り南、松潘邊外漳臘嶺より北、博羅充克々の南岸に至る總て一盟と爲し毎歲一會盟、西寧辦事大臣蒞みて之を監す其の貢期は三班に分ち九年に一周せしむ其の市易は西寧の西川口外納喇薩喇(即ち日月山)山下に集らしめ擅に邊に入る者を禁ず皆西寧辦事大臣の管理する所なり此の三十旗以外の地は番族之に居り陝西(今は甘肅)屬の甘州、涼州、莊浪、西寧、河州、四川屬の松潘、打箭爐、裏塘、巴塘、雲中屬の中甸等の地、此族蔓延、殆ど其數を知らず大抵租を青海諸台吉に納れ復た廳、衛、營伍諸官あるを知らず是に至て悉く土司、千戶、百戶、巡檢等の職を設け附近の道、廳、衛、所をして之を轄せしめ其の巴爾喀木の地は之を四川、雲南兩省に分屬す又是より前各大寺の喇嘛の數多き者、數千、少き者も猶ほ五六百に下らず皆多くは亂に従ふ是に至て西寧の塔爾寺に老成の者三百を選びて之を置き各、印照を給し毎年查察すること一次、其餘の廟舎は二百に過ぐることを得ざらしむ番民の糧賦は地方官をして管理せしめ各寺の用度を量りて之を給し城堡數十を築き蒙古をして妄に之に據らしめず又察罕諾們廟には私に聚りて事を議することを禁じ凡そ官を遣り敷を齎して往く者には爵秩の高卑を論せず王公以下皆跪て之を迎へしめ背貳する者あれば必ず懲す是より青海蒙古、今に至り馴柔猫の如し而して蒙古の黑番を畏るゝことは反て虎の如しと云ふ

其の附牧の準噶爾族綽羅斯二旗、輝特一旗、土爾扈特四旗、喀爾喀一旗は初、皆和碩特に隸屬し別に

札薩克を授けられず其の各々旗隊成せるは大抵羅卜藏丹津の亂後にして衆建分立して以て其勢を削れるなり初、準噶爾の噶爾丹が父巴圖爾琿台吉の死し僧格の嗣ぎしや其の異母兄車臣、卓特巴巴圖爾二人之と産を争ひ遂に僧格を殺して之を奪ふ噶爾丹西藏より歸り僧格が爲に仇を復し車臣を殺す卓特巴巴圖爾之を避けて青海に奔り遂に和碩特に依る噶爾丹死して清廷、青海諸台吉を招撫す時に卓特巴巴圖爾已に死して其子色布騰札勒尙ほ幼し康熙四十二年、始て入覲し多羅貝勒に封せらる雍正元年、羅卜藏丹津之を脅かして叛せしむれども從はず反て陰に使を遣はして變を告げ且つ叛黨を開諭して罪を悔て内附せしむ清廷因て多羅郡王に晋封し既にして一札薩克を授く此を南右翼頭旗とす卓哩克圖和碩齊と云ふ者あり亦巴圖爾琿台吉が子なり噶爾丹の亂を避け徒て青海に居る四子あり其の季子を納木奇札木禪と曰ふ阿喇布坦を生む和碩特の察罕丹津、女を以て之に配す康熙五十五年入覲し公品級一等台吉と爲し殊に札薩克を授け其族を領せしむ雍正三年、輔國公に晋封せらる阿喇布坦死し其子納木札勒車凌襲ぐ乾隆十五年、青海より唐古特に赴き喀喇烏蘇に次し珠爾默特納木札勒が叛を聞て馳て布達拉城に赴き達賴喇嘛を護視す亂定まりて功を以て固山貝子に晋封せらる此を北中旗とす以上二旗は皆綽羅斯族

明末清初の際、土爾扈特部長果鄂爾勒克(是は和鄂爾勒克に作る)の俄羅斯に奔るに當り其の第三子保蘭阿噶勒琥及び第四子莽海兩人は偕に青海に奔りて和碩特の寓公たり順治八年、莽海の次子博第蘇克



始て貢を清廷に通じ自から青海土爾扈特台吉と稱す雍正元年、羅卜藏丹津の亂に諾顏格隆と云ふ者あり乃ち其裔なり初、羅卜藏丹津に従ひ後、降を乞ひ岳鍾琪に従て叛を平げ事定まるの後、其の沙門の法を習へるを以て叛に従ひし罪を宥して問はず是より土爾扈特始て別に旗隊を編む其の南中旗は保蘭阿噶勒琥の裔、索諾木喇布坦多爾濟、雍正三年を以て札薩克一等台吉を授けられ其の西旗は莽海の裔諾爾布、罪を悔いて歸順し雍正二年、札薩克一等台吉を授けられ九年、復た叛し汎馬を盜掠し奔て袞阿爾台庫克烏蘇に移る其弟色特爾布亂に従はず又兵を以て逆黨を剿す因て銀幣を獎賜し諾爾布の爵を襲かしむ其の南前旗は貝果鄂爾勒克の弟翁貴の子特穆納(果鄂爾勒克の從兄弟)保蘭阿噶勒琥に隨ひ偕に和碩特に寓す其孫察罕喇布坦、雍正元年、察罕丹津に従て來歸し一等台吉を授けられ九年、諾爾布に従て亦叛す其弟達爾札從はず察罕喇布坦尋て擒に就きしも死を免じて之を西寧に圈禁し達爾札をして其爵を襲かしむ其の南後旗も亦特穆納の裔にして拜博と云へる者なり特穆納の孫なり額爾克濟農と稱す其子丹忠、額爾德尼濟農と稱す羅卜藏丹津の叛せしや丹忠を脅せども亂に従はず故を以て雍正三年、札薩克一等台吉を授けらる以上四旗は皆土爾扈特族

其の輝特一旗は第巴と云へる者あり輝特台吉卓哩克圖和碩齊の子なり和碩特に付き青海に遊牧す其子貢格、羅卜藏丹津の脇誘に従はず昆弟子姪を率て大軍を迎へ又助て逆黨を剿す雍正三年、札薩克一等台吉を授けられ九年、土爾扈特台吉諾爾布を擒せし功を以て輔國公に晋封せられ乾隆五十六年、貢格

南中旗

西旗

南前旗

南後旗

南旗

南右旗

の曾孫達瑪璘廓爾喀を征せし時、臺站を巡綽せる功を以て再び晋められて貝子品級を賜ふ此を南旗と稱す

其の喀爾喀一旗は格時森札々爾の季子鄂特歡諾顏より出で其の次子多爾濟阿喇布坦伊勒、登噶爾丹の亂を避け従て和碩特に寓牧し後數世復た故地に歸らず遂に青海に居る羅卜藏丹津の亂に納克額爾德尼阿海と云へる者あり其の從子根敦と偕に大軍を迎へて降る亂定まりて雍正三年、清廷、根敦に札薩克一等台吉を授く既にして根敦酒を嗜み且つ本部諸台吉と相好からず札薩克の任に堪へざるを以て之を罷め命じて喀爾喀の舊に復せしめ其の族人通譯克の收に附せしむ既にして又其の析居に忍びず訥克額爾德尼阿海の子達什敦多布に札薩克を授け公中札薩克と爲し缺あるときは族中の任に堪ふる者を選びて之に任す此を南右旗とす

案するに青海の各旗、爵號旗稱佐領の數は左の如し

|         |             |      |       |         |         |    |
|---------|-------------|------|-------|---------|---------|----|
| 和碩特二十一旗 |             | 佐領の數 | 西右翼前旗 |         | 札薩克一等台吉 | 二  |
| 西前旗     | 札薩克親王品級多羅郡王 | 八    | 西右翼後旗 | 札薩克一等台吉 | 一       |    |
| 西後旗     | 札薩克多羅貝勒     | 九    | 西左翼後旗 | 札薩克一等台吉 | 一       |    |
| 西右翼中旗   | 公中札薩克一等台吉   | 一    | 前頭旗   | 札薩克多羅郡王 |         | 十一 |



|       |             |   |        |            |     |
|-------|-------------|---|--------|------------|-----|
| 前左翼頭旗 | 札薩克多羅郡王     | 九 | 東上旗    | 札薩克一等台吉    | 一   |
| 北前旗   | 札薩克輔國公      | 二 | 綽羅斯二旗  |            |     |
| 北右翼旗  | 札薩克固山貝子     | 六 | 南右翼頭旗  | 札薩克多羅貝勒    | 四   |
| 北左翼旗  | 札薩克貝勒品級固山貝子 | 三 | 北中旗    | 札薩克固山貝子    | 二個半 |
| 北右末旗  | 札薩克一等台吉     | 二 | 土爾扈特四旗 |            |     |
| 北左末旗  | 札薩克一等台吉     | 四 | 南中旗    | 札薩克一等台吉    | 四   |
| 南右翼中旗 | 札薩克一等台吉     | 五 | 西旗     | 札薩克一等台吉    | 四   |
| 南右翼後旗 | 札薩克輔國公      | 四 | 南前旗    | 札薩旗一等台吉    | 一   |
| 南右翼末旗 | 札薩克一等台吉     | 一 | 南後旗    | 札薩克一等台吉    | 三   |
| 南左翼中旗 | 札薩克一等台吉     | 四 | 輝特一旗   |            |     |
| 南左翼後旗 | 札薩克輔國公      | 一 | 南旗     | 札薩克貝子品級輔國公 | 一   |
| 南左翼末旗 | 札薩克一等台吉     | 二 | 喀爾喀一旗  |            |     |
| 南左翼次旗 | 札薩克一等台吉     | 九 | 南右旗    | 公中札薩克一等台吉  | 一   |

以上共計二十九旗、之に察罕諾們罕の一旗を加へ總て三十旗、其の二十五旗は黃河の北に在り其

の五旗は黃河の南に在りと云ふ

二 阿拉善の和碩特及び額濟納の土爾扈特

阿拉善部額濟納部は俱に河套の西に在り故に西套と稱す而して阿拉善部は甘肅省寧夏邊外に在り袤延七百里、漢に在ては北地郡の西境及び武威、張掖二郡の北境、唐代河西の節度使に屬す蓋し匈奴、突厥等か往來出沒の要地たり唐末、吐蕃に陥り宋、西夏に入る元人之を合申と稱す合申は河西の轉訛なり元、合申を滅し甘肅行中書省に屬す明初、故元の殘兵を亦集乃に蕩平し嗣後復た蒙古の患を聞かざること久し中世以降、鞏固強盛にして套部漸く騒く正徳の初、亦不刺之に據る故に今に至て其の西境に亦不刺山あり既にして其主小王子と相攻殺し敗して哈密に走る嘉靖中、小王子の孫吉囊、俺答等、亦不刺の屬を逐て其の子孫、河套、青海の間に蔓延す明の末世、吉囊、俺答の裔衰へて和碩特の願實汗兄弟、西北額魯特部より起りて分れて兩枝となりて東南に移り一枝は西套に入り一枝は青海に入る青海に入りしは願實汗是なり西套に入りしは拜巴噶斯是なり拜巴噶斯は願實汗の仲兄たり始、子無し願實汗の子巴延阿布該阿玉什を養て子と爲す此を達賴烏巴什と稱す既にして拜巴噶斯自から二子を擧ぐ長を鄂齊爾圖と云ふ拜巴噶斯死して鄂齊爾圖嗣く然れども達賴烏巴什仍は從て西套に在り既にして願實汗死す鄂齊爾圖代て汗となり諸衛喇特に長たり此を車臣汗と稱す和碩特原と準噶爾と世婚なり鄂齊爾圖二孫女あり阿努、阿海と云ふ阿奴を以て準噶爾琿台吉の子僧格に妻し阿海を以て其の子策妄阿



喇布坦に許す僧格死して其弟噶爾丹、準噶爾に歸り阿奴を以て妻と爲し又兼て阿海を奪ふ然れども猶ほ鄂齊爾圖の汗位を篡はんと欲し遂に西套を襲ひ鄂齊爾圖を殺し自から博碩克圖汗と號し諸衛喇特を脅かして悉く其命を奉せしむ是に於て西套の和碩特、圖族潰散し或は奔りて達賴に依り或は掠められて噶爾丹に従ふ而して達賴烏巴什已に死して其子告囉理、巴圖爾額克爾濟農と號し時に族中の巨擘たり亂を避けて大草灘に居り廬帳萬餘、頗る盛なり大草灘は甘肅の邊内に在り守汛の吏之を遣りて去らしむれども去らず水草を逐て移り去りて復た來る而して青海台吉も亦噶爾丹の暴掠を懼れ鍋帳を携へて大草灘に避くる者あり撫遠大將軍圖海乃ち飭して各々其の故巢に歸らしむ和囉理、靖逆將軍張勇に請て曰く亂を避けて青海に赴かんとすれども邊外道遠くして且つ水草に乏し請ふ内地より行かんと張勇乃ち旨を請ひ水泉口よりして邊を過ぎ去らしむ然れども和囉理猶ほ大草灘を戀ひ草盡きて北に従り復た青海に赴かず既にして又噶爾丹か布隆吉爾に屯せるを聞き其の已を襲はんことを慮り雙井口より避けて内地に入る時に張勇、甘州に屯す清廷命して親から臨みて驅遣せしむ和囉理乃ち謝して去り徙りて額濟納河邊に遊牧す

案するに秦邊紀略涼州北邊に水泉堡、巒嶂者、焉支、祁連也、連、哇接、町者、大草灘也、注に大草灘在焉支之南、北長城在北十里、當西峽山之下、土脆牆卑、缺竇甚多、南欲踰垣以出者、黃城大草灘之夷也、北欲穿穴而入者、北面臨賀山、昌寧湖之夷也、又肅州北邊に雙井堡、大道平原、

邊類濠湧、交衢行且危輻也と云へり

是時に當り西套和碩特の屬、皆未だ牧地を得ず往來遊牧、東西復た定處無く邊境を侵掠する者一にして足らず準噶爾族巴哈班第の子罕都の和囉理の甥なり年十三、其父、私憾を以て噶爾丹に殺さる族人額爾德尼和碩齊之を携て逃れ途にして烏喇特の人畜を掠め賣れて和囉理に就く青海の墨爾根台吉之を聞き使をして之を詰り其の掠むる所を歸さしむ和囉理の弟土謝圖羅卜藏博第も亦寧夏及び茂明安、鄂爾多斯諸部を掠む喀爾喀台吉畢瑪里吉哩誦偵して之を知り以て清廷に告ぐ詞、和囉理及び青海台吉茂濟喇克等に連なる清廷是に於て使を和囉理の處に遣り烏喇特を掠めし罪を責め又青海の達賴巴圖爾墨爾根台吉等に諭して曰く近ごろ聞く額魯特の衆、額濟納河に侵處すと爾等其れ汝の國律に照して治罪せよと而して和囉理茂濟喇克等、實は皆初より與かり知らざるなり然れども和囉理、馬百餘を獻して其の弟の爲めに罪を謝し又額爾德尼和碩齊が己に牧を徙して去れるを以て其の掠めし所にして未だ售られざりし者十八人を察出して之を歸す清廷、和囉理、茂濟喇克が罪無きを知りて之を許し噶爾丹に檄して額爾德尼和碩齊を收捕せしめ且つ和囉理等を收めて其牧處を得せしむ既にして和囉理、使を遣はして入貢せしむ清廷之を納る和囉理又前年缺貢の馬を補て至らしむ其母格楚爾哈屯及び弟土謝圖羅卜藏博第等も亦使を遣はして至らしめ自から其罪を謝し且つ寧夏に赴て市易せんことを請ふ清廷因て其罪を問はず唯、其の市易を許さず和囉理徙て河岸に牧し漸く鄂爾多斯に逼る鄂爾多斯貝勒松喇布以



聞す清廷命して退去せしむ既にして罕都、額爾德尼和碩齊等も亦使をして來り貢せしめ且つ罪を請ふ清廷宥して其責を納る

案するに西套額魯特、噶爾丹に破られ其の定牧を失ひ東西意に任せて遊牧し始と常處無し故に秦邊紀略の註に載する所部落無定と云ふ者多くは此屬なり而して其屬甚だ多かりしことも灼し秦邊紀略肅州北邊新城堡の註に今夷之遊牧于北邊者、不可勝紀、其各有分地者、載于分地之條、其往來西北、住歇于新城之水頭者、曰巴都兒台吉、同此名者有三、又有色者長素、曰占木素台吉、曰桑格思巴台吉、有曰額力刻綽爾吉、同此名者有有曰答力漢綽爾吉、曰倒朗色稜台吉、曰倒朗色稜台吉、曰阿要台吉、曰答裡吳麻把什、曰渾都魯台吉、曰滿吉大台吉、曰額客慶台吉、曰胡隆木台吉、曰撥討台吉、曰額爾德尼合首氣台吉、其目之多如是則部落之衆可知矣とあり此内青海諸台吉を混入す今譯音に因りて之を推すに額客慶台吉は額琳沁達什(青海の墨爾根台吉が子)胡隆木石は瑚噶木什、額爾德尼合首氣は即ち額爾德尼和碩齊なり他處の註或は爾定合首氣に作り爾爾合首氣に作る皆同し此外始と知る可からざるも皆青海西套兩部の諸台吉なるべし又涼州北邊近疆昌寧湖に今夷祝靈等部落、往來遊牧者甚衆、寧夏近疆銀盤水に今夷人祝靈、勞藏、克氣三部住牧など註せる祝靈は即ち濟農の異譯にして和囉理を指し勞藏は羅卜藏の異譯にして和囉理か弟羅卜藏博第を指し克氣は即ち克奇にして和囉理か妹夫なり

初、鄂齊爾圖車臣汗の殺されしや其孫羅卜藏衰布阿喇布坦亂を避けて唐古特に奔り達賴喇嘛に依る既にして達賴に因て龍首山に居り西套の遺衆を轄せんことを請ふ清廷、兵部督補理事官拉都城を遣りて其地を勘せしむ還りて奏す龍頭山の地、内地の兵民耕牧すること已に久し新附の蒙古をして之に居らしむ可らざるに似たりと清廷其奏に従ひ之を允さず羅卜藏衰布阿喇布坦尋て徙りて布隆吉爾に牧す土謝圖汗察理多爾濟は其の嬖戚なり故に女を以て之に妻す適々和囉理、勅印を賜て部衆を鈴束せんことを請ふ廷議、遊牧未だ定らざるを以て亦允さず因て論して羅卜藏衰布阿喇布坦と一處に完聚せしむ和囉理因て奏す達賴喇嘛も亦謂ふ布隆吉爾は地隘く草惡し臣と同處するに若かず願くは阿拉克山陰に環居し以て寇盜を遏めて邊疆を靖んせんと阿拉克山は即ち龍頭山なり清廷乃ち達賴に諭し使を遣はして偕に遊牧地界を議定せしむ尋て康熙二十四年、和囉理其屬七百餘人を率て入朝す其の二百人を許して入關せしめ餘は歸化城に留む明年、和囉理入京す清廷厚く之を待し因て牧を阿拉善の地に賜ふ即ち古の賀蘭山なり而して達賴の使人も亦至る是に於て又拉都城に命して往て地界を會勘せしむ乃ち寧夏所屬の玉泉營西羅薩克山嘴後、賀蘭山陰に至る一帶布爾哈蘇台口、又寧夏所屬の倭波嶺塞北努渾勞魯山後、甘州所屬の鎮番塞口北沁陶蘭泰薩喇椿濟、雷理希理等の地、西向額濟納河に至るまでを劃し俱に邊を去ること六十里を以て界と爲し地を規して之を標し又罰例を議定し蒙古人、邊民を殺せば死を以て罪を論じ牲畜を盗み飲食の物を奪へば之を鞭ち私に邊に入て遊牧する者は台吉及び宰桑ならば



各、罰牲畜とし所屬部衆、科を犯す者あるときは一次毎に濟農に罰五九牲畜を課せしむ地界罰例皆定まりて阿拉善和碩特の游牧始て決す時に罕都額爾德尼和碩齊等も亦和囉理と同牧せんことを請ひ羅卜藏衰布阿喇布坦は噶爾丹の妻阿努(即ち其姉)が兵千人を携へて西藏に赴かんとして道、嘉峪關を經と聞き其の己を襲はんことを懼れ之に備ふるの故を以て即ち往らず既にして噶爾丹、喀爾喀を侵す和囉理察理多爾濟を援けんと欲し師を清廷に請ふ清廷既に罷兵使を發せるを以て許さず羅卜藏衰布阿喇布坦も亦專理多爾濟を援けんと欲し兵既に發す然れども途にして罷兵使に遇ひ撤して布隆吉爾に歸る未だ幾くならざるに羅卜藏衰布阿喇布坦死す嗣無し其妻及び宰桑等、其の從弟噶爾賈多爾濟をして其衆を轄せしめんことを請ふ時に噶爾賈多爾濟、準噶爾界に在り所部の饑を以て即ち往ること能はず清廷、和囉理をして布隆吉爾に赴く其衆を管せしむ噶爾賈多爾濟尙ほ幼し其母之を携て至る乃ち命して其衆を轄し阿拉善部に附牧せしむ而して罕都の屬拜達、額爾德尼和碩齊と又偕に其主を誘ひ和囉理を棄て私に額魯特千人を以て邊番を掠む守汛者之を誅れば則ち殺して官軍に抗す甘肅提督孫思克兵を以て邊に屯し將に進て之を剿せんとなす罕都恐れて降る仍ほ其罪を宥して阿拉善に附牧せしむ既にして罕都の叔父羅卜藏額琳沁、準噶爾より至り奏すらく噶爾丹に執禁せらるゝこと十餘年、今其の喀爾喀と戰ふの間に乘りて脱歸すと孛屬千人を携ひ罕都と同居せんことを請ふ之を許す尋て輝特屬羅卜藏も亦亂を避け噶爾賈多爾濟に従て内附す皆阿拉善部に附牧せしむ

噶爾丹の喀爾喀を侵し、や清廷其の阿拉善に逼らんことを慮り和囉理に諭して内從せしむ會、其の部衆に喀爾喀部丹津額爾德尼の牧を掠めし者あり之を拒めば格殺して之を奪ふ清廷益々其の阿拉善に置くの危きを察し命じて先ず歸化城に徙し將に以て之を察哈爾に附牧せしめんとす先づ寧夏兵をして之を防護せしむ西安將軍尼雅漢、命を聞けども即ち赴かず旬餘にして始て赴く至れば則ち大軍至ると聞て討を懼れ已に衆を率て竄れて在らず詭て稱す西喇布里圖に駐りて命を待つと尼雅漢、人をして諭さしめて曰く大兵の來るは汝を討するに非ず實に喀爾喀の汝を擾さんことを慮れるが故のみ而るに汝此の如し豈に悖らずやと和囉理從はず遂に噶爾賈多爾濟、羅卜藏額琳沁、罕都等と偕に道を分て竄去す尼雅漢追て庫克布里圖に至る及はず其の所部の牧産を獲て歸り且つ噶爾賈多爾濟の屬納木喀班爾等五十餘戸、和囉理の妹夫克奇及び從者二十一人を招降す清廷命して之を歸化城に置き獲る所の牲畜を以て丹津額爾德尼に給し鄂爾多斯、烏喇特、喀爾喀をして各々兵を備へて其の侵略を防がしむ時に和囉理の弟博第、中衛邊外に游牧す阿拉善を去ること三百里、其兄の遁れしを開き又往て之に會せんと欲す副將陳祚昌が昌寧湖に屯するを知り其子索諾木を軍に遣り詭り謂はしむらく願くは道を假りて南山に詣らん若し許されずんば請ふ馬を昌寧湖に牧せしめよと祚昌其の軍を緩むるの計たるを知り屬を携へて歸化城に至らしむれども從はず乃ち之を撃つ千五百餘級を斬る博第僅に身を以て免れ伊巴賴に奔り和囉理の屬台吉齊奇克に遇ひ糧と馬とを借りて額濟納河に竄る既にして和囉理罪を悔い屬二千餘を携



へ額濟納河の明安雅瑪圖に棲收す三十一年西安將軍瑪拉、侍衛阿南達を遣りて往て和囉理を招かしむ和囉理乃ち所屬二千二百餘口を率て降を乞ひ且つ子をして入朝せしめんことを請ふ廷議其の違違の計ならんことを慮る瑪拉奏す和囉理、朝廷の仁恩に感じ復た悻棄するに忍びず故に招檄甫て至て自から疑はず臣親しく和囉理及び色目五十餘人を率て寧夏に至る其屬餒甚し請ふ糗糧を給し且つ鄂爾多斯をして送りて歸化城に至らしめんと之を許す和囉理是に於て其の次子育木春を携て入覲し泣て罪を謝す因て復た牧を阿拉善に賜ふ羅卜藏額琳沁、罕都、齊奇克等も亦從て降り既にして又叛き去る孫思克、潘育龍を遣り追て庫勒圖（或は庫列圖嶺に作る）に至り四十餘級を斬り百二十人を擒にす齊奇克も亦擒中に在り獨り羅卜藏額琳沁、罕都は逸去し道にして青海より來歸の喀爾喀台吉阿海岱青班第に遇ひ其資を掠めて哈密に竄す明年、博第も亦屬百餘人を率て降り仍は其兄の牧に附せんことを請ふ之を許し因て和囉理をして潰衆を輯收せしむ未だ幾ならざるに齊奇克又叛き去る和囉理所部の衆を遣りて之を追ひ諭して降らしむ從はず乃ち擊て之を斬る

噶爾丹の敗竄せしや清廷、副都統阿南達に命し和囉理が屬を額布格特、阿木格特、昆都倫、額濟納及び布隆吉爾の博羅椿濟、敖齊、喀喇莽奈等の地に分屯せしむ和囉理、兵千餘を督し阿爾泰の土魯圖に赴て紡緝す時に噶爾竄多爾濟竄れて嘉峪關外に徙る阿南達其の哨卒を召し歸て噶爾竄多爾濟に説かしめて曰く上、汝を待つこと恩甚だ厚し將に汝を撫育せんとするに汝反て叛き逃る豈に可ならんやと噶

爾竄多爾濟還り報せしめて曰く我今罪を悔い死せんと欲するも我幼にして我か母一婦人、未だ天朝に達すること能はず乞ふ情を以て代表せよと阿南達之を聞き其の内附の志を堅くせしめんと欲し又遣歸して約せしむらく期の如くは肅州に會せよと噶爾竄多爾濟果して宰桑阿約等をして降表を責して肅州に至らしむ時に聖祖、寧夏に幸す阿南達馳奏す聖祖命して其衆を優恤せしむ噶爾竄多爾濟、阿南達に謂て曰く噶爾丹は共に天を戴かざるの讎なり願くは力を効して軍に従ひ以て殊思に答へ且つ私讎を復し軍事終るを待ちて入覲せんと阿南達上聞し清廷之を許す噶爾丹が妻は其の姉なり噶爾丹乃ち之を誘はんと欲し人をして噶爾竄多爾濟に説かしめて曰く爾が姉存せし日言ふ必ず我か女鐘濟海を以て爾に配せんと今阿努死せり爾、我か女を娶らんや否やと策妄阿喇布坦之を聞き書を噶爾竄多爾濟に與へて曰く我等實に叔姪たり而も噶爾丹不義を行ひ以て至親を棄つ今使を遣り爾を招くも亦爾を誑かすの計のみ爾妄に従ふこと勿れと未だ幾ならざるに西藏の第巴桑結將に噶爾丹を助けんとし青海の諸台吉を煽動し又噶爾竄多爾濟に檄して往て會せしむ噶爾竄多爾濟辭して赴かず自から兵百人を携へて阿南達に布隆吉爾に會す阿南達乃ち其をして哨を布隆吉爾に設けしむ既にして其の屬人阿勒達爾霍什哈等に煽惑せられ又遂に叛し西欣驛に至り汎馬を劫掠し其母を奉じ喀喇烏蘇より準噶爾に通る阿南達、兵四百を遣りて之を追ははしめしも及ばず因て其屬茂海、烏訥思巴圖爾、阿喇木札木巴、阿喇木班及び輝特台吉羅卜藏等を招降し阿拉善に遣歸す羅卜藏は後に喀爾喀に移る即ち札薩克圖汗部附牧の額魯特是な



り和囉理、達爾漢噶布楚、車臣宰桑等を遣り青海に赴き其の戚屬を收めしむ歸るとき鎮海堡に抵り守臣に就て糧と馬とを乞ふ給せず其の牲畜に乏しく遊牧に至るを得ざらんことを懼るゝの情を以て告ぐ乃ち命して之を與へしむ和囉理已に其戚屬を得、其の所部の屢々叛き去るを憂へ四十九旗内札薩克の例に依り佐領を編まんことを請ふ廷議或は言ふ之を烏喇特に移すべしと清廷仍ほ之を阿拉善に置き和囉理を封して多羅貝勒とし之に札薩克の印を給して其衆を轄せしむ清廷、策妄阿喇布坦に諭し噶爾賈多爾濟に許すに備はるを責むるの意無きを以てし策妄阿喇布坦に附くも内附するも均しく其便に隨はしむ然たども噶爾賈多爾濟、陽には策妄阿喇布坦に附き陰には之を疑ひ策妄阿喇布坦が哈薩克を侵すに乘じ詭て兵を以て従ふの狀を装ひ中道より南路庫車に奔り遂に回子の殺す所となる其母、餘屬九百を携へ青海に投ず青海諸台吉之を清廷に献す清廷之を什巴爾台に置き察哈爾に隸せしむ初、鄂齊爾圖汗に三子あり長子額爾德尼は噶爾賈多爾濟を生じ次子噶爾第巴は羅卜藏袞布阿喇布坦を生む第三子は伊拉古克三班第達胡圖克圖、曾て清廷の罷兵使として反て噶爾丹が爲に謀り執へられて戮となる羅卜藏袞布阿喇布坦既に嗣無く噶爾賈多爾濟も亦殺されて死す是に由て鄂齊爾圖汗の裔遂に絶えたり康熙四十八年、阿拉善札薩克貝勒和囉理死す第三子阿寶嗣ぐ是より前、阿寶、郡主を尙し和碩額駙授けられ第を京都に賜ひ御前行走たり是に至て命して遊牧に遣歸す既にして策妄阿喇布坦漸く驕横なり清廷、右衛將軍費揚古をして推河に駐紮せしめ阿拉善貝勒阿寶に命じ所部の兵五百を率て軍務を參贊

せしむ準噶爾遁げ去る阿寶に命じて仍ほ參贊を以て兄の子鎮國公羅卜藏達爾濟と偕に西安將軍席柱に會し巴里坤に駐し以て準噶爾を伊勒布爾和碩、阿克塔斯、烏魯木齊諸地に襲撃せしむ既にして準噶爾兵を潜めて遠く西藏を襲ふ清廷、都統延信に命じて平逆將軍と爲し阿寶をして巴里坤より青海に赴き之が參贊たらしむ延信青海より出で準噶爾の將策凌敦多布を敗り新達頼を送りて藏に入る藏中悉く平く因て阿寶を留め兵五百を統へ藏中に駐して署理定西將軍策旺諾爾布元年、駐藏兵を撤す阿寶、藏より歸る適々青海の羅卜藏丹津が亂あり年羹堯、時に撫遠大將軍たり清廷諸路蒙古の兵に命じて其の撤調に従はしむ年羹堯、阿寶の功を忌み且つ其の大將軍たるを以て頗る之を藐視し奏すらく阿寶が兵、用に堪はず應に游牧に遣歸すべしと未だ幾ならず阿寶入朝す世宗之を慰撫し多羅郡王に晉封し銀萬兩を賜ふ阿寶因て奏請すらく青海の曠地を賜ひ臣をして青海諸台吉を鈐轄せしめ復た其をして異志を萌さざらしめんと清廷乃ち青海貝子丹衷が所遺の地博羅充克々を給して青海諸族を鈐束せしめ年羹堯に命じて餉を齎して其の移牧を助けしむ丹衷は青海台吉根特爾が子、嗣無くして地を献せし者なり阿寶其他の狹隘なるを以て後、復た擅に烏蘭穆倫及び額濟納河に徙る清廷議して之を罰し其の郡王の爵を削り尋て之を阿拉善の舊牧に復せしむ八年、靖邊大將軍傅爾丹、科布多に屯す清廷又阿寶をして所部を率て西路の大軍に巴里坤に會せしむ時に内札薩克の兵噶斯に赴調せる者千人、皆其の節制に歸せしめ命ずらく力能く準噶爾を剿す可くんば即ち率て往け否らずんば邊に入りて綠旗兵と偕に内汛に防



げと阿寶、其子衰布を遣り所部五百人を率て巴里坤に赴かしむ會々寧遠大將軍岳鍾琪入覲す準噶爾之  
 を偵知し宰桑禡木特をして兵二萬を以て科合圖嶺に出で、之を掠めしむ總兵樊廷等兵二千之を防ぎ轉  
 戰すること七晝夜、衰布、鄂爾多斯台吉定哨喇什と偕に兵を率て往援す禡木特敗れ歸る清廷之を聞き急  
 に北路副將軍查弼納に命じ馳せて西路の軍に赴かしむ準噶爾逃れ去る阿寶乃ち還る清廷、衰布を論獎  
 し明年、輔國公に封じ游牧に歸らしむ岳鍾琪奏請し暫く留りて巴里坤に屯せしむ未だ幾ならず又固山  
 貝子に晋封し御前行走、三眼孔雀翎を賞す

乾隆百年、阿寶死す次子羅卜藏多爾濟襲亦く郡主を尙し多羅額駙を授けらる二十一年、青滾哨ト、和  
 託輝特の衆を率て叛く羅卜藏多爾濟兵千人を率て北路の軍に赴き定邊左副將軍成衮札布に從て之を剿  
 す北路既に平ぐ更に命じて兵五百を率て西路に赴かしむ羅卜藏多爾濟自から駝馬糶糧を備へ馳て巴里  
 坤の軍に抵り阿睦爾撒納の阿卜克特に走れるを偵し副都統愛隆阿と分道馳擊、塔爾巴哈台に抵り輝特  
 族巴雅爾が險に據れるを謀し之を捕へんとす巴雅爾遁る尾擊六日、愛唐蘇に次す哈薩克兵二百餘、俄  
 に出で、道を遮る羅卜藏多爾濟僅に數騎を隨へ之を應擊す哈薩克降を乞ひ巴雅爾擒に就く清廷其功を  
 賞し多羅郡王に晋封し參贊大臣を授く二十三年、又定邊右副將軍車布登札布に從て哈薩克錫喇、布庫  
 察罕等を剿し和落霍斯に抵り驟に之を擊て布庫察罕の黨阿都齊を獲、兵を進て布庫察罕が哈薩克に走  
 りしを偵し將に往て之を索めんとす定邊將軍兆惠、檄して兵を以て阿勒坦額默勒に屯せしむ尋て哈薩

克來て布庫察罕を献す清廷乃ち羅卜藏多爾濟をして暫く牧に歸て休養せしむ固く留軍を請ふ乃ち慰諭  
 遣歸し三眼孔雀翎を賞す二十四年、大軍の大小和卓木を剿せしや羅卜藏多爾濟、羊五千を献じて軍糧  
 を助く大軍旋る飲至禮を行ひ羅卜藏多爾濟が形を紫光閣上に圖し三十年、和碩親王に晋封し元狐裘、  
 黃轡を賞給せらる四十六年、清廷、羅卜藏多爾濟に命じ兵五百を督し蘭州に赴き大軍に從し薩拉爾の  
 叛回を華林寺に剿せしむ四十八年、死す子旺沁班巴爾襲く明年、寧夏の副都統を授けらる將に任に赴  
 かんとして石峰堡底店に抵る叛回驟に起ると聞き駐防滿兵及び阿拉善兵を選び馳て大軍に赴き賊を剿  
 す清廷又之を嘉し命じて自から其弟を擇び名を以て聞せしむ旺沁班巴爾其の二弟瑪哈巴拉、雲丹策登  
 を遣りて入覲せしむ清廷、瑪哈巴拉に公品級一等台吉を授く旺沁班巴爾初、郡君を尙し固山額駙を授け  
 らる郡君死す繼て縣主を尙し多羅額駙を授けられ御前行走、雙眼孝雀黃馬褂を賞給せらる凡そ額魯  
 特蒙古の清廷に於ける阿拉善王より親きは莫し故に今に至りて其の勳戚與に比肩する者莫しと云ふ  
 額濟納は漢の居延の地たり張掖郡の都尉之に居る漢末、西海郡に屬し魏晉之に因る永嘉以後、涼に屬  
 し隋唐には甘州肅州の北境たり大曆中、吐蕃に陥り宋の景德中、西夏に屬し夏人、威福軍を此に置く  
 元代、亦集乃路と爲し（亦集乃は即ち額濟納の譯文の差のみ）甘肅行中書省に屬す明に於ては甘肅二  
 衛邊外の地たり清初、阿拉善王の未だ定牧あらざるとき屢々此に游牧す康熙中、土爾扈特汗阿玉奇の  
 從子阿喇布珠爾、西藏に赴き達賴喇嘛に謁し還りて嘉峪關に至れば策妄阿喇布坦、憾を阿玉奇に修め



額濟納土爾扈特

道俄に塞りて歸ること得ず阿喇布珠爾進退窮りて内附を清廷に乞ふ清廷之を憫み牧を嘉峪關外色爾騰に賜て其衆を置き阿喇布珠爾に固山貝子を授けて之を轄せしむ五十一年、清廷の圖理琛をして土爾扈特に使せしめしや其父納札爾瑪穆特或は那圖爾麻に作るに命じて之を迎へ取らしむ納札爾瑪穆特の曰く阿喇布珠爾幸に天朝に臣僕たり且つ道を俄羅斯に假ること易からず請ふ遣歸すること勿れと五十五年、阿喇布珠爾從軍、力を效さんことを請ふ清廷命じて兵五百を率て噶斯に駐牧せしむ尋て死す其子丹忠嗣ぐ雍正七年、大軍の將に噶爾丹策凌を征せんとせしや丹忠に命じて之に會せしむ使者始て途に就きて噶爾丹策凌の使者至る乃ち大軍の進剿を停め更に丹忠に報じて之を知らしむ是歲、丹忠入覲し多羅貝勒に晋封せらる既にして其の牧地、噶斯の察罕齊老圖に逼近せるを以て準噶爾の侵掠を懼れ内徒を乞ふ陝甘總督查郎阿、其の戚屬を携へ去て阿拉克山阿勒坦特卜什等の處に遊牧せしむ是より遂に額濟納河界を以て定牧の地と爲し因て額濟納土爾扈特と稱す

案ずるに阿拉善、額濟納西札薩克の爵號旗稱及び佐領の數は左の如し

| 旗    | 稱       | 爵 | 號 | 佐領の數 |
|------|---------|---|---|------|
| 阿拉善旗 | 札薩克和碩親王 |   |   | 八    |
| 額濟納旗 | 札薩克多羅貝勒 |   |   | 一    |

### 第五編 回 部

#### 第二十四章 天山南路地理

天山南路の地たる南に崑崙山脈あり西に葱嶺山脈あり北に天山々脈あり皆大山高嶽にして尋常丘陵の比に非ず三面環繞、其の缺處唯、東面一道あるのみ而も亦大戈壁ありて以て其口に當る故に大水ありと雖界外に迸出すること能はず其間に環流し停りて大澤となる此れ其の地勢情形の概要なり昔、漢の武帝博望侯張騫をして西域に使せしめ三十六國皆通ず所謂る三十六國は大半今の天山南路の地に在り其國久しく滅び其名已に改まれりと雖、班固の記する所を案ずるに地形依然、舊態猶ほ存す大抵推して知るべきなり

漢書西域傳

案ずるに漢書西域傳に西域以孝武時始通、本三十六國、其後稍分、至五十餘、皆在匈奴之西、烏孫之南、南北有大山、中央有河、東西六千餘里、南北千餘里、東則接漢、阨以玉門陽關、西則限以葱嶺、云々、其河有兩原、一出葱嶺山、一出于闐二云々、東注蒲昌海、蒲昌海一名鹽澤者也とありて之を天山南路の地形に考ふるに一々相符する所あり其の所謂る南北有大山とは崑崙天山の二大山脈にして西則限以葱嶺とは喀什噶爾、阿克蘇の西界一帶なる喀克善、貢古魯克諸山を指し中央有河は即ち塔里木河にして有兩原は葱嶺河、和闐河を指し東注蒲昌海は正に羅普諾



爾に入るを謂へるなり名稱、古に異なりと雖、形勢、毫も異なる所を見ず但班固は此を以て西域全境の地勢を論じたれども其實は唯々天山南路の地勢此の如きに過ぎざるなり

且つ古の三十六國は皆城居し今の回子も亦皆城居し遊牧種族の水草を逐て移る者と相同じからず則ち其の遺風に於けるも猶ほ存せりと謂ふべし唯々漢の時、南道先づ官を置き北道後に開く而るに今は北道悉く通じて南道殆ど行く可らず此れ古今状態の小異のみ

案ずるに西域傳に自玉門陽關、出西域、有兩道、從鄯善、傍南山北、波河西行、至莎車、爲南道云々、自車師前王廷、隨北山、波河西行、至疏勒、爲北道云々とあり南山は即ち崑崙山脈にして北山は即ち天山々脈、河は塔里木河にして此を中央として南北を分てる者なり今の天山を中央として南北を分てる者と相異なる故に古の南道北道と云へる者は今の南路、北路と稱する者と同からず相混す可らず

當時の北道諸國は今に至りて史跡猶ほ遺れる者ありと雖、南道諸國に至りては一二を除く外、殆ど其の故址を知る可からざる者あり蓋し三十六國、始より大小齊しからず強弱一ならず大國は三四千戸、小國は百戸に満たず其間、兼并無きこと能はず漢代に於て既に滅ひし者あり存して唐後に及べる者あり甚しきは風沙に埋没せられて戈壁の中に沈淪せる者あり宜なる哉其の知り難きこと今請ふ古今名稱の異同を考へ其の知るべき者を擧げ以て其地を實にし而して後山川、城堡、驛站等の項に及ばず

一 古今地名異同

哈密

哈密は前漢に在ては車師國の東境、後漢に在りては伊吾盧の地(三十六國の外)明帝、屯田を此に置き宜禾都尉を置く晋の宜禾縣、後魏の伊吾郡、皆此地に在り隋代、伊吾を撃ち後漢の伊吾城の東に於て別に一城を築き新伊吾と稱す唐の貞觀中、伊西州を置き後、伊州と改稱す

吐魯番

吐魯番は漢の車師前王の廷(後王廷は烏魯木齊地方)晋に於ては高昌郡たり後魏の時、蠕々に并せられ蠕々關伯周を立て、王と爲し高昌王と稱す唐の太宗、高昌を滅して西州を置く其後吐蕃に陥り元初、回鶻之に居り畏吾兒と稱す哈喇火者は乃ち其地なり明代之を火州と謂ふ

案ずるに火州は本と州名に州ず猶ほ克木克木齊克を謙々州に作るがごとし漢人之を漢地に擬して州の字を填てしのみ山色青紅如火の説は字に因りて附會せしなり故に古人此地に於て用字一ならず元史は火者、霍州、和州に作り僕氏家傳は和緯に作り今に至りては和卓に作る皆字に意義あるに非ず其實は高昌の轉音のみ僕氏家傳に高昌哈喇和緯也、和緯本漢言、高昌之音近和緯、遂爲和緯也、哈喇黑也、其地有黑山也とある最も實を得たり

哈喇火者

哈喇火者(今は多く喀喇和卓に作る)の東に魯克察克あり即ち後漢の柳中の地、西域長史此に居る唐に於ては柳中縣たり明代以て柳陳城と爲す



案ずるに魯克察克、舊文魯克沁に作り元史に魯克塵に作る明史西域傳には柳城一名魯陳、又名柳陳城、即後漢柳中地、西域長史所治、唐置柳中縣、西去火州七十里、東去哈察千里とあり魯克沁、魯克塵、魯陳、柳陳、柳中皆一語の訛轉にして原音は魯克察克に作るを以て最も近しとす西域の地、察克と稱する者多し塔爾巴哈台の楚呼楚の原音は楚呼察克なるが如し吐魯番の西界に招哈河あり招哈和屯あり蓋し招哈(此二字の音、交河の二字の音に近し)は交河にして招哈和屯(蒙古語和屯は城なり)は交河城なり唐の太宗、高昌を征せし時、侯君集を以て交河道大總管と爲し、は此にれ因るなり、唐高昌を滅し安西都護を此に置く

喀喇沙爾

喀喇沙爾は蓋し古の焉耆國、唐の太宗、郭孝恪に命じて焉耆を征せしむ焉耆城四面皆水、險を恃みて備を設けず孝恪、將士に命じて水に浮て渡らしむ吐魯番、喀喇沙爾の間に庫穆什山あり庫穆什は回語に於て銀の義たり郭孝恪步騎三千を帥て銀山より出づ是れ此道より出でしなり

庫車

案ずるに漢書西域傳に焉耆近海、多魚鳥魏書西域傳に焉耆去海十餘里とあり回疆、喀喇沙爾の外に此と相符する地無し即ち所謂の海は今の博斯騰諾爾なり猶ほ喀喇沙爾に水多きことは下に詳なり庫車は即ち龜茲、古時佛教盛行の地たり今に至りて其跡を留め赫色勒河源に千佛洞あり丁谷山の石室に鑿佛數十あり其の石椁に銘あり建中二年(唐の代宗年號)の字を刻し今猶ほ辨ず可しと云ふ貞觀中、唐の太宗、安西都護府を此に移す當時の大國にして即ち安西四鎮の一なり

阿克蘇

阿克蘇は蓋し漢の溫肅國、其の東境は姑墨國なり後、溫肅は姑墨に併せられ更に偕に龜茲に屬す姑墨の西三百里に凌山あり蓋し今の木素爾嶺なり(木素爾は氷雪の義、凌山と名義相符す)

喀什噶爾

喀什噶爾は蓋し右の疏勒國、疏勒王は迦師城に居る迦師は即ち喀什なり疏勒の西は葱嶺にして漢の北道は此より葱嶺を踰ゆ今の喀什噶爾と其の情況を同くせり

葉爾羌

葉爾羌は古の莎車國、所謂る出青玉は密爾岱山の綠玉、今に至りて徵證あり漢の平帝以後、西域多くは匈奴に服屬す莎車獨り漢に附す後漢の光武之を嘉し其王を以て西域大都尉と爲し五十五國皆屬す然れども後、干闥に破らる其地相迫れるが故なり今を以て古を推すに形勢依然たり

和闐

和闐は即ち干闥、干闥、和闐は語音の小變のみ北魏以後、傍近諸小國を兼併し頗る大國となり唐の時亦四鎮の一たり元明に至るまで其名猶ほ存せり所謂る出玉石と云へる者今に至りて變せず其南を崑崙山脈とす所謂る玉は崑崙流沙萬里の外に出づと云へる者是なり又其の水、東北流し遂に羅普諾爾に注ぐ即ち干闥河東注蒲昌海と云へる者と相符せり

案ずるに干闥の稱、匈奴は之を手道と云ひ諸胡は之を密旦と云ひ印度は之を屈丹と云ひ梵書には之を瞿薩旦那と云ひ元人は又之を幹端或は五端と云ふ干闥、干道、幹端、五端、屈丹皆同一語の訛轉にして干闥、和闐又相近く密旦は和闐、屈丹と又相近し異稱には非るなり



以上各地は大抵古今相符する者にして其餘確據無しと雖、意を以て類推す可き者、西域都護の治せし烏壘の如き喀喇沙爾の西南境玉古爾附近に在りしなるべく輪臺の屯田の如きも亦蓋し其附近に在らん玉古爾莊の南、今に大小故城址を存す或は此等諸地の遺跡ならん又干闥の東南諸國、今一も其の所在を得ること無し想ふに和闐六城、境域甚だ大なり其内必ず二三小國を包含せし鄯善一國、漢に於ては大國と稱せらるる而も亦其地、白龍堆に當り風沙の害最も甚しく唐に在て既に空荒にして人無しと謂ふ其の埋没の久きこと知るべきなり況や自餘の諸小國をや

案ずるに漢書西域傳に樓蘭國、最在東垂、近漢、當白龍堆、乏水草、また地沙鹵少、田、寄田仰穀、旁國と云へり樓蘭は鄯善の原名なれば風沙の状態想ふべし僧辨機が西域記に泐澤積、鄯善之東北、龍城之西南とあり泐澤も亦羅普諾爾にして龍城は即ち白龍堆なれば鄯善國の在りし位置は大概推知すべく其の風沙に埋没せしことも亦推知すべし

二 山川湖澤

天山南路は天山を以て北壁とし天山北路は天山を以て南障とす兩路唯々一山脉を隔て、之を分割するのみ而して天山の正幹は已に前編に於て說過せるも其の支脈、南路に蜿蜒たるは此編に於て之を説かざることを得ず故に先づ之を説て而して後に他の二山脉に及ばん  
金嶺は關展の北境に在り天山の分支にして其脈、廻化府の東境托克喇山より東に展びて都魯嶺となり

金嶺

都魯嶺

蘇巴什山

納林奇喇山

博羅圖山

楚輝山

海都山

庫木什阿克瑪山

吐魯番城北を経て東、關展に至る凡そ四百餘里、吐魯番所屬諸城は皆此山を以て障屏とし又此山の水を引て以て灌溉の用に供す頗る至要の山脉に係る

都魯嶺は招哈和屯の西北百二十里に在り山脉遶迴として東、金嶺に連結す西百里許、雅木什以西諸城の障屏たり

蘇巴什山は關展の南に在り博羅圖、納林奇喇諸山と相屬し關展の南界を經、更に東界を踰えて止まり關展の南屏となる其の東南は悉く沙磧なり

納林奇喇山は蘇巴什山の西五十里に在り其の最高峰を額爾坤嶺とす

博羅圖山は納林奇喇山の西五十里に在り喀喇沙爾の東北境に當る北谷口に入りて西行すれば裕勒都斯に通し西南谷口を出て、西南行すれば喀喇沙爾に抵る北、阿拉葵山と相接し吐魯番西南境上の一大關隘を成せり

楚輝山は阿拉葵山の分支にして喀喇沙爾城の北十里に在り

海都山は楚輝山の西二百五十里に在り山脉遠く西方九百里の汗騰格里山より來り東南行して北に至り喀喇沙爾の北屏を成す

庫木什阿克瑪山は蘇巴什山の分支にして其の北谷口西南百四十里に在り庫木什は銀の義なり蓋し唐の所謂銀山なり



額格爾齊山

額格爾齊山は庫木什阿克瑪の西南百三十里に在り此より西南は悉く沙磧に屬す

沙山

沙山は博斯騰諾爾の南百二十里に在り喀喇沙爾の南屏たり山脉、額格爾齊より來り沙磧を踰えて此に至る岡巒蜿蜒、以て西、庫隴勒山に接す

庫隴勒山

庫隴勒山は喀喇沙爾城の西南百八十里に在り其脉沙山より西走すること百餘里、此に至りて勢極て險峻、喀喇沙爾南境の山此に盡く

達蘭嶺

達蘭嶺は海都山の西に在り亦汗騰格里的分支にして拜拉克山其の西北三百里に在り烏什噶克山又其西百里に在り

哈喇庫爾嶺

哈喇庫爾嶺は烏什噶克山の西南百里、鄂博爾の西、玉古爾の北に在り巖崖高峻にして天山支峰の傑出せる者たり

庫克納克嶺

庫克納克嶺は額什克巴什山の分支にして其の東行六百里にして此に至れる者なり額什克巴什河其の南麓より發源す

圖格哈納嶺

圖格哈納嶺は薩瓦布齊山の分支にして其脉東南行二百里にして此に至る山に白鹽を産す其東を劫爾噶山とし又其東を鄂克阿特庫山とし拜城の西南に在り又其東を布里博克濟山とし賽喇木城の南に在り皆圖格哈納嶺と同脉にして西よりして東に向ひ木素爾河の西南岸を成せり以上を天山支脉の諸山とす

蔥嶺

蔥嶺は喀什噶爾、烏什、葉爾羌諸境西面山脉一帶の總名にして一も蔥嶺と名づくる者無し古時之を踰

喀克善山

ゆる者、上に野蔥を見、因て名づけて蔥嶺と爲す其脉、起伏千里以て南は崑崙山脉に接し北は天山々脉に連なる喀克善山、貢古魯克山等其名最も著はる

赫色勒額什墨山

喀克善山は烏什の西北に在り阿克蘇河の西源此に發す其脉、東南行し連綿絶えず烏什の南に至り忽ち陡絶し層峰、天に挿まる此を固勒札巴什嶺とす折れて東北行すること百里にして松塔什山となり又東北四十里にして額爾齊斯哈喇山となり烏什城の西界を成せり

貢古魯克山

赫色勒額什墨山は固勒札巴什嶺の西南三十五里に在り貢古魯克山は烏什城北二百餘里に在り西より東に走り以て阿克蘇に接す嶺層重複、支峰甚だ多し一々にして擧ぐ可らず其脉、東北行して遂に天山々脉に會す

玉斯圖阿

玉斯圖阿爾圖什山は喀什噶爾城の西北九十餘里に在り穆什山は西北一百五十餘里に在り塔什密里克山は西南一百五十餘里に在り三山連亘し城の三面を擁し直に英吉沙爾に接す上に積雪多く春季雪融くれば同人皆引て以て灌溉の用に供す

汗特勒克山

汗特勒克山は英吉沙爾城の西百餘里に在り特勒克奇、齊特克諸山此と相屬す齊々克里克嶺、特勒克嶺、杭阿喇特嶺等の諸山は皆官路の北に在り其脉、東南行して遂に葉爾羌南境の諸山に接す蓋し圖嶺の分支にして兩脉貫聯の處たり

葉爾羌、和闐南境諸山は古の所謂南山にして實に崑崙山脉たり多く美玉を産す



英額齊盤山

密爾岱山

庫克雅爾山

和什山

堅珠山

瑪雅爾山

察克瑪克曲底山

英額齊盤山は葉爾羌の西南に在り葱嶺の支脈と相接す

密爾岱(或は密爾施に作る)山も亦葉爾羌の西南二百餘里に在り綠玉を産するを以て著はる

庫克雅爾山は聽雜阿布河源の北に在り貝拉山は東北に在り奇勒揚山は貝拉山の南、庫克雅爾山の東に在り而して庫克雅爾、奇勒揚山の南は痕都斯坦界(即ち印度斯坦)たり

和什山は奇勒揚山の東北に在り薩納珠山は薩納珠の東南に在り英額齊盤より此に至り東西綿亘し皆葉爾羌南境の山たり此より又東南行すること六百里、和闐南境の諸山と連結す

堅珠山は和闐の西南境、薩納珠山の東二百里に在り哈朗婦山は和闐の西南二百八十里に在り其の東南を額什墨提斯山とす和闐河の東源此に出づ

瑪雅爾山は和闐河の西三百里に在りて和闐の北屏たり山甚だ高からざるも火硝を産するを以て名あり察克瑪克曲底山は和闐城の南五百八十里に在り雪山なり其の西谷を桑谷と云ひ其の東谷を樹雅と云ふ和闐河の西源は此に出づ

和闐の南よりして迤東、峰巒連綿、東南行して絶えず亂山多く沙積數千里の内に相屬し崛起して沙圖々嶺となり和闐の東南に在り其の東北三百里に碩勒圖郭勒山あり又其の東南二百五十里に礪什達爾烏蘭達布遜山あり皆高峰峻嶽にして羅普諾爾の南に當る是よりして東北、青海の西金烏蘭托羅海山に接し二支に分れ一支は巴顏喀喇山脈となり一支は甘肅の南山々脈に接す

塔里木河

蔥嶺北河

蔥嶺南河

案ずるに和闐より西藏に入る者は克勒底雅城より山間千餘里にして達すべし昔、準噶爾此道より往て西藏を襲ふ然れども途中沙積雪多く又烟瘴の氣人に逼まり冬夏兩季均しく行く可からずと云ふ天山南路の水は唯々塔里木河を最大とす六大支ありて之に歸す其の至て西に在る者を蔥嶺北河とす即ち喀什噶爾達里雅是なり其南に在る者を蔥嶺南河とす即ち葉爾羌謬斯騰是なり又南に在る者を和闐達里雅とす又西北よりして之に會する者を阿克蘇河とし其東に在て之に會する者を鄂根河とし又其東に在て之に會する者を海都河とす凡そ此の六支相會して一道となり以て羅普諾爾に歸す

案ずるに達里雅は回語に於て大川の義、謬斯騰は人工を加へたる河川の義なり

蔥嶺北河は喀什噶爾より出で上源二あり其の北源は烏蘭烏蘇と云ひ喀什噶爾城西赫色勒嶺より發す故に回子は赫色勒河と稱す(蒙古は紅色を烏蘭と云ひ回子は赫色勒と云ふ其義相同じ)其の南源を雅爾雅爾河と云ひ喀什噶爾城南和什庫珠克嶺より發す嶺頭に大池あり哈喇庫勒と云ふ其水東流し數小水を併せて雅爾雅爾河となり兩河俱に行き喀什噶爾城南を過ぎて始て相會し喀什噶爾達里雅と稱せらる

蔥嶺南河は葉爾羌より出で亦二源あり其の西源を澤普羅善河と云ひ喀楚特城南の大山より發す來源甚だ遠くして初、托里布隆河と云ひ行くこと數百里にして密爾岱山の北を經、折れて東北流して英額齊盤山の北を經、始て澤普勒善河となり又東北流すること數百里、莫克里特莊の西に至て東源と會す其の東源は和闐の西、庫克雅爾山より發し北流して數小水を併せ東行して始て聽雜阿布河となり更に東



北行數百里にして葉爾羌城東を過ぎ兩源相會し又東北流、沙磧に傍て喀什噶爾界に入り其の東南境噶  
巴克阿克集に至り更に北河と會して蔥嶺河と稱せらる  
和闐河も亦兩源あり其の西源を哈喇哈什河と云ひ其の上源遠く城南五百八十里の察克瑪克曲底山の谷  
中より出て始、阜窪勒河と云ひ或は色勒克色河と云ひ曲々流すること數百里、額克里雅爾に至りて東  
源と會す東源は和闐城の西南二百八十里の哈朗歸山より出て兩支水あり相會して東北流し玉隴哈什河  
と云ふ、兩源和闐城を挟みて流れ城北に至りて相會し始めて和闐達里雅と稱せらる兩源均しく美玉を産す  
故に俱に哈什の合あり哈什は回語玉の義、古に所謂る白玉河、綠玉河蓋し是なり和闐河、砂磧の中を  
北行すること四百餘里にして西來の蔥嶺河に會す

阿克蘇河も亦兩源、其の西源は托什干達里雅と云ひ烏什の西北喀克沙勒山(即ち喀克善山)より出づ故  
に又喀克沙勒河と云ふ始めて發して南流し畢底爾卡倫の南を経て畢底爾河と稱し折れて東流し少く東北  
して烏什城北を過ぎ折れて東南流して阿克蘇境に入り托什干河となる托什干河東流して阿克蘇城の西  
南に至り北源と會す北源は阿克蘇の西北楚克達爾山より出て珊瑚喇克河と云ひ南流八十里にして湯那  
哈克河、北より來て之に注ぎ又東流六十里にして分れて二支となり東支を渾八升河と云ひ西支を艾柯  
爾河と云ふ各、東南流して又合し哈喇塔勒河と稱せらる哈喇塔勒は即ち阿克蘇河なり阿克蘇河南流し  
噶巴克阿克集の北境に至り蔥嶺河、和闐河に會し始めて塔里木河となる蔥嶺北河は上源より此に至り行

くこと既に二千七百餘里、最も遠し蔥嶺南河之に次ぎ行くこと二千百里、和闐河は一千百里、阿克蘇  
河は最も近くして九百餘里とす此より東流すること七百里、喀喇沙爾の南境に至り鄂根河來り會す  
鄂根河或は渭干河と云ふ亦數源あり其の西源は遠く阿克蘇の北界木素爾嶺より出づ嶺下に二水あり一  
を白龍口と云ひ一を黑龍口と云ひ二水合て木素爾河となり東南流すること數百里、哈布薩朗河、拜城  
の西北山より出で、來り會し又東流、哈喇烏蘇、拜城の東北山より出で、來り會し又東流殆ど百里に  
して赫色勒河、額什克巴什山より出で、來り會す此を其の東源とす兩源既に合し東南流して庫車界に  
入り烏恰特達里雅と稱せられ沙雅爾、玉古爾の南を經、遂に塔里木河に入る此間水利最も便にして稼  
穡に宜し古、屯田を開きし者多くは此邊に在り鄂根河既に塔里木河に會し東南折して行くこと又七百  
里、海都河北より來りて又之に會す

海都河(或は開都河)は喀喇沙爾境より出づ喀喇沙爾は新疆に於て最も河泊に富むの地たり喀喇沙爾  
西境に地あり阿喇爾と云ふ其地、湧泉百餘、會して東流す此を大裕勒都斯河(或は珠勒都斯に作る)  
と云ふ裕勒都斯は回語星の義なり猶ほ青海に鄂敦拉塔と稱するがごとし大裕勒都斯、東、小裕勒都斯  
に會す小裕勒都斯河は阿勒坦陰克遜の北より出づ又數十小泉並ひ出で環流して西行す烏里雅蘇台水又  
北より來りて之に入り遂に西南して大裕勒都斯に會す喀喇沙爾境、四面皆山、故に水、外に洩る、所  
無く皆來て此に注ぐ博爾圖河も亦吐魯番の西境托克遜界より發し烏蘭烏蘇を挟みて來り會し是より海



都河と稱し碧波溶々、環流して喀喇沙爾城西より繞りて城南に至り折れて東北流すること數十里、遂に漲して大澤となる博斯騰諾爾即ち是なり諾爾の水又西に溢出して河となり西南流れ折れて山間に入り庫爾勒城の西を繞りて東行し仍ほ海都河と稱す其旁、葦場多し又南行すること二百八十里にして塔里木河に會し遂に南流して羅普諾爾に歸す

克勒底雅河

克勒底雅河は和闐の南山中より出て北流數百里、克勒底雅城の東を経て沙磧に伏す或は云ふ北、塔里木河に注ぐと又其東に尼雅河あり薩雷克特斯河あり皆長さ數百里にして北流し沙磧に入る博斯旦河更に其東に在り哈喇木蘭河又其東に在り皆亂山の間に出て、沙地に入る以上皆和闐河の東に在り

烏魯克河

烏魯克河も亦和闐界の水にして哈喇木蘭の東に在り阿克山より出で、東北流し折れて西行し又折れて北行し遂に東北行して沙磧の中を貫流し東北、羅普諾爾に歸す亦回疆の大水なり

羅普諾爾

羅普諾爾（或は羅卜淖爾、羅布淖爾に作る）は吐魯番の南に在り其間、大沙磧を隔つ喀喇沙爾よりして行けば舟楫直に達す凡そ東南行五百餘里、諾爾の東西二百餘里、南北百餘里、天山南路大小六十餘水皆之に歸す蓋し古の蒲昌海、一名泐澤と云へる者は是なり古人云ふ黄河此に伏流して復た積石に出づと諾爾の中に山島あり二部落を成す其の回子、他處の回子と同からず漁を以て生業と爲し穀食を知らず野麻を織て衣と爲し天鵝の皮を以て裘を製す其族舊合て二百八戸、吐魯番郡王に屬し伯克を置之を領せしめ水獺皮を以て貢と爲す諾爾の南北各、小澤あり北なる者三、皆圓、南なる者四皆橢長、四

噶斯池

邊沙磧曠遠にして胡桐叢生し林箐茂密、到る者稀なりと云ふ

博斯騰諾爾

羅普諾爾の南、山を踰えて二百里、噶斯池あり三池連接して一となる亦大池なり東、青海に接し青海、西藏に赴くの孔道に當る即ち所謂の噶斯口なり天山南路に於て極東南界たり

博斯騰諾爾は又巴格喇赤湖と稱す喀喇沙爾城南の大澤にして喀喇沙爾界の水、皆此に歸せざること莫し諾爾の長さ二百四十里、廣さ四十里、其水溢出して更に羅普諾爾に滙す

雅兒湖

雅兒湖は吐魯番城の西南に在り招哈河此に注ぐ亦巨澤なり  
此餘小澤小池無きに非ずと雖、一々擧ぐるに足らざる者は之を略す

三 府縣 城堡

古より三十六國皆城居し此風改らず以て清朝に至り乾隆戡定の初、三十一城あり分て三等と爲し葉爾羌、喀什噶爾、阿克蘇、和闐を四大城とし烏什、英吉沙爾、庫車、闐展を四中城とし沙雅爾、賽喇木、拜、庫爾勒、玉古爾、牌租阿巴特、塔什巴里克、哈喇哈什、克勒底雅、玉隴哈什、齊爾拉、塔克、阿斯騰阿喇圖什、阿爾琥、玉斯屯阿喇圖什、英額齊盤、巴爾楚克、沙爾呼勒、魯克察克、托克三、喀喇和卓、洋赫、克勒品を二十三小城とし各、伯克を置きて之を治めしむ唯、哈密は内附已に久きが故に此の數内に在らず後又喀什噶爾、葉爾羌、英吉沙爾、和闐を西四城と稱し烏什、庫車、喀喇沙爾、闐展を東四城と稱し諸小城之に屬す其後、阿克蘇を專城として東四城の内に算し別に吐魯番城を築き吐

二十三小城  
西四城  
東四城



魯番、關展、哈密を合せて最東三城と爲す

哈密に新舊兩城あり舊城は回子額貝都拉世居の城にして其の創始を知らず其の新城は雍正五年の建造に係り舊城の東北三里に在り高さ二丈四尺、周り一里餘、北門外に圍牆一道を築くこと長さ百七十六丈、以て貯糧の地と爲し南北兩路の運糧、皆道を此に取り又靖遠、瓜州、黃墩三營の兵を移し屯田を此に興す乾隆二十五年、通判を置き哈密廳を開き尋て安西道を此に駐し安西府、哈密、巴里坤、烏魯木齊等の諸地を管せしむ所屬に五堡あり城西四十里素穆哈拉該を頭堡と稱し城西八十里阿斯塔納を二堡と稱し城西百二十里托郭齊を三堡と稱し城西百四十里拉卜楚喀を四堡と稱し城西百六十里喀喇伯を堡と稱す

關展は鎮西廳の西六百里に在り西北、金嶺に倚り崖に傍て城と爲す周り一里許、乾隆二十四年の建造に係り初、辦事大臣を此に駐す四十五年、辦事大臣を改めて領隊大臣とし移して吐魯番に駐す是より遂に吐魯の屬城となり

吐魯番は原と伯克莽噶里克世居の地たり莽噶里克、乾隆二十年、戶籍を納れて内屬す清廷此が爲めに界を定め東、關展より喀喇和卓に至るまでは額敏和卓をして之を轄せしめ西、伊拉里克より阿斯塔克に至るまでは莽噶里克をして之を轄せしむ既にして莽噶里克叛て誅せらる清廷因て額敏和卓をして兼て其の屬回を轄せしめ額敏和卓を吐魯番に置き城名を賜て廣安と曰ふ城の高さ一丈六尺、周り三里

餘、關展の西二百二十里に在り、初、關展の屬城たり後、駐防兵を此に設け領隊大臣を置て之を管せしむ是よりして專城となり屬邑二十九、城堡二十五、楚輝は關展の西南二十里に在り南、金嶺に倚り山を背にして城と爲す色爾啓布は關展の西南六十里に在り魯克察克は關展の西南二百二十里に在り吐魯番東界の最大聚落たり雍正の初、吐魯番の回子額敏和卓、準噶爾の難を避けて此に居り後遂に内屬す洋赫は關展の西南二百三十里に在り小城あり金嶺を以て障屏とす喀喇和卓は關展の西南二百六十里に在り地方三里許、舊城已に廢し居民別に小堡内に居る阿斯諾克は喀喇和卓の西五里に在り勒木丕は阿斯塔克の西南二十里に在り其南は沙磧にして是より西南行すれば四百里にして羅普諾爾に至る招哈和屯は即ち古の交河城にして吐魯番城の西二十里に在り招哈河、其北に出で、南流し城の左右を環る形勢佳勝の區たり雅木什は交河城の西南十五里に在り城の周り一里許、東、金嶺に倚る安濟彥は雅木什の西五里に在り城の周り一里許、布干は安濟彥の西南三十里に在り城の周り二里許、托克三（或は托克遜に作り即ち古の他古新なり）は布干の西南六十里に在り城の周り二里許、伊拉里克は托克三の西四十里に在り城の周り一里許、吐魯番の極西界なり連木齊木は關展の西八十里に在り東、山麓に倚り西に平田あり雅圖庫は關展の西七十里に在り罕都は連木齊木の東北二十五里に在り土城あり其の西南小山上に二敦あり相傳ふ漢代の築造なりと蘇巴什は連木齊木の西二十五里に在り小堡あり僧吉木（或は森尼木に作る）は蘇巴什の西北三十里に在り城西に長河ありて南流す穆圖拉克は僧吉木の西北六十里



に在り布拉克は僧吉木の西北七十里に在り西南小山を踰れば安濟彦に達す皆小堡なり以上は均しく吐魯番に屬す

## 喀喇沙爾

喀喇沙爾は吐魯番城の西南一千零二十里に在り舊城二あり一は海都河の西十里に在り一は海都河の西南二十里に在り回人、城を沙爾と云ふ喀喇は黑色なり其の年久しく色黒きを謂へるなり皆廢すること已に久しく其の何の時、何人の手に因て建てられしを知らず準噶爾の盛時、小策零敦多布此に居り沙拉斯、呼拉斯の二鄂托克を設く其孫達什達瓦殺されて其妻、部衆を率て内附す此地、以て伊犁に達すべし乾隆二十二年、將軍成衮札布此より伊犁に入る其の要害に係るに因て官兵を駐し新城を今の地に建つ周り一里五分、高さ一丈三尺、其後、屢々修補を加ふ土地肥沃にして屯田に宜し三十五年、土爾扈特來歸するに及び之を所屬裕勒都斯に置き因て始て辦事大臣を設けて之を管せしむ屬邑十五、回城大なる者二、庫爾勒（或は庫爾勒に作る）は喀喇沙爾城の西南百三十里に在り地勢、山に倚り河に臨み水其の三面を繞り最も險阨の地たり玉古爾は庫爾勒の西五百三十里に在り灌溉頗る便、蓋し古の輪台の地なり初、回子二千戸あり霍集占の亂に其衝に當り逃亡略々盡き僅に百餘に存するのみ因て庫爾勒に歸併す後又多倫回子（或は情倫回子に作る）五百戸を徙して其處に實す多倫回子は別に一種、霍集占が爲めに馬を牧し鷹を養へる者なり今庫爾勒にも此輩多しと云ふ城東に土橋あり古の葦橋の險は此を指せるなり其の小城、烏沙克塔勒は喀喇沙爾の東境にして城東二百五十里に在り察罕通格は烏沙

## 庫車

克塔勒の西二十里に在り俱に廢城あり楚輝は察罕通格の西南七十里に在り城垣あり烏沙克塔勒、察罕通格の南北兩道、此に至り會して一となる特伯勒古も亦小城、喀喇沙爾城の東八十里に在り碩爾楚克は喀喇沙爾の西南四十里に在り哈勒噶阿爾其南五十里に在り策特爾は喀喇沙爾の西南四百九十里に在り蓋し古の烏壘城の地、皆小城なり

庫車は喀喇沙爾城の西南一千六百六十三里に在り舊城は山に依て基と爲し柳條を用ひ沙土に夾みて築成し頗る堅固と稱せられ高さ一丈九尺、周り四里六分、東南北三面は圓くして西面獨り方なり霍集占の亂、檢定此より始まり大軍來り攻め霍集占も亦來り援く兩軍相持し三閱月にして始て降る載定の後、辦事大臣を置き官兵を駐す五十八年重修す、城外に頽城あり長さ五里許、土人言ふ漢代屯兵の所と屬城大なる者一、沙雅爾是なり回莊百二十九、沙雅爾は庫車城の正南百八十里に在り城の高さ一丈四尺周り二里、其の西南、馬行八日にして和闐に達すべく東南二十八日にして西藏に抵る可しと云ふ然れとも其間、沙磧に非れば沮洳草澤にして人馬俱に行き難し策安阿喇布坦曾て西藏を襲はんと欲し沙雅爾の回子をして教導たらしめ將に此道よりして往かんとなす全軍皆没して歸らず因て道を改め和闐を繞りて侵入す

## 阿克蘇

阿克蘇は原と烏什の屬城たり然れとも四大回城の一たり霍集占の亂に庫車已に破れて阿克蘇の回衆、霍集占が置きし所の伯克を遂ひ城を以て降る清廷因て官兵を駐し一時參贊大臣此に居り後、其の回子



を率て伊犁に移る此より唯、領隊大臣を置き烏什に屬せしむ後、嘉慶二年に至り專城と爲し辦事大臣を駐す北、崇岡に踞し四城連築し每城各、周り一里許、皆南に向ふ外に一大城垣を以て之を環らす實に形勝の地たり屬城大なる者二、拜、賽喇木、回莊四十九、拜城は阿克蘇城の東四百五十里に在り城山岡に踞し高さ一丈、周り一里三分、賽喇木城は拜城の東八十里に在り庫車に近し高さ一丈、周り一里九分、雪山の麓に在り氣候稍、寒し

## 烏什

烏什は西面、山に因て城と爲し南崖陡峻にして北に長流を帯ひ形勢絶勝の地たり舊伯克霍集斯世、之に居る回疆西界の大聚落なり城の高さ二丈五尺、周り三里二分、霍斯既に降りて京旗に入る因て其城に就て辦事大臣を置く乾隆三十年、辦事大臣素誠、措置宜きを失じ伯克賴黑木圖拉等亂を作す伊犁將軍明瑞之を平げ盡く舊回を誅鋤し喀什噶爾、英吉沙爾、阿克蘇、賽喇木、拜等各地の回子五百戸を移して此に置き暫く參贊大臣を此に駐す其の新城は三十一年に建造し高さ一丈七尺、周り四百六十八丈、名を永寧と賜ふ

## 喀什噶爾

喀什噶爾は烏什城の西南九百三十五里に在り其の舊城は大和卓木波羅泥都世居の地にして周り四里餘、乾隆二十三年、波羅泥都は此に據り霍集占は庫車に據り俱に亂を作す霍集占破れ奔りて葉爾羌に據り波羅泥都も亦此を棄て、霍集占に合す既にして波羅泥都兄弟皆西に走り回衆、城を獻して降る二十七年、舊城の西北二里に新城を築き駐防を置く高さ一丈四尺、周り二里餘、名を徠寧と賜ひ參贊大

臣、協辦大臣各、一人を駐す而して舊城には仍ほ回衆を置く三十年の亂に參贊、協辦の兩大臣、一時均しく烏什に移り五十一年、舊に復す道光七年、張格爾の亂に又參贊、協辦兩大臣を葉爾羌に移駐し獨り領隊大臣を置く所屬回莊十六、王斯屯阿喇圖什（或は玉斯圖阿爾圖什に作る）は喀什噶爾城北七十里に在り赫色勒布伊赫色勒、雅爾雅爾兩河の間に在り喀什噶爾城の東南百五十里の地、汗阿里克は東南百四十里に在り鄂坡勒は西南百二十里、皆小城なり

## 英吉沙爾

英吉沙爾（或は英噶薩爾に作る）は喀什噶爾城の南二百里に在り本と喀什噶爾の屬城たり霍集占の亂後、一時綠營總兵官を此に駐し三十一年、改て領隊大臣と爲し喀什噶爾協辦大臣之を兼管す城の周り二里、四十年、城垣を展築し郭外の回民をして悉く城内に入らしめ但中間に一牆を隔つ城垣高さ一丈七尺、屬莊僅に九、域内甚だ狭し

## 葉爾羌

葉爾羌は西南の大城にして土岡、其の東南を環り城、其上に居り周り十一里餘、高さ三丈三尺、規模宏敞、回部に其比を見ず其の部長阿布都里什特曾て準噶爾に執へられ久しく伊犁に在り後、釋されて歸り夫妻偕に清廷に入朝す霍集占の亂に城、其の據る所となる戡定の後、官兵を駐し辦事大臣を置く張格爾の亂に又其の據となる亂後、喀什噶爾參贊大臣を此に移す城の東南隅に古塔あり木石を用ゐず専ら磚を以て砌築す回人云ふ喀喇和台の達つる所と蓋し西遼人の築造に出づ回莊三十五、巴爾楚克は葉爾羌城の東北七百五十里、喀什噶爾河の北に在り此より分れて二道となり河に沿て西行すれば直に



喀什噶爾に達す此を樹窩子道と稱し其間樹林多し西南行すれば葉爾羌に達す即ち官路なり此地最も要區たり故に道光以後、屯田を設け綠營總兵を駐す喀什古哲什は喀喇烏蘇雙流交會の處に當り城西二百里に在り和什阿喇布は其の西南二十里に在り伊裔蘇寧阿喇斯又其の東南三百里に在り塔勒阿里克は葉爾羌城の西南三百里に在り塔克布伊も亦西南三百里に在り薩納珠は葉爾羌の東四百里に在り此より西南行すれば印度に達す都窪は葉爾羌の東五百里に在り塞爾勒克は蔥嶺中に在り葉爾羌河の北源、其左に流る喀爾楚も亦蔥嶺中に在り塞爾勒克より西南行百五十里にして其地に至る葉爾羌河の南源、其南に流る葉爾羌の西五百里に在り皆小城なり

和闐は新疆の極南界にして南は西藏、印度に連り南山の下に在り境内甚だ廣く著名なる者六城あり額里齊（或は伊里齊に作る）哈喇哈什、玉隴哈什、車時、塔克、克爾雅（或は克爾底雅に作る）と云ふ額里齊其の首城たり即ち和闐城なり高さ一丈九尺、周り三里餘、霍集占の亂後、官兵を此に駐し辦事大臣、協辦大臣を置く道光以後は葉爾羌に附し僅に領隊大臣一人を置く屬莊三、哈拉哈什城は額里齊城の西北六十里に在り屬莊四、玉隴哈什城は額里齊の東南三十里に在り城名ありて其實城郭無し屬莊二、車時（或は策勒に作り齊喇に作る）城は玉隴哈什の東二百里に在り亦城無し克爾雅城は車時の東南二百里に在り屬莊二、塔克も亦城無し車時の東南百八十里に在り屬莊三、皮什雅は六城の内に入らずと雖、城垣あり額里齊の西南百六十里に在り其南は玉隴哈什、哈喇哈什兩河發源の處、兩河、城

垣の東西に分流す

清廷の回疆に於ける參贊、辦事、領隊の各大臣を置きし所は凡て十處にして最要地を擇て參贊大臣を置き之に次ぐ者には辦事大臣を置き駐防兵を置く處には領隊大臣を置き參贊大臣は辦事、領隊の兩大臣を統轄す但參贊大臣統轄の及ぶ所は喀喇沙爾以西八城に在りて吐魯番以東に及ばず初、吐魯番は烏魯木齊都統に管轄せられ哈密は伊犁將軍に管轄せらる後改めて此兩處俱に烏魯木齊都統をして管轄せしめ仍は伊犁將軍の節制に歸す此れ其從前各城管轄の情形なり今や回匪の亂を受け盡く從前の制を改め郡縣の例に依り四府二州四廳を置て之を分轄し總て之を新疆巡撫の統治に歸す之を各城の舊に配すれば焉耆府は喀喇沙爾に在り溫宿府は阿克蘇に在り疏勒府は喀什噶爾に在り莎車府は葉爾羌に在り庫車州は庫車に在り和闐州は和闐に在り而して哈密、吐魯番、烏什、英吉沙爾には各々直隸廳を設け府及び直隸州の下には又屬州屬縣あり其の境界稍々舊時に異なる者あり全境の位置よりして之を言へば哈密廳最東に位し吐魯番廳、其西に隣し又其西を焉耆府とし又其西を庫車州とし溫宿府とす此の二府一州二廳は偕に北、天山に倚る溫宿府の西南を烏什廳とし烏什廳の南を疏勒府とし又其の南を莎車府とす英吉沙爾廳は疏勒、莎車二府の間に挟まれり此の二府二廳は俱に西北、蔥嶺に接す莎車の東を和闐州とし南、崑崙山脈を承く而して焉耆府の南境も亦沙磧を踰えて遠く崑崙山脈に接す此れ轄境の從前と少異ある所なり焉耆府は新平、嬉羌、輪台、鄯善の四縣を管し南、羅普諾爾を踰えて噶斯地方に



北路  
南路

至り東南、青海甘肅と相接す疆域の大、新疆に於て第二たり温宿府は拜城、温宿二縣を管し疏勒府は巴楚州及び疏勒、伽師二縣を管し莎車府は皮山、葉城二縣を管す其の轄境大抵從前に異なること爲し和闐州は疆域の大、輿に肩を比ふる者無し然れども所屬僅に于闐、洛浦の二縣に過ぎず大抵沙磧にして殷繁の區ならざること推して知るべし庫車州は焉耆、温宿兩府の間に介在し地域廣からず故に沙雅一縣を管するのみ此れ近日天山南路各府州廳所在の概略なり

四 軍台 驛站

天山南北兩路は哈密を以て門戸と爲す哈密は嘉峪關を出て西行すること一千四百六十里此より北山を踰えて巴里坤、烏魯木齊に赴くを北路とし此より吐魯番を経、喀喇沙爾、庫車に赴くを南路とす從前南路には軍台のみありて驛站營塘無し今や制度悉く改まり昔日の軍台は變して驛站となる然れども其名改まらず舊に仍て台と稱す今其の台站の里數を示せば

哈密より喀什噶爾に至る六千零六十八里

|        |      |         |      |         |      |
|--------|------|---------|------|---------|------|
| 吐魯番底台  | 百二十里 | 布幹台     | 七十里  | 托克遜台    | 百十里  |
| 蘇巴什台   | 六十里  | 阿哈爾布拉克台 | 百五十里 | 庫木什阿哈瑪台 | 百二十里 |
| 烏沙克塔爾台 | 百二十里 | 持博爾古台   | 百里   | 喀喇沙爾城   | 五里   |

|          |      |          |       |         |       |     |
|----------|------|----------|-------|---------|-------|-----|
| 開都河北台    | 三    | 里        | 開都河南台 | 百五十里    | 哈爾阿滿台 | 六十里 |
| 庫爾勒台     | 七十里  | 喀喇布拉克台   | 百里    | 車爾楚台    | 百六十里  |     |
| 策達雅爾台    | 八十里  | 洋薩爾台     | 百二十里  | 布古爾台    | 百里    |     |
| 阿爾巴特台    | 百四十里 | 托和蘇台     | 八十里   | 庫車城     | 二百十里  |     |
| 和色爾台     | 四十里  | 賽里木台     | 百里    | 拜城      | 六十里   |     |
| 鄂依斯塘可齊克台 | 八十里  | 察爾齊克台    | 百六十里  | 哈拉玉爾滾台  | 八十里   |     |
| 札木台      | 八十里  | 阿克蘇城     | 八十里   | 渾巴什台    | 八十里   |     |
| 洋阿里克台    | 百四十里 | 都齊特台     | 九十里   | 伊勒都台    | 五十里   |     |
| 烏圖斯克滿台   | 六十里  | 衡阿喇克台    | 七十里   | 庫々車爾台   | 八十里   |     |
| 巴爾楚克台    | 九十里  | 喀喇塔克台    | 七十里   | 海南木橋台   | 七十五里  |     |
| 皮產里克台    | 九十里  | 阿克薩克瑪喇爾台 | 八十里   | 阿朗格爾台   | 百里    |     |
| 邁那特台     | 九十里  | 賴里克台     | 百二十里  | 愛吉特虎台   | 七十里   |     |
| 葉爾羌城     | 七十里  | 喀喇布札什台   | 七十里   | 和色爾塔克腰台 | 百里    |     |
| 和色爾察木倫台  | 五十里  | 托布拉克台    | 七十里   | 英吉沙爾城   | 百里    |     |



|        |     |       |  |  |  |
|--------|-----|-------|--|--|--|
| 庫森塔斯渾台 | 百十里 | 喀什噶爾城 |  |  |  |
|--------|-----|-------|--|--|--|

哈密吐魯番間の軍台里程は既に前編に擧げたれば此之を覆出せず

但現今、捷報處より喀什噶爾に達する里程は共計一萬一千六百六十五里にして吐魯番城に達するは七千二百四十里、然らば哈密、喀什噶爾間の里程は五千六百二十五里とす（哈密、吐魯番間一千二百里は古今同一なり）古今の差、實に四百四十三里なり然れども此れ其の捷報處の捷報たるが故なるべし其の烏什は阿克蘇より和闐は葉爾羌より分岐して之に赴く其の里程

阿克蘇より烏什に至り二百四十里

|      |     |       |     |       |     |
|------|-----|-------|-----|-------|-----|
| 阿克蘇城 | 八十里 | 察哈喇克台 | 八十里 | 阿察塔克台 | 八十里 |
| 烏什城  |     |       |     |       |     |

葉爾羌より和闐に至る八百零十里

|       |     |       |      |         |      |
|-------|-----|-------|------|---------|------|
| 葉爾羌城  | 七十里 | 波斯坎木台 | 百二十里 | 洛和克亮噶爾台 | 九十里  |
| 綽洛克腰台 | 九十里 | 咽瑪台   | 九十里  | 滾得里克台   | 百四十里 |
| 披雅爾滿台 | 百十里 | 雜瓦台   | 七十里  | 和闐城     |      |

又阿克蘇より伊犁に達する軍台あり阿克蘇の參贊阿桂が伊犁に入りし經路なり

阿克蘇より伊犁に至る一千二百二十里

|        |      |         |     |        |      |
|--------|------|---------|-----|--------|------|
| 阿克蘇底台  | 八十里  | 札木台     | 八十里 | 阿爾巴特台  | 八十五里 |
| 和約伙羅克台 | 七十里  | 圖巴喇特台   | 五十里 | 瑚斯圖托海台 | 八十里  |
| 塔木哈塔什台 | 百二十里 | 噶克察哈爾海台 | 百里  | 沙圖阿滿台  | 八十里  |
| 特克斯台   | 百里   | 霍諾海台    | 百里  | 博爾台    | 八十里  |
| 索果爾台   | 九十里  | 海努克台    | 九十里 | 巴圖蒙柯台  | 十五里  |
| 伊犁惠遠城  |      |         |     |        |      |

和闐以東には軍台驛站無し其の里程知る可らず

第二十五章 前代の天山南路

一 漢の西域三十六國

秦の始皇、長城を築きて匈奴を禦ぎ西、臨洮に起り臨洮以外は悉く匈奴の右地に屬す漢高、其後を承け白登の圍に困み陳平の奇計を用ゐて僅に免れ劉敬が和親の策に従ひ甥舅の邦となる當時惟、其の侵寇を恐る猶ほ何ぞ邊境を開くに暇あらんや武帝立つに及び年壯氣銳にして匈奴の驕傲不屈を憤り之を



滅して以て甘心せんと欲す會々降者あり云ふ匈奴、大月氏を破る大月氏之を怨めども共に匈奴を撃つ者無しと武帝之を聞き使を大月氏に通し約して共に之を撃たんと欲し能く大月氏に使すべき者を募る漢中の人張騫、募に應ず武帝乃ち張騫をして百餘人を隨へ匈奴を以て教導と爲し節を持って出使せしむ是時に當りて長城以外少しく南すれば羌中（今の青海）北すれば匈奴なり匈奴導て匈奴の西境を經り誤りて皆匈奴に執へられ單于の廷に至る單于留めて遣らず騫に與ふるに妻を以てし既に子あり然れども騫か心此に在らず節を持って失はず居ること已に十年、匈奴其逃るゝを慮らず之を其の西地に置く騫因て間を得て其屬と偕に逃れて大月氏に向ひ西走すること數十日にして始て大宛に至る大月氏は猶ほ其北に在り騫乃ち利を以て大宛に説き導て大月氏に達せしむ時に大月氏、夫人を立て、王と無し且つ大夏を得て之を臣とし意頗る滿ち復た匈奴に報ゆるの心無し騫、大月氏に居ること一歳餘、竟に其の要領を得ず南山に傍ひ羌中よりして還らんと欲し又誤りて匈奴に得られ留めらるゝこと一年餘、適々匈奴、内亂あり騫乃ち脱して漢に歸る往返十三年、俱に歸りし者匈奴唯々一人のみ殆と得る所無し然れども騫、西域に在り聞見の及ぶ所、足未だ其地に到らずと雖、盡く其の地形物産の險夷多寡を察して歸り之を奏す武帝益々喜び人を發して必ず西域諸國に通せんことを欲し大に兵を動して匈奴を征す驃騎將軍霍去病、匈奴を破り數萬人を殺し祁連山（此の祁連は南祁連山にして北祁連山即ち今の天山に非ず）に至る匈奴の渾邪王、休屠王を殺し其衆を率て降り金城、河西、南山に沿て鹽澤（即ち

今の羅卜諾爾）に至るまで復た匈奴の一跡を留めず  
 初、烏孫王は大月氏と偕に祁連、敦煌の間に在り大月氏、烏孫王攻めて之を殺し其地を奪ふ既にして大月氏も亦匈奴に破られ西走して塞王を撃ち其地に據る烏孫王の子昆莫長して父の仇を復せんことを欲し遂に大月氏を撃ち其衆を略して又塞王の故地に因る漢既に意を大月氏に得ず是に於て更に烏孫を招て故地に復せしめ以て匈奴を制せんと欲し又張騫を遣りて烏孫に使せしめ多く金幣を齎して之に贈り且つ公主を遣りて夫人と爲し以て兄弟の約を結ばしむ騫、副使數人を隨へて往き因て副使を大宛、康居、月氏、大夏旁近諸國に分遣し各々往て之に通せしむ騫先づ歸る副使等繼て各々其の國人と俱に來りて漢に朝す是より三十六國皆至る  
 案するに漢書西域傳は西域の地勢を説くに専ら葱嶺以東を以てせり然れども所謂る三十六國は悉く葱嶺以東に在りしに非ず唯々其の大半、此に在りしのみ且つ此數も亦一定不易の者に非ず初此の如くなりしのみ其の後屢々分合あり前漢未には既に分れて五十餘國となる而して三十六國の名も漢書已に一々列舉せず後世說者又一ならず苟悅が漢紀には婁羞、沮沫、精絶、戎盧、渠勒、皮山、烏秣、西夜、蒲犁、依耐、無雷、捐毒、桃槐、休循、疏勒、尉頭、烏貪、界陵、渠類谷、隋立師、單桓、蒲類、西沮彌、却國、狐胡、山國、車師の二十七小國と扞彌、于闐、難完、莎車、溫宿、龜茲、尉犁、危須、焉耆の九大國を擧ぐ大抵其國、葱嶺以東に在り然れども漢書紀する所と少差あり徐松の



漢書補注は婼羌、樓蘭、且末、小宛、精絕、戎盧、扞彌、渠勒、于闐、皮山、烏秣、西夜、子合、蒲犁、依耐、無雷、難兜、大宛、桃槐、休循、捐毒、莎車、疏勒、尉頭、姑墨、溫宿、龜茲、尉犁、危須、焉耆、姑師、墨山、劫國、狐胡、渠梨、烏壘の六十六國を擧ぐ蓋し其國必しも葱嶺以東にのみ在らざれども皆都護の所屬たればなり此説是に近し今暫く之に據る

漢是に於て令居以西に築き河西四郡（武威、張掖、酒泉、敦煌、後、金城郡を添設し五郡となる）を置き亭障を起し沙磧を開て道を通し屯田を渠梨に興し使者、校尉等の官を置いて之を鎮護せしむ于闐、莎車以下諸國王皆是より子弟を遣はして入侍せしむ然れども姑師（即ち車師）樓蘭の二國、西域の門戸たり地、匈奴に近く匈奴以て必争の地と爲し且つ往來の衝に當り最も使者の供給に苦しむの故を以て動もすれば匈奴の耳目となり屢々漢の使者を劫殺す使者還り奏す其國弱くして撃ち易しと武帝乃ち從票侯趙破奴を遣り屬國の騎及び郡の兵數萬に將として車師を撃たしむ破奴、輕騎七百人と偕に先づ至り樓蘭王を虜にし遂に姑師を破る樓蘭、漢に附く匈奴、兵を發して樓蘭を撃つ樓蘭王是に於て一子を遣りて匈奴に質とし一子を漢に質とす漢、貳師將軍李廣利をして大宛を撃たしむ匈奴、騎を遣りて樓蘭に至らしめ漢使の後れて至る者を候ひ之を遮りて相通ずることを得ざらしめんとす漢之を知り軍正任文をして便道より樓蘭に赴き其王を捕へて長安に致さしむ樓蘭王の曰く小國、大國の間に介在す兩屬せざれば以て國を安ずること能はず必ず漢に服せしめんと欲せば請ふ國を徙して漢地に居らしめ

よと武帝、其言を直とし又遣りて國を復せしめ因て匈奴を候はしむ匈奴是より復た樓蘭を親信せず獨り姑師のみ猶ほ匈奴に附す天漢二年、匈奴の介和王、漢に降る漢以て開陵侯と爲し樓蘭の兵に將として以て姑師を伐たしむ匈奴も亦右賢王をして數萬騎を率て之を援けしむ漢兵利あらずして退く其後征和三年、重合侯馬通、四萬騎に將として匈奴を撃ち姑師の北を過ぐ漢因て開陵侯をして樓蘭、尉犁、危須等六國の兵を以て別に姑師を撃ちて其勢を分ち以て重合侯の軍を遮ることを得ざらしめ遂に姑師を圍みて之を降す姑師是より漢に服屬す然れども諸國の兵も亦疲敝し武帝も亦之を悔いたり搜粟都尉桑弘羊等、輪臺以東の屯田を増し益々邊穀を積みて兵食を充實せんことを請ひしも武帝既に遠征の費多くして益少きを悔い再び天下を擾亂せんことを欲せず命じて輪臺の屯田を罷めしめ復た西域の軍を出さず

昭帝の立つに及び始て桑弘羊が前議を用ひ再び屯田を興し兵千五百人を置き分て三屯と爲し屯毎に一校尉を置いて之を領せしむ輪臺、渠梨は扞彌國に近し因て扞彌の太子賴丹に印綬を授け輪臺の屯田に校尉たらしむ賴丹曾て龜茲國に質たり貳師將軍の大宛を伐ちしとき龜茲を過り龜茲王を責めて之を出さしめ因て携て偕に漢に至る是に至りて漢以て校尉と爲す輪臺は龜茲に近し龜茲人乃ち其王に謂て曰く賴丹本と吾に臣屬す今、漢の印綬を佩ひ吾に迫りて田す必ず王の害たらんと龜茲王以て然りと爲し賴丹を殺し上書して漢に謝す然れども漢未だ其罪を問ふに暇あらず既にして樓蘭の新王も亦匈奴に通



じ屢々漢の使者を遮り衛司馬安樂、光祿大夫忠、期門郎遂成等皆殺さる是より前、傳介子、西域に使し西域の情を知る大將軍霍光に語りて曰く樓蘭、龜茲屢々反覆して討せず懲艾する所無し介子前に龜茲を過る時、其王近く人に就く甚だ得易きなり願くば住て之を刺し以て威を諸國に示さんと霍光曰く龜茲は道遠し且らく之を樓蘭に驗せんと乃ち奏して傳介子を遣る介子多く金幣を齎して往き詐て其王に賜ふまねして王を請て偕に酒を飲み酔はして遂に之を刺て因て國人に諭し王の弟の漢に質たる者尉都者を立て、之に王たらしめ更めて樓蘭に名づけて鄯善と爲す尉都者乃ち漢に請て曰く國中に伊循城あり其地肥美、願くは漢より一將を遣はし屯田を此に興し穀を積ましめ臣をして其の威重に依ることを得せしめよと漢是に於て司馬一人、吏士四十人を遣りて伊循に田し以て之を鎮撫せしむ樓蘭是より復た叛せず匈奴猶ほ車師（乃ち姑師）を争ひ四千騎を發し來て車師に田せしむ帝之を征せんと欲して果さず宣帝繼て立ち祁連將軍田廣明、蒲類將軍趙充國等五將をして十五萬の軍を率て匈奴を征せしむ匈奴の車師に田せる者皆驚き去る車師又漢に屬す匈奴怒り車師王の太子軍宿を召して質と爲さんとす軍宿は焉耆王の外孫なり匈奴に質たることを欲せず逃げて焉耆に奔る車師王乃ち烏貴を立て、太子とす烏貴尋いて王となり婚を匈奴に結び因て匈奴に教へて漢の烏孫に使せしむる者を遮らしむ初、漢の婚を烏孫に結びしや公主の出で、烏孫夫人たりし者一再、而して楚王戌の女孫解憂、烏孫王翁歸靡の夫人となり三男二女を生む三男、長は元貴靡、仲は萬年、季は大樂、二女、長は弟史、少は素光、何

奴尉、烏孫を侵す公主書して云ふ車師、匈奴と偕に烏孫を侵す唯、天子幸に之を救へと宣帝此に因て又五將軍を發して匈奴を伐たしめ且つ校尉常惠を遣りて烏孫の兵を護せしめ烏孫王を助けて漢と偕に匈奴を撃ち右谷蠡王庭に入り多く鹵護あり漢因て常惠をして金幣を齎して往き烏孫貴人の功ありし者に賜はしむ惠行くに臨み便道より龜茲を討せんと請ふ帝許さず然れども霍光が風旨を承け使して還るとき便宜に屬國の兵を發して龜茲を撃ち以て其の曾て賴丹を殺せる罪を討す龜茲王謝して曰く此れ吾が先王、貴人姑翼が爲めに誤られしのみ我に於ては罪無しと姑翼を執て献す惠之を斬りて還る帝是に於て更に侍郎鄭吉、校尉司馬憲を遣り免刑の罪人を帥む往て渠犂に田し益々穀を積みて以て車師を伐つ計を爲さしむ地節二年、鄭吉、城郭諸國の兵萬餘人を發し自から田士（即ち屯田兵）千五百を率ゐ偕に車師を伐ち交河城を攻て之を破る車師王、石城の中に在り未だ下すこと能はざるに軍食盡く鄭吉、兵を罷めて渠犂に歸り將に秋收畢るを待ちて再び兵を擧げんとす車師王之を聞きて懼れ北、匈奴に奔り吉等又發せずして止む

莎車王曾て烏孫公主の子萬年を愛す、萬年漢に質たり莎車王死す國人、一は自から漢に託せんことを欲し一は烏孫の心を得んことを計り上書して萬年を以て莎車王たらしめんことを請ふ漢之を許し奚充國をして萬年を送りて莎車に至らしむ萬年立て王となり暴惡にして國人の望に副はず前王の弟呼屠微、衆の悦ばざるに因りて萬年を殺し并て漢の使者を殺し自立して王となる適々匈奴、車師を争ひ兵を以



て車師を攻む呼屠微乃ち使をして揚言せしむ北道諸國己に匈奴に歸すと南道諸國を劫し以て與に盟て漢に畔かしむ鄯善以西諸國皆之に従ふ會、衛候馮奉世、大宛の客を送りて至り便宜に兵を發して莎車を擊ち其城を拔く莎車王自殺す馮奉世、它の王子を立て、王と爲して還る而して龜茲王は烏孫公主の女弟史を娶り漢の外孫を得て夫人とせしを榮とし上書して夫人と俱に入朝し留ること殆と一年、漢厚く之に贈り自後屢々朝貢し漢の寵遇益々察なり

是時に當て車師王既に國に復し鄭吉少しく兵を留め渠犂に歸る車師王、匈奴の兵復た至らんことを慮り自から安ずること能はず妻子を棄て輕騎獨り烏孫に遁る鄭吉乃ち其の妻子を收めて長安に傳送し吏卒三百人を遣りて別に車師に田せしむ既にして匈奴果して騎を發して來り襲はしむ、吉盡く渠犂の田士一千五百を率て行き車師に田す匈奴も亦益々騎を發して來らしむ衆寡敵せず吉等入りて城中に保す匈奴之を圍むこと數日、下すこと能はずして去る然れども常に數千騎をして往來し車師を候せしむ、吉乃ち上書して田卒を増さんことを請ふ廷議以爲らく道遠く費多し宜しく車師の田卒を罷むべしと乃ち詔して常惠をして張掖、酒泉の騎を率る車師の北千餘里に出で以て威武を車師の旁に揚げしむ匈奴引き去る吉因て車師城を出で渠犂に歸ることを得たり是に於て漢、車師の太子軍宿を焉者より召し立て、王と爲し其の國民を徙して渠犂に置き故地を以て盡く匈奴に棄つ既にして匈奴の日逐王、單于に背き數萬騎を率て漢に降る吉之を納る是より匈奴漸く弱くして西域に近づくこと能はず漢始て西域都護

都護府を  
烏壘に開く

を置き鄭吉を以て之と爲す是より先、漢、護鄯善以要使者を置くと雖、車師未だ全く服せず悉く北道を護すること能はず是に至りて併て北道を護することを得たり故に都護と稱す鄭吉乃ち適中の地を擇び都護府を烏壘に開く渠犂屯田と相近し故に屯田校尉も亦屬す時に神爵二年なり（我崇神天皇三十八年）  
西曆紀元前六十年案ずるに前漢西域の路、樓蘭先づ服して南道既に官吏を置くことを得しも北道は車師之が門戸たり匈奴之を争ひて互に勝敗あり故に焉者、龜茲は已に定まりたれども未だ車師を服すること能はず鄭吉、渠犂に在り東面して之を争ふ蓋し當時の孔道は今の哈密、吐魯番を經ず玉門を出で、鄯善に至り羅普諾爾の西より（辦機が西域記に渤海積鄯善之東北とあるに依る）大頡を渡り西北、今の喀喇沙爾地方に赴きしなり此道、隋末に至りて塞がり唐初又開く其後何の時に又塞る

元帝の時、又戊巳校尉を置き車師前王庭に屯田せしむ其後、戊巳校尉徐普、薪道を開き白龍堆の阨を避け兼て道里の半を減せんことを欲す道、車師後王庭に當る車師後王、心之を便とせず徐普の召に應せず徐普之を高昌壁に拘す車師後王、吏に賂て脱することを得、壁を出で、匈奴に奔る尋で去胡來王（嬉差王）唐兜、赤水羌と相攻めて勝たず急を都護に告ぐ都護、時を以て救はず唐兜、玉門關を款いて援を乞ふ關吏納れず亦妻子人民千餘を携て匈奴に奔る匈奴皆之を受け漢に報ず時に王莽居攝の際に在り中郎將王昌を遣り單于に告げ二王を執へて使者に付せしむ單于、二王の爲めに罪を請ふ莽聞かず西域諸國王を會し軍前に二王を斬り以て徇ふ單于固より王莽を恨む是に因て益々恨み兵を遣りて車師に



寇し後城長を殺し都護の司馬を傷つく戊巳校尉刁護、史陳良、終帶等をして匈奴に備へしむ良等反て相謀り刁護を殺し吏士男女二千餘人を脅略し匈奴に入る後三年、單于死して其弟代り立つ王莽詐て之と和親し使者を遣り金幣を以て單于に賂ひ以て良等を求む單于盡く之を收め械して使者に付す莽皆之を燒殺す和親是に由りて又絶え匈奴大に北邊を撃ち西域瓦解す焉耆王、匈奴に迫近せるを以て先づ叛し都護但欽を殺す莽の天鳳三年、五威將王駿、西域都護李崇をして戊巳校尉郭欽等を率ゐる西域を討せしむ諸國皆威に畏れて郊迎し兵穀を送り焉耆も亦詐りて降り潛に兵を聚めて自から備ふ駿等莽車龜茲の兵七千餘人を率ゐて焉耆に入る焉耆、兵を伏て之を遮り姑墨、尉犁、危須等の國皆反間を爲し共に駿等を襲殺す郭欽後れて至り焉耆兵の在らざるに乘じ其の老弱を殺して還る而して李崇僅に龜茲を保し尋て西域に没す西域是に於て又匈奴に屬す

然れども匈奴既に西域を得て稅歛峻刻、諸國、誅求に堪へず復た漢を思ふ故に後漢光武の時、皆使をして來りて都護を請はしむ光武未だ外事を兼ね顧るに遑あらざるを以て許さば會々匈奴衰弱し西域を管制すること能はず莽車王賢最も盛強にして諸小國を殘滅す賢死し諸國、長を失ひ遂に互に攻伐し小國多く大國に吞まる是に於て小宛、精絶、戒盧、且末皆鄯善に入り渠勒、皮山は于闐に并せられ都立師、單桓、孤胡、烏貪訶離は皆車師に没し前の三十六國、僅に數大國あるに過ぎず明帝の時に至り始て將師に命じ北、匈奴を征し伊吾廬の地を取り宜禾都尉を置き復た屯田を開く于闐、莎車諸國又子をして

入侍せしむ西域絶て六十五年にして復た通ず漢再たび都護、戊巳校尉を置く然れども明帝崩して焉耆、龜茲、都護陳睦を攻没し悉く其衆を覆し匈奴、車師、偕に戊巳校尉を圍む建初元年、酒泉の太守段彭、大に車師を交河城に破る然れども章帝、内を疲らして外を事とするを欲せず戊巳校尉を迎へ還し復た都護を遣らず匈奴乃ち兵を遣りて伊吾を守らしむ時に軍司馬班超獨り于闐に留り諸國を綏集す和帝の永元二年、大將軍竇憲、副校尉閼槃をして二千餘騎に將として伊吾を掩撃せしめて之を破る三年、班超遂に西域を定む因て超を以て都護と爲し治を龜茲に徙し戊巳校尉は五百人を領して車師前部高昌壁に居り戊部候は車師後部に居らしむ候城相去ること五百里、六年、班超又焉耆を破り諸國皆内屬す然れども和帝崩して西域又叛き頻に都護を圍む朝議其の險遠なるを以て遂に都護を罷め西域復た來らず北匈奴之を收めて邊に寇すること十餘歲、敦煌の太守曹宗、其の侵害を患ひ元初中、行長史索班を遣りて伊吾に屯し以て之を招撫せしむ車師前王、鄯善王等來り降る未だ幾ならざるに北匈奴、車師後部王を率ゐる共に班等を攻没し遂に前部王を撃走す鄯善逼急し救を曹宗に求む宗、兵を出して匈奴を撃ち以て索班の耻を雪めんことを請ふ鄯太后許さず但々護西域副校尉を置き敦煌に居らしむ是より名ありて實無く徒に之を羈縻せるのみ其後、匈奴連りに車師と偕に河西に入寇し漢之を防遏すること能はず議者或は玉門、陽關を閉ぢ其患を絶んと欲す敦煌の太守張璠上書して三策を陳す尙書陳忠奏す河西四郡の屯兵を増し校尉を敦煌に置き以て西、諸國を撫でしめんと帝之を納れ遂に班超の子勇を以て西域



長史と爲し弛刑の士五百人を師の出で、柳中に屯せしむ班勇是に於て車師を破り焉者を降す龜茲、疏勒、于闐、莎車等十七國、風を望て來服す永建六年、伊吾の屯田を復し伊吾司馬一人を置く然れども時既に漢末に際し衰運回し難く朝威稍、損し諸國驕放にして轉々相陵虐し元嘉二年、長史王敬、于闐に没し車師後王又叛して屯營を攻む自後紛亂、殆ど底止なく西域の事、復た問ふ可らず

二 晋後の西域

魏晋の際は天下大亂、中原麻の如し何況や西域をや大抵大小を併せ強は弱を吞み其の存して著はれたる者は鄯善、于闐、車師、焉耆、龜茲數國あるのみ晋、三國を統へ一時干戈暫く休す是に於てか太康元年、車師前部王始て其子をして入侍せしめ自餘諸國も亦時に來る者あり時に車師前部王は交河城に在り戊巳校尉は高昌に在り國分れて二となる焉耆王龍會勇傑にして龜茲王白山を襲ひ遂に其國に據り其子熙をして本國の王たらしむ一時葱嶺以東に霸を稱せしも尋いて龜茲人羅雲に殺され龜茲、國を復す其後、晋又亂れ西域唯、涼に往來せるのみ咸和中、張駿、涼州に據り沙州の刺史揚宣を遣り衆を率て西域を彊理せしめ戊巳校尉趙貞を擊破し其地に就て郡を開き太守を置て之を領せしむ高昌是より始て郡と稱せらる焉耆、龜茲皆方物を張駿に致す苻堅の長安に入りて帝と稱せしや鄯善王休密、車師前部王彌質等入りて堅に朝す堅之を西堂に引見す彌質等、宮宇の壯麗、儀衛の嚴肅なるを觀、甚だ懼れて年々貢獻せんことを請ふ堅、其路の遙遠なるを以て許さず三年に一貢し九年に一朝し以て永制と爲

さしむ彌質等又請ふ大宛諸國貢獻時に通ずと雖、誠節未だ純ならず王帥若し一たび關を出でば願くは之が教導たらんと時に堅已に山東に克ちて西域を圖るに志あり乃ち驍騎將軍呂光を以て持節都督西討諸軍事と爲し陵江將軍羌飛、輕騎將軍彭晃等と偕に兵七萬を領し以て西域を定めしむ諸臣諫むれども納れず呂光、兵を進めて焉耆に至る焉耆王泥流、其の旁國を率て降を請ふ光乃ち更に龜茲に至る龜茲王白純之を拒ぐ光、其の城南一里に軍し別に一營を爲し溝を深くし壘を高くし廣く疑兵を設け木を以て人と爲し之に被するに甲を以てし之を壘上に列す白純、城外の人を驅り徙して城中に入り旁近小國も亦城に嬰りて守る光城を攻むること甚だ急なり白純、國の財寶を傾け救を囁々に乞ふ囁々二十萬の衆并に溫宿、尉犁、危須等の衆を率て至る七十萬人と號す諸將皆陣を結び兵を按じて之を拒がんと欲す光が曰く彼は衆、我は寡、營又相遠く勢分れ力散ずるは良策に非るなりと營を遷して相接せしめ勾鎖の法を用ひ精騎を以て游軍と爲して其關を彌縫せしめ以て城西に戦ひ大に之を敗る斬首萬餘、白純、珍寶を收めて走る降る者三十餘國、光、其城に入り大に將士を饗し因て白純の弟震を立て、王と爲し以て之を安ず光が恩威甚だ著はれ諸國、萬里を遠しとせずして來附す苻堅之を聞き光に使持節散騎常侍都督玉門已西諸軍事安西將軍西域校尉を授く

光既に龜茲を平け將に留まりて西域に居らんと欲す鳩摩羅什の言を聞き之を衆に詢る衆皆還らんとを欲す乃ち駱駝二萬餘頭を以て外國の珍寶及び奇技異戲、殊禽怪獸の類を載せ又駿馬萬餘を得て還



る高昌の太守楊翰、涼州の刺史渠犂に説き高桐、伊吾の二關を守らしむ。犂從はず光還りて高昌に至る。翰、郡を以て降る時に苻堅既に衰敗し長安危殆なり光之を聞き兵を停めんと欲す杜進が曰く速かに進むに若かずと遂に玉門に至り渠犂を敗り姑臧に入り光自から涼州刺史護羌校尉を領す初、鳩摩羅什は龜茲の沙門なり其父鳩摩羅炎本と天竺の相家たり位を棄て家を出で、葱嶺を踰え龜茲に遊ぶ時に龜茲は佛教國たり其王之を聞き迎て以て國師とす王、妹あり年二十、諸國交々聘すれども皆許さず炎を見るに及び獨り之が妻たらんことを欲す王、炎に逼りて之を與へ因て羅什を生む羅什七歳にして母と偕に出家し師に従て經を受け二十にして其母携て沙勒國に至る國王之を重んじ遂に留まること一年、博く五明諸論を覽る既にして龜茲王迎て國に還り廣く諸經を説かしむ四遠の學徒之に抗する者無し苻堅曾て其名を慕ひ密に之を迎へんとするの意あり呂光をして龜茲を伐たしむるに及び之に屬して曰く若し鳩摩羅什を獲ば即ち馳驛して之を送れと而して光之を留めて即ち送らず光、西域に留らんと欲す鳩摩羅什が曰く此れ凶亡の地、宜しく淹留すべからず中路自から福地の居るべき者あらんと光乃ち兵を引て還り涼州に至り苻堅が敗を聞き遂に涼州に據りて帝と稱し西域皆光に朝す鳩摩羅什後、長安に入り多く佛經を譯す佛經の多く行はれしは羅什が力なりと云ふ

案ずるに後漢の時、海道未だ開けず明帝、將帥に命じ西域を征し再び屯田を開く佛法の漢に入りしは此の徑路より來りしなり蓋し佛法の西域に入れるは漢に入りしより早し漢書西域傳に昔匈奴

破大月氏、大月氏西君大夏、而塞王南君罽賓、塞種分散、往々爲數國、自疏勒以西北、休循、捐毒之屬、皆故塞種也、顏師古が注に即所謂釋種者也、亦語有輕重耳とあり捐毒或は身毒に作る蓋し所謂の痕都斯坦なり身毒又天竺天竺に作り即ち印度に同じ皆語音の轉のみ然らば天竺の釋子、其の種族は本と西域諸國と同種たり同種なるが故に其教は早く西域諸國に傳流せられし者なり而るに近人、其源を知らず回部を以て天方教種の國と爲し其本來の佛教國たることを忘るゝに至れるは誤も亦甚し殊に龜茲の如きは晉書にも龜茲國、俗有城郭、其城三重、中有佛塔廟千所と云ひ今に至りて庫車に多く佛跡を存せるをや當時佛法盛に行はれしこと知るべきなり

既にして呂氏も亦敗れ沮渠蒙遜繼で興りて北凉と號す西域又沮渠氏に貢す北魏の太武の時、沮渠氏敗る魏晉以來、西域唯凉に至れるのみ中原に至る者無し太武、都を代（今の山西大同）に開く西域と甚だ相遠からず故を以て太延中、龜茲、疏勒、烏孫、悅般、渴槃陀、鄯善、焉耆、車師、粟特諸國王等始て來り獻す魏是に於て行人王恩生、許綱等を遣りて西域に使せしむ流沙を出づれば輒ち蠕々に執へらる尋いて散騎侍郎董琬、高明等をして多く錦帛を齎し鄯善より出で九國を招撫し厚く之に賜はしむ是より來貢せる者十六國、初、河西王沮渠牧犍は太武の妹婿なり故に魏の使を西域に出せる常に牧犍をして送て姑臧に至らしむ牧犍も亦常に使を發し導て流沙を出でしむ後、使者の西域より還る牧犍の左右之に讒して云ふ牧犍、蠕々の妄説を承け又公主に事ること慢惰なりと使者還り言ふ太武怒り牧



健を討し遂に涼州を平ぐ牧羗か弟無諱走りて酒泉を保す太武又之を攻む無諱、敦煌に走り將に流沙を渡りて西せんとし先づ其弟安周をして鄯善を撃たしむ鄯善拒守す安周克つこと能はずして東城を保す鄯善王比龍懼れ衆を率て西、且末に奔り其の世子は安周に應ず鄯善大に亂る無諱遂に鄯善に據る是より先、關爽と云ふ者あり自から高昌の太守と稱し唐契が爲めに攻められ無諱か鄯善に據れるを聞き詐て無諱に降る無諱乃ち唐契と相撃ち安周を留めて鄯善を守らしめ自から焉耆より東北高昌に赴く會々蠕々、唐契を殺す爽是に於て、無諱を拒て納れず無諱の將衛興奴攻て其城を陥る爽、蠕々に奔る無諱因て高昌に居る繼て無諱死して安周之に代る蠕々遂に高昌を并せ關伯周を以て高昌王と爲す高昌の王と稱するは此より始まる關伯周死す子義成立て王となる從兄首歸之を殺して自立す高車王可至羅(高車は鐵勒の一部、時に北路烏魯木齊附近に在り)首歸を殺し敦煌の人張孟明を立て、王と爲す國人服せず之を殺して馬儒を立つ馬儒、内遷せんことを魏に求む魏之を納れ明威將軍安保をして伊吾の五百里を割て馬儒を置かしむ而るに國人、東徙を願はず相與に儒を殺して又長史麴嘉を立て遂に魏を棄て、蠕々に臣屬す蠕々主、高車に殺さる乃ち又高車に臣たり

初、無諱兄弟の高昌に入るや鄯善王、國を復す魏、成周公萬度歸をして涼州の兵を發して之を討せしむ度歸、輕騎五千進みて其境に臨み毫も侵擾する所無し鄯善之に威じ旗を望みて皆服し其王眞達面縛して出で降る魏乃ち交趾公韓杖を拜して假節征西將軍領護西戎校尉鄯善王と爲して之を鎮せしめ其人を賦役す鄯善是より郡縣に比す而して焉耆も亦萬歸度の破る所となり其王出で、龜茲に奔り國多く車師の據る所となる無諱の高昌に入りしや車師王も亦其の破る所となりて焉耆の車界に奔る既にして高車又車師の人民を焉耆に徙し車師君民皆焉耆に入る後又曠噠に破られ國人分散、衆自立すること能はず王を高昌王麴嘉に請ふ麴嘉、其の第一子を遣りて焉耆王と爲す是に於て車師滅びて焉耆一時、高昌に附庸たり當時佛法大に西域に行はれ龜茲、焉耆、疏勒、于闐諸國皆之を奉ず獨り高昌王、中原の風を慕ひ制度多く漢様を模し其の朝貢するや五經諸史を借り又國子助教を請て以て博士と爲さんことを求め其の王宮坐室には魯の哀公、政を孔子に問ふ圖を畫かしむるに至れりと云ふ

案ずるに西域圖志に御製翻譯名義集正訛を引きて于闐國三藏沙門實又難陀譯と云へるを駁し回部本自有回經、不信佛教、不宜有名僧譯佛經之事と云へり知らず天方教の回部に入れるは何の代より始れる天方教の教祖譙罕默德は西曆五百七十一年(或は云ふ五百七十年)に生れ陳の宣帝が太建三年に當れるに非ずや而して天方教徒の紀元即ち教祖避難の年は西曆六百二十二年にして唐の高祖が武德五年に當る當時早く回部に行はれしむとも猶ほ唐以後に在り況や其の天山南路に行はれしは宋元以後に在りしをや之を如何ぞ回部本自有回經、不信佛教とは云ふべき龜茲の佛法あるは既に説ける所の如く鳩摩羅什の龜茲人たる掩ふ可からざる事實にして庫車の龜茲たる諸書殆ど異論無し庫車に於て佛教の行はれしを否と云ふこと能はずんば何ぞ獨り于闐に於て三藏沙門無しと



せん縦令ひ實又難陀は于闐人ならずとせんも此に由て佛教の行はれざりしを證することを得ず若し後世の回經を奉ずるよりして古昔を斷ずることを得ば印度の如きも今實に回教國たり之をも古昔より佛教國ならずと謂ふも可ならんか乾隆の妄斷も亦甚しと謂ふべし

其後久しく來らず唯、宇文周の時、焉耆、于闐各々名馬を献じ龜茲、使をして來らしめしのみ隋の煬帝の時に至り侍御史韋節、司隸從事杜行滿を遣りて西域に使せしめ又開嘉公裴矩をして武威、張掖間に往來し以て之を招致せしむ其の使者入朝すれば昭はしむるに厚利を以てし其をして轉々相諷諭せしむ故に大業中、一時相率て來朝せし者四十餘國、爲めに西戎校尉を置て之に應接せしむ然れども其後來る者僅に高昌、焉耆、龜茲兩三國のみ而して高昌最も漢地に近く漢風に習へるを以て往來親密にして曾て從て高麗を撃ち還て宗室の女華容公主を尙す然れども其王伯雅曾て臣を鐵勒に稱す故に鐵勒常に重臣を高昌に置て之を監せしめ商胡の往來、之を税して鐵勒に收む後來、回鶻の西州に入る蓋し此に因すと云ふ(回鶻は鐵勒の一部)

### 三 唐の安西四鎮

唐始て興て高祖の武徳七年、高昌王麴文泰、拂菻の狗を献し太宗立て復た玄狐裘を献ず文泰は伯雅の子なり是時、唐の勢威、西域に及び伊吾も亦西突厥を棄て、唐に歸す貞觀四年、唐始て伊吾の地を以て西伊州と爲す隋より以前、西域の來る者皆道、大磧中を過ぎ高昌を経ずして鄯善より直に玉門に入

る隋末以後、大磧路塞り已むことを得ず高昌を経て來る是に由りて高昌は西域必由の孔道に當り西域の動靜、皆知りて以て唐に告げ或は時に之を阻隔す西域諸國多く之を便とせば六年、焉耆王龍突騎支の來朝せる大磧の道を復し以て行李の往來に便にせんことを請ふ太宗之を許す高昌王之を聞て怒り兵を發して焉耆を襲ひ大に掠めて去り又西突厥に結びて伊吾を撃つ太宗之を責め其の大臣を徴して入朝せしむ文泰遣らず然れども唐も亦未だ之を討するに暇あらず既にして西突厥は焉耆を伐ち其の五城を陥れ男女一千五百人を掠めて還る焉耆王之を唐に訴ふ十四年、太宗、史部尙書侯君集に命じて交河道の大總管と爲し左屯衛大將軍薛萬均及び突厥契苾の衆、步騎數萬を率て之を討せしむ焉耆王大に喜び聲援を爲さんことを請ふ兵、未だ高昌に加へざるに文泰適々病て死し其子知盛立つ侯君集の兵、都城に逼る知盛、城を出で、降る君集遂に其の三郡五縣二十一城の地を定め西州を交河城に置き又安西都護府を此に開き以て西域を鎮せしむ既にして西突厥の重臣屈利啜其の弟の爲めに焉耆王の女を娶る焉耆是より西突厥と唇齒を相爲し稍々唐と疎なり安西都護郭孝恪之を撃たんことを請ふ太宗之を許す會々焉耆王の弟頡鼻葉護等三人、西州に至る孝恪乃ち弟栗婆準を以て教導と爲し步騎三千を率ひ銀山の道より焉耆に入る焉耆王、險を恃みて備を設けず孝恪因て倍道兼行し水に浮て渡り急に城下に逼り鼓角俄に起る城中大に擾る孝恪進み撃て突騎支を虜にし因て栗婆準か功を獎し留めて其の國事を攝せしめて歸る屈利啜之を聞き兵を率て來り援く至れば則ち孝恪既に師を旋してより既に三日なり屈利啜乃ち



焉婆準を執へて去り更に吐屯をして来て之に代攝せしむ焉耆の使人、唐に至る太宗之を責む吐屯角懼れ國に返る焉耆の人、栗婆準が從兄薛婆阿那支を立て、王と爲す  
 龜茲も亦初、貞觀四年に使を遣はして馬を獻し太宗、璽書を賜て之を慰撫す是より常に來る然れども一面亦西突厥に臣たり且つ郭孝恪が焉耆を伐ちしとき龜茲、兵を出して陰に焉耆を助く是に由りて朝獻漸く缺く二十年、太宗又左驍衛大將軍阿史那社爾に崑山道行軍大總管を授け安西都護郭孝恪及び五將軍、鐵勒十三部の兵十餘萬を率ゐて之を征せしむ焉耆王阿那支之を聞き己も亦討を免れざらんことを懼れ龜茲に奔り其の東城に保して官兵を禦く社爾先づ處月、處密二部を破り師を進めて其の北境に趨き其の不意に出で、之を撃つ阿那支、城を棄て、走る社爾、輕騎を遣りて追擒し之を斬る龜茲大に震ひ諸城、守を失す社爾乃ち伊州刺史韓威を以て前鋒と爲し追て多褐城に至る適く龜茲王に逢ふ王衆五萬、其の國相と偕に韓威を拒く韓威之を敗り遂に王及び其の大將を擒にし大に西域を定む于闐王之を聞き其子をして駝三百隻を以て軍に饋らしむ社爾將に師を還さんとす行軍長史薛萬備此機に乘りて以て于闐を定めんと請ふ社爾乃ち萬備をして五十騎を率て于闐に至らしむ萬備往て唐の恩威を宣す于闐王、萬備に隨て入朝す西域皆平く是に於て疏勒に疏勒都督府、焉耆に碎葉都督府、龜茲に龜茲都督府、于闐に毗沙都督府を置き各々其王を以て都督と爲し悉く安西都護に隸せしむ所謂る四鎮是なり高宗立て顯慶二年、都護府を高昌の故地に移し明年、遂に龜茲に移す其後、吐蕃盛にして四鎮皆没す則

天后の長壽二年に至り始て之を收復し漢兵三萬人を駐して之を鎮せしむ然れども天寶以後、唐の政令は西域に達せず德宗の貞元中、遂に又吐蕃に陥れり

#### 四 唐後の回鶻、畏兀兒

唐末以來、天下紛々、統一の主無く西域通ずる者少し五代の際、于闐獨り著はれ石晋の天福三年、其王李聖天、使者馬繼榮をして來り獻せしむ晋も亦供奉官張匡鄴をして之に報聘せしむ而して其餘諸國は多く回鶻に佔據せらる初、回鶻は鐵勒の一部たり突厥に臣屬す唐初、東突厥衰へ回鶻漸く其の故地を收め牙帳を大漠の北に建つ元の和林は即ち其の遺址なり安祿山の亂に唐、回鶻及び西域の兵を借り以て兩京を復し因て其兵を沙苑に駐して守備に供す今の陝西同州の回子は其の遺裔たり唐、其の功績あるを以て甥舅の國と爲す後、武宗の會昌五年に至り黠戛斯(即ち奇爾吉思)に侵され部族分散、徙て漠南に至り石雄、劉沔等に襲はれ幽州の節度使張仲武に功められ餘衆西に奔り或は吐蕃に入り或は安西に投し或は甘州に居る甘肅に回子多きは此に由る既にして吐蕃漸く衰へ懿宗の咸通七年、回鶻の僕固俊之を襲ひ庭州、西州の地を奪ひ漸く西域に瀾漫す宋遼の際、焉耆、龜茲皆回鶻に入る天山南路の回子は皆此後なり

案ずるに回鶻又回紇に作る本と鐵勒種なり今の天山南路の回々は即ち此の種人にして葱嶺以西より徙り來りしに非ず蒙古地方より西に徙りし者なり而るに後世其の本原を忘れ回子を以て西より徙り



來りし者とし回々の本國を葱嶺以西に在りと爲し天方教を以て回教と爲し其教を奉する者を以て皆回子と爲す何ぞ知らん葱嶺以西に回々國無く其の教法も亦始より回教と稱せざることを此れ本と漢人の外國の故に通せざるより回々の奉ずる所に因て名づけて回教と云ひ延て其教を奉ずる者に及びて悉く目するに回子を以てし遂に葱嶺以西に回々の本國ありとするに至れる者にして其極や回部本と回經あり佛教を信せずと云ひ或は回々と畏兀兒とを分別するに至る皆此の根本の誤見より來れる者にして天方教盛に行はれたる後よりして之を觀しに因れるなり

西州に居る者を西州回鶻と稱し龜茲に居る者を龜茲回鶻と稱し或は西州龜茲と云ひ其王を克韓王と云ひ或は師子王阿斯蘭漢と云ひ曾て唐に於て甥舅の國たりしを以て五代及び宋に通ずる者と雖仍ほ外姓と稱す

案ずるに克韓王、師子王阿斯蘭漢は蕃漢重複の稱なり克韓は可汗に同じ同義、阿斯蘭漢は阿兒斯蘭漢と云ふを正とす阿兒斯蘭は師子なり漢は汗に同じ亦王の義、蓋し龜茲王本と金師子床に坐せり回鶻其位を奪ひ其床に據り因て阿兒斯蘭漢と稱せるなり

宋初、西州回鶻、龜茲回鶻屢々來る既にして遼金相繼て盛にして宋に通ずることを得ず遼金に服屬す遼の滅びしや耶律大石、西走して葱嶺を踰え國を起兒漫に建つ此を西遼と謂ふ西遼八十年、西域諸國多く之に服屬す西遼主乃ち西州回鶻を封じて交河王と爲す西遼に屬すと雖、亦時に金に貢す金人之を封す畏兀兒は即ち回鶻なり

和州回鶻と稱す元初の時、其王月仙帖木兒死して其子巴而朮阿兒忒斤繼て亦都護たり尙ほ幼し西遼の駒兒汗、太師僧少監をして來て其國を監せしむ少監驕奢淫恣にして亦都護之を患へ國相庇理伽普華に謀る普華勸めて蒙古に降らしむ亦都護遂に少監を殺して元に降る元の太祖時に位に即て四年、其女を以て亦都護に配し以て諸子の末班に置く遂に北廷及び哈密境を併せて畏兀兒國と爲し以て亦都護を封す畏兀兒は即ち回鶻なり

案ずるに亦都護は其國の王號にして唯漢人に對しては可汗と稱せしなり畏兀兒又畏吾兒に作る此れ實は其國の原語なり新唐書回鶻傳に回紇其先匈奴也、云々、其部落曰袁紇云々、袁紇者、亦曰烏護、曰烏紇、至隋曰韋紇とあり袁、烏、韋、畏一音の轉、護、紇、兀、吾も亦一音の轉のみ古音回の音、韋に近し故に又回紇に作り鶻の音紇に同じ故に又回鶻に作る宋史に元和中、訛爲回鶻と云へれど必しも訛れるに非ず舊五代史に云く改爲回鶻、義取回旋搏擊、如鶻之迅捷、也と此れ字に就て附會せるなり本と譯音の異文のみ字に義あるに非ず畏兀兒に作るを最も當れりとす或は委兀、偉兀に作る亦同じ而るに近代回鶻の北音、輝和に近きを以て畏兀兒を改めて輝和爾に作る眞を失ふこと甚し錢大昕、李光庭の輩猶ほ之を誤り遂に回鶻と畏兀兒とを分つ畢竟回鶻の北音、畏兀兒と大異あるが爲めなり此も亦知らざる可からず



女を取て去る後、亦都護入朝して還り州南哈密方に屯す此兵俄に至り遂に之に死す其子幼弱にして國事を視ること能はず是より畏兀兒の國事、元に歸し元、畏兀兒斷事官を置て之に臨ましむ十八年、改めて北廷都護府と爲し二十二年、又和州宣慰司を置き、成宗の元貞元年、北廷都元帥府を立て明年、駙馬亦都護に命じて流散せる畏吾兒民を搜括せしむ然れども未だ其の故地に復せるにはあらざるなり仁宗の時、封して高昌王とし金印を賜ひて之を内地に行はしめ他部に向ては猶ほ亦都護の銀印を以て行はしめ兵を火州に領せしむ後、英宗、亦都護を召して入朝せしめ因て甘肅諸軍を領せしめ仍ほ其部に治す既にして遣りて襄陽を鎮せしめ諸王閩々出をして代て畏吾兒を領せしむ是より亦都護復た畏兀兒の事に關すること能はず元末に至り又哈密を分て諸王納忽里に與へ畏兀兒の故地は分て柳城、火州、土魯番の各萬戸を置く

其干闥一國は宋初、屢々往來あり太祖の乾德三年、僧善名、善法をして來り獻せしむ宋、之に紫衣を賜ふ是冬、僧道圓、西域より還る道、于闐を經、其國又使人をして偕に來らしむ開寶二年、又使をして來らしめて云ふ本國玉一塊あり凡そ二百三十七斤、願くは之を獻せん請ふ使を遣はして之を取れと善法適々至る宋乃ち之に昭化大師の號を賜ひ還て玉を取らしむ四年、又僧吉祥をして國王の書を齎らして來らしめて云ふ疏勒國を破り舞象を得たり以て獻と爲さんと欲すと之を許す後、嘉祐八年、使人羅撒溫をして來て方物を獻せしめ因て封號を請ふ宋以て特進歸忠保順碯鱗黑韓王と爲す

案ずるに宋史に于闐謂<sub>二</sub>金翅鳥<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>碯鱗<sub>一</sub>、黑韓蓋可汗之訛也とあり西州回鶻の阿兒斯蘭漢たるに對し此は碯鱗黑韓と云へるなるべく彼は坐床に因て名づけたりとせば此は冠飾に因て名づけたるなるべし黑韓、克韓は譯音なれば定字あるに非ず而るに宋史の甘州有<sub>二</sub>可汗王<sub>一</sub>、西州有<sub>二</sub>克韓王<sub>一</sub>、新復州有<sub>二</sub>黑韓王<sub>一</sub>、と云へる字を以て之を分つは漢人の習のみ西域に漢字無し字を以て分つ可らず故に于闐に於ても亦黑韓と云へり之を要するに可汗、克韓、黑韓同一譯音の異文のみ

熙寧以來、來る者益々多く近きは一歳にして再び至り遠きも一二歳を踰えずして必ず至る蓋し其の來るや多く私物を帶びて商賈と交易し售られざれば之を外府に歸し善價を得て去る故を以て此の如し元豐以後、唯々表章を齎して來る者のみ其の入京を許し元祐中、更に其の隔年に一至するを許す其後、宣和の時に至るまで來る者絶えず宋既に南渡して復た來らず亦西遼に服屬す今に至りて于闐城に古塔あり土人云ふ喀喇和台の建つる所なりと喀喇和台は蓋し西遼を謂ふなり

案ずるに喀喇和台は喀喇乞解の轉訛なり喀喇乞解は即ち喀喇契丹にして蒙古語に本づく蒙古本と直に漢地に接せず契丹と相隣し契丹人に因りて漢人を知る故に初漢人を稱して契丹と爲し既にして漸く其の別あるを知り更に契丹を稱して喀喇契丹と爲す遼は契丹種なり故に西遼人を喀喇和台と稱す契丹の原語は奇塔特なり蒙古語今に於てキタトと云ひ露國人之に因りてキタイと云ふキとヒと音相近し因て轉してヒタイとなり又轉じてホタイとなる新疆撮要錄に或曰、和闐即古于闐故地、而回子



呼漢人、謂之赫探、漢任尙都護西域以後、遺其人衆於西、和闐回子皆其遺種、故回子呼爲赫探者、音訛也、然皆無考據矣と云へる此れホタイ又變してホタンとなりし者にして干闥の豁丹と稱せらるゝと相關せるに非ず而るに後世附會者ありて此説を出せるのみ取るに足らざるの説なり元の太祖が西遼を滅すに及び遼主を斬り以て合失合兒、鶻兒看、斡端の三城に拘ふ是より元の有となり太祖次子察合台の分地たり合失合兒は即ち今の喀什噶爾、鶻兒看は即ち葉爾羌、斡端は即ち和闐なり當時之を三城と稱す蓋し西域に於て大聚落たりしなり後、世祖の時、察合台の後王阿魯忽此に居り固を恃みて使者を留めて遣らず使者脱して歸る世祖怒り不花帖木兒に命じて之を征せしむ中統三年、阿魯忽内附し既にして又叛王海都に屬す至元中、世祖又劉恩をして之を征せしむ十八年、劉恩伏を設けて之を敗り海都、衆三萬を率て來り救ふ恩、衆寡敵せず師を收て還る明年、再たび兵を出して之に勝ち遂に宣慰使及び戍兵を置く廿六年、宣慰使元帥府を罷め復た阿魯忽を此に封ず爾後復た聞えず

#### 五 明の哈察は土魯番、于闐

元末以來、焉耆、龜茲皆別失八里に屬す別失八里は即ち回鶻なり其餘は大抵開ゆること無し唯、哈密土魯番、于闐のみ少しく知る可きなり洪武中、哈客の納忽里死し弟安克帖木兒（或は烟克帖木兒に作る）嗣き永樂の初、來て馬を獻せしむ明朝、封して忠順王と爲す尋いで韃靼の鬼力赤汗に毒殺せられ兄の子脱々之に代る四年、脱々其の祖母に逐はれて明朝に歸す明、其の頭目を責め脱々を還して之を

立て因て哈密衛を設け其の頭目馬哈麻火者を以て衛の指揮と爲し周安を忠順王の長史とし劉行を紀善として之を輔導せしむ哈密是より毎年初貢す

案するに天山南路に天方教の行はれし未だ何の代よりせしを詳にせず然れとも今、馬哈麻火者の名に因て之を考ふれば是より前、已に盛に行はれしこと知るべし馬哈麻は即ち謨罕默特にして此の教中、此を以て名とする者多く火者も亦即ち和卓木にして此の教中有道者の稱なりされば馬哈麻火者が天方教徒たること論を待たず宋史天竺傳に有婆羅門僧永世、與波敷外道阿里烟、同至京師云々、阿里烟自云、本國王號黑衣、姓張、哩里沒云々、又大食傳に大食國本波斯之別種、隋大業中、波斯有桀黠者、探穴得文石、以爲瑞、乃糾合其衆、剽略資貨、聚徒浸盛、遂自立爲王、據有波斯國之西境云々、其王益泥末換之前、謂之白衣大食、阿蒲羅拔之後、謂之黑衣大食と云へり（此事最も唐書に詳なり）黑衣大食は謨罕默特の叔伯の裔にして阿里烟其王を黑衣と號すと云へるは黑衣大食なるを云へる者にして所謂る波斯外道は天方教なること明らかに其の天山南路に行れしは同史高昌傳に復有摩尼寺、波斯僧、各拂其法、佛教所謂外道也と云へれば宋代よりして既に行はれしを徵するに足る唯、當時佛教尤も盛なりしが故に外道の勢振はざりしなりしのみ元以後に至りては波斯、阿喇伯亞等の人、元人に從て多く東に來り此より益々行はれ遂に回部自有回經、不信佛教と誤認せらるゝまでに及ぶ明初既に盛に行はれしこと推知すべし前に回教の事を説きて此に及は



ず故に今之を補ふ

七二〇

然れども脱々國事を恤へず明朝屢、官を遣はして飭戒せしむ八年、暴に病て死す明乃ち都指揮同知哈喇哈納を擢て、都督僉事として其地を鎮守せしめ且つ脱々從弟免力帖木兒を封して忠義王とし世々哈密を守らしむ宣宗の時、免力帖木兒死す脱々の子ト答失里に命して忠順王を嗣かしむ然れとも亦其の幼冲なるを以て宣德三年、免力帖木兒の弟脱歡帖木兒を以て忠義王を嗣ぎ同く國事を理めしむ哈密是より兩王あり初、成祖の忠順王を封せしや其意に謂ふ哈密は西路の要路たり朝使を迎護し諸蕃を統領し以て西陲の藩屏たらしめんと而るに其王大抵庸懦にして統御の力無く種族一ならず衆心離渙し國勢日に衰ふト答失里死し其子倒瓦答失里立つに及びて都督皮剌納、潜に瓦刺の猛可不花に通じ之を殺さんことを謀り四鄰も亦皆之を圖る瓦刺の也先(即ち衛喇特的額森)は王の母の弟たり先づ兵を遣りて哈密を圍み王の母及び妻を取て還る既にして之を還し又取りて去り王をして必ず自から往て之を見せしめんと欲す是時に當りて王、明朝に順服すと雖、内實に也先を懼る乃ち自から瓦刺に赴く然れども也先専ら漠南を争ひ久しく故地に歸らず故を以て哈密僅に事無きを得たり既にして王死して嗣無し王の母、國事を掌る明朝、國人に命して王位を襲ぐべき者を議せしむ王の母云ふ安定王阿兒察、忠順王と同祖なり請ふ王位を承けしめんと時に韃靼の兀加思蘭、哈密を襲はんと欲す阿兒察之を知る故に辭して行かず兀加思蘭果して哈密を攻め大に殺掠を肆にす王の母、苦隘に奔る然れとも明朝之を討するこ

と能はず唯々命して速に嗣を擇ばしむるのみ蓋し國人は脱歡帖木兒の外孫把塔木兒を立てんことを欲し王の母は安定王を立てんことを欲す故を以て哈密、主無きこと八年、是に至りて頭目等又把塔木兒を立てんことを請ふ乃ち把塔木兒を以て右都督と爲し國事を攝行せしむ既にして把塔木兒死し其子罕慎、職を襲がんことを請ふ明朝之を許して未だ國事を攝することを許さず國中の政令出る所無し土魯番の速檀阿力、機に乗りて其城を襲ひ王母を執へ其の金印を奪ひ忠順王の女孫を以て妾と爲し妹婿牙蘭をして其地を據守せしむ

初、元末、高昌分れて三となる永樂四年、明朝鴻臚寺丞劉帖木兒を遣りて別失八里に使せしむ道、其地を過る因て其長に贈るに綵幣を以す是に由り柳城、土魯番の兩萬戸及び火州の王子皆使を遣はして偕に來り獻せしむ其後、屢々來る二十年、土魯番の會長尹吉兒察、別失八里の會長歪思に逐はれ奔りて明に歸す明朝之を憫み授くるに都督僉事を以てし故地に復せしむ是より朝貢絶えず然れとも其地小にして微弱、未だ甚だ著はれず正統中に至り柳城、火州の兩萬戸を併せ遂に強大となり其長也密力火者自から僭して王と稱し阿力に至りて成化中、遂に自から速檀と稱す

案するに此に至りては回部全く天方教國となり速檀は速魯檀に作るを原音に近しとす古書或は算灘に作り算端に作る者あり皆譯音の小異のみ天方教國は此を以て其の王號とす此く全く天方教國とされること知べし也密力火者は額敏和卓なり額敏は回語清の義即ち其の教旨なり又阿力は十葉教の派



祖を阿里と云ひ謨罕默特の兄の子にして、又女婿なり阿里、阿力同じ蓋し其名を取りて名づけし者、當時の情形是に由りて大抵推知すべし

時に哈密久しく主無し阿力之を窺ひ遂に襲て之を併せ王の母と金印とを奪て去る明朝之を討せんと欲して未だ能はず阿力も亦能く修貢故の如し明朝是に由りて遂に討すること能はず因て之を善遇し未だ嘗て一語も之に切責を加へず阿力心驕り終に城と印とを歸さず阿力死して其子阿黑麻嗣の速檀と稱す哈密の都督罕慎、潜に哈密城を擣て之に克つ牙蘭遁れ去る明之を聞き罕慎の功を嘉し立て、以て王と爲さんとす阿黑麻怒て云く罕慎は忠順の族に非ず焉と立て王たることを得んと乃ち詐て婚を約し誘て之を殺し復た牙蘭を遣りて哈密を守らしむ明又之を討すること能はず唯々命して其の侵地を還さしむるのみ其の明年、哈密の舊部緙下都等、衆を率て牙蘭を攻め其の人畜を奪て歸り都指揮阿木郎も亦邊兵を借りて牙蘭を破り忠順王の族孫陝巴を得、將に之を輔立せんとす阿黑麻懼れて城と印とを還す乃ち陝巴を立て、忠順王と爲し哈密城に納る既にして阿木郎、北山のセ力克人を引て土魯番を掠め其馬を獲て歸る阿黑麻怒り兵を起して哈密を攻め陝巴を執へ阿木郎を殺し又牙蘭をして哈密に據らしむ甘肅の巡撫許進、夜、牙蘭を襲て之を走らす土魯番乃ち陝巴を還す阿黑麻死して其の長子滿速兒嗣ぎ陝巴も亦死して其子拜牙郎嗣ぐ滿速兒築點にして之を併せんと欲し拜牙郎を誘出し因て復た哈密に據る明、彭澤を遣りて之を經略せしむ滿速兒反て甘肅を犯し陳九疇等力戰して之を退く然れとも哈密北よ

り復た收復すべからず

案するに秦邊紀略に土魯番之眞帖木兒、以爲質于内地、寓甘州、正德八年歸、而語滿速兒曰甘州城南黑河、可引以灌城、于是滿速兒日夜謀攻甘州矣、嘉靖元年、滿速兒以二萬騎寇甘州、薄城仰攻、都御史陳九疇、率衆先登力戰、乃解圍去とあり此時の事なり明史此事を載せず故に此今に附記す

既にして牙蘭、罪を其主に得て所部二千人を率て降る明朝之を納れ復た城と印とを問はず忠順の裔遂に終る所を知らず滿速兒死し其の長子沙繼て速檀と稱し其弟馬黑麻も亦同時に速檀と稱し哈密に分據す馬黑麻、瓦剌に婚し以て其兄に抗す沙死し馬黑麻、兄の後を襲ぐ其弟瑣非等三人も亦速檀と稱して之を争ひ同時に使を遣はして來朝せしむ明の禮官、奏請して其の犒賜を裁し唯々其の馬黑麻の使に隨て來ることを許し以て明末に及べり

其の子圖は元末の時、其王闇弱にして隣國交々侵し人民稀疏、悉く避けて山谷に居り生理頗る蕭條を極む以て永樂中に至りて擅に攻伐する者無く人々始て蘇息することを得、四年、使をして明に朝獻せしむ明も亦使をして偕に往て之に物を賜はしむ是より時に來りて玉及び馬を獻ず仁宗の時、其の費多くして上下を擾累するを以て命じて復た西域に使せざらしむ是より貢使來る者稀なり然れども亦萬曆中に至るまで朝獻絶えず蓋し西域諸國、前漢以來より以て明末に至る其間、變遷多くして後世知るを



得可からざるもの少からず唯、于闐のみ終始其名を改めず獨り存じて後に在りと云ふ

七二四

## 第二十六章 清代の天山南路

### 一 哈密、吐魯番の歸服

清朝の興れるや恰も北路準噶爾強盛の日に當り明朝の滅びしや南路回部方に其の壓箠を受くるの時に當れり而して哈密、吐魯番の二部、回部に於て最も漢地に近く且つ明代より曾て通交の例ありしに因りて清朝の明に代りしや此の二部先づ來て款を通ず是時に當りて西域の元裔既に絶えて哈密、吐魯番の長は皆葉爾羌の蘇爾檀が分族たり初、葉爾羌の蘇爾檀、兄弟九人あり分れて各處に居る長を阿布都喇と曰ひて葉爾羌に居り次は何布勒阿哈默特、吐魯番に居り次は賽伊特、次は巴拜、哈密に居り次は瑪哈默特蘇勒檀、帕方に居り次は沙汗、庫車に居り次は早く死して其名傳はず次は伊思瑪業勒、阿克蘇に居り次は伊卜喇伊木、和闐に居る

案ずるに哈密の元裔已に久しく絶えたるは既に説く所の如し而して葉爾羌の蘇勒檀は何人の後なるを知らず濟部要略回部に回部不詳其世系、大部二、曰哈密回部、曰吐魯番回部、二部錯居西域、以天方爲祖國と云へり然れども此れ回人を以て悉く所謂る天方國即ち漢罕默特の本國より移住せる者と爲せるなり知らず古の回鶻は種皆盡きたりや否や余想ふに決して然らず回子は獨り西域に

のみ居れるに非ず甘肅省内に居る者あり陝西に居る者あり雲南に居る者あり彼皆回鶻の遺種にして天方より移住せる者に非ず而も天山南路の回子と氣脉相通じ共に天方教を奉じ若し天方教を奉ずる者を以て悉く天方より移り來れる者と爲さず凡そ回鶻種の皆天方より來ると謂はざることを得ず殊に知らず天方教の起れるは隋唐以後に在り回鶻は其前に在りて已に著はれたることを且つ所謂る天方は阿刺伯亞國にして回鶻は鐵勒の一部たり本は相關知せず而るに宋代以來、波斯の外道、西州回鶻に入りて回鶻人始て之を奉ず故に世人因て回教と稱し是より誤りて其教を奉ずる者を稱して悉く回子と爲し其教を出る所を稱して回々國と爲す是に於てか回々と回鶻とを分つの説出づ然れども其實宇宙の間天山南路の外、別に回々國と名づくる者無きなり回々は決して天方教祖國の稱に非ず此を其稱と爲すは漢人の外國の故に通せざるより出でたる誤認のみ故に哈密、吐魯番の回子は皆天方を以て祖國とせず唯、其内所謂る纏頭回と云へる者は回鶻の種に非ずして天方より徙り來れるのみ天山南路唯、此輩のみ天方國を以て祖國とす要略又云く嘗以白布蒙頭、故稱曰纏頭回、又稱曰白帽回、回人自呼白帽、曰達斯塔爾、別有紅帽回、輝和爾、哈拉回諸族、然以纏頭回爲著と布を以て頭を蒙ふは莫北に在りし回鶻の風に非ず固より熱國人の習なり此れ其の天方の移住者なること知るべし而るに天方教盛行はれしより主客顛倒し其の蘇勒檀は蓋し纏頭回種より起り原地主たりし回鶻は反て其の奴僕となり人をして回子は盡く天方より徙り來れる者の如く想像せしむるに



至り近人、更に畏吾兒を改めて輝和爾の字を用るに及び殆ど畏吾兒即ち回鶻種の有無を疑はしむ然れども畏吾兒の種人は終に絶滅せるに非ず唯、天方教に化せられて殆ど混じて一となれるのみ秦邊紀略肅州衛の注に哈密衛徒居衛之東關廂者三族、曰畏吾兒族、其人與漢俗微同、曰哈喇灰族、其人與夷俗同、一曰白面（面は帽の誤）回々、則回族也とあり所謂の畏吾兒は要略の輝和爾にして哈喇灰は即ち哈拉回、白面回々は纏頭回なり當時三族猶ほ少しく異同を存し各々相分つ可かりしなり蓋し畏吾兒は久しく漢人と相接し微しく漢風に染まり哈拉回は蒙古に親しみて蒙古の風を帯び纏頭回のみ依然たり天方の舊習を失はざりしかば天方を以て回々國と誤認せる漢人は則回族也と云へるなり今に至りては均しく回子と稱せられ氣味同一にして同教の故を以て千里相應じ信念堅固にして同教相助け一方に事あれば一方隨て動き誅鋤に難し清朝の屢々回子の亂に困しめるは實に之が爲めなり

會同館五

順治三年（我正三年、四一六四年）阿布都喇、清朝に通せんを欲し阿布勒阿哈默特をして都督瑪薩朗、琥伯峰等を遣し來りて貢市を通せしむ清廷、前朝の例に依り北京の會同館及び蘭州に在りて互市することを許す但例に依りて官を以て之を監せしめ熟鐵と軍器とを市ふことを許さず是より前、哈密衛の輝和爾都督赤金蒙古衛の都督永柱等、明末を以て入貢し流寇の亂に劫掠せられて肅州に留まる四年、甘肅巡撫張尙に就て糧を乞ひ因て内附を請ふ清廷之を許す五年（我慶元年、四一六八年）河西の回子丁國棟、米喇印等、亂を

河州に作す陝西總督孟喬芳、蘭州の鎮兵を調して之を討せしむ張文衡時に甘肅巡撫たり兵を率て之を圍み遂に之を降す丁國棟等皆撫を受く既にして鎮兵の遠征に憚かるを察し中ごろにして變せんと欲し陰に中軍參將蔣國泰等に結び詭て會議と稱して張文衡を迎ふ文衡知らず米喇印の家を赴く將に至らんとす回子等矢を集めて文衡を射て之を殺す總兵劉良臣、西寧巡道林維造、守道張鵬翼、副將毛鏞、潘雲騰、遊擊黃得成、都司王之備、守備胡大年等同時に皆殉す是に於て米喇印は甘州に據り丁國棟は肅州に據り哈密、吐魯番の回子を煽惑し哈密の部長巴拜が子土倫泰を奉じて王と爲す而して白帽、紅帽、輝和爾、哈喇灰等、聚れる者數千、各々都督を置き難然紛然、河西諸郡大に亂る清廷之を討して甘州を攻め未だ下すこと能はず溝を深くし壘を高くし以て之を困す回子來り犯す乃ち之を撃ち二百級を斬り其の採樵者四百餘人を殲し遂に雲梯兵をして肉薄して城に登らしめて之に克つ米喇印遁る追て之を陣斬し進で肅州を攻め土倫泰以下回子二千餘人を斬り丁國棟を擒にす哈密都督和卓哈資、纏頭回都督琥伯峰、哈拉回都督茂什爾瑪密、輝和爾都督瑞瑚哩、左都督帖密卜喇、紅帽回右都督恩克默特等皆斬らる清廷乃ち嘉峪關を閉ぢ以て西域の往來を絶つ阿布都喇之を聞き巴拜を責めて之を禁じ阿布勒阿哈默特の子を以て其位に代はらしめ回子克拜を遣はし來て嘉峪關を叩き仍ほ哈密の使と稱して通貢を請はしむ甘肅の提督張勇許さずして曰く盡く内地の民を歸せと蓋し此亂に漢民の掠め去られし者ありしなり



案ずるに此亂を記する藩部要略は順治六年と爲し名臣傳は五年と爲し秦邊紀略は七年と爲す未だ孰れが是なるを知らず唯、思ふに亂の初て起りしは五年に在りて張文衡等之に死し其の甘州を陥れ甘肅二州に據りたるは六年に在らん而して清廷の之を收回したりしは七年に在りしなるべし諸書各、其一を擧げて言ひ皆誤れるに非ず唯、事實を盡すこと能はざるのみ

十年、吐魯番の阿布勒阿哈默特已に死して賽伊特之に嗣ぎ使人穆蘇喇瑪察朝克等を遣はし亦關を叩て市を通せんことを請はしむ勇又納れず之を責むること哈密の使の如くす十二年、克拜又至り内地の民十五人を献じ葉爾羌の阿布都喇が表を呈す拜城及び薩麻察諸地の使人從ふ張勇、其の盡く内地の民を出さざるを責め又表署の前後相異なるの故を詰る克拜乃ち之に故を告げ且つ曰く内地の民を察出すること百五十人、將に來り献せんとす適、準噶爾の渾台吉に掠められ存する者僅に十五人、謹て以て献すと清廷、其の異志無きを嘉して之を納れ使者三十人を限りて人京せしめ從者三百、皆肅州に留む貢する所、獨峰駝四、西馬一、蒙古馬三百二十四、璞玉千斤、清廷之に賞物を給する獨峰駝に緞絹各、十二匹、西馬に緞絹各、二匹、蒙古馬に緞絹各、馬の數の如し璞玉に絹二百匹、五年に進貢一次を許し其の貢物は馬四匹、蒙古馬十五匹に止めしめ此外多く貢することを許さず爾來久しく來らず康熙十二年(我延寶元年、西一六七三年)に至り吐魯番の使人烏魯和卓等至り西馬四、蒙古馬十五、璞玉千斤を献し表に禡木特賽伊特汗と稱し末に一千八百十三年二月二十八日と署す

案ずるに池北偶談卷一に吐魯番自順治十三年入貢、至康熙十二年、國王琿墨忒賽伊忒韓、復遣其臣兀魯和墜等獻馬云々とあり瑪墨忒賽伊忒韓は即ち禡木特賽伊特汗、兀魯和墜は即ち烏魯和卓なり但順治十三年と云へるは十二年の誤なるべく一千八百十三年は所謂る回々紀元なり十八年、張勇謀して準噶爾の噶爾丹が將に哈密を襲はんとするを知りて入告す清廷命して備を邊汛に設けしむ時に噶爾丹、帳を移して阿爾泰に在り哈密は其威に畏れて之に屬し吐魯番は策妄阿喇布坦に服す二十年、吐魯番又伊思喇木和卓をして來て馬と璞玉とを献せしむること定額の如し清廷命して自後復た馬を献せざらしむ

案ずるに池北偶談卷二に康熙二十一年、土魯番上言云々、切照、前經遣發進貢烏盧火者、曾上諭五年一次進貢、欽此、所以悞北進貢者、原因臣國遭逢荒亂、今幸太平、亟遣亦思喇木火者、前往進貢、至於以後應進貢物、合應照密爾焦地音阿克喇覃進貢舊例云々とあり二十一年は二十年の誤寫なるべく亦思喇木火者は即ち伊思喇木和卓にして烏盧火者も亦前の烏魯和卓なり唯、密爾焦地音阿克喇覃と云へる者は他に見えたる者無し或は明代に在らん

二十五年、烏魯和卓又至り吐魯番屬人の前に入貢に因て甘肅に駐まり西寧に流寓せる者を歸されんことを請ふ清廷之を察するに回子の西寧に住する者無し之を諭して歸らしむ噶爾丹の喀爾喀を襲ひしや策妄阿喇布坦、北路に還り博羅塔拉に居り叔姪相善からず清廷其隙に乗り



此二人を構へんと欲し理藩院の員外部馬廻を遣りて策妄阿喇布坦に使せしむ道、哈密を徑、額魯特人罕都、羅卜藏額琳沁等來り降り尋て叛き去り噶爾丹の屬人と偕に兵五百を以て馬廻を殺し駝馬を掠めて遁る哈密に達爾漢伯克額貝都拉と云ふ者あり之を聞き馬廻が從者に糧と騎とを給し護して嘉峪關に送る清廷、昭武將軍郎坦に命じて甘州に屯し以て噶爾丹に備へしむ會、噶爾丹、使を遣はして糧を哈密に乞ふと告ぐる者あり郎坦、噶爾丹及び哈密回子を討せんことを請ふ清廷許さず三十五年、噶爾丹既に敗れ所屬を集め哈密の糧を取らんことを謀る是より先、清廷、孫思克をして肅州に駐せしめ副都統阿南達をして哨を布隆吉爾、巴里坤、塔勒納沁、都爾博勒津諸地に設け以て噶爾丹を窺はしむ阿南達、哈密の回子の税を額魯特に輸す者を擒にし之に詢して噶爾丹が在る所を知る是に至りて額貝都拉、降表を奉して嘉峪關に至らしむ乃ち遣り回して之に告げしめて曰く若し噶爾丹、爾か境に竄れば必ず擒にして來り獻せよ然らずんば來り告げよ若し之に騎と糧とを給し他に向て去らしめば爾が降表信するに足らずと而して噶爾丹も亦哈密の己れを襲はんことを懼れ終に來らず時に葉爾羌の汗阿卜都賽伊特降を乞ひ且つ告げて曰く葉爾羌の兵、現に二萬あり吐魯番五千あり請ふ自から吐魯番に赴き策妄阿喇布坦と偕に噶爾丹を執へて獻せんと額貝都拉も亦、納林伯克をして來り奏せしむ噶爾丹の至るを偵して之を擒にせんと既にして噶爾丹の子色布騰巴爾珠爾（或は塞卜騰巴爾珠爾に作る）其屬を從へて巴爾坤に獵す額貝都拉、長子郭帕伯克を遣り兵三百を率て之を擒せしむ策妄阿喇布坦聞て之を索むれ

ども與へず三十六年、次子白奇伯克をして色布騰巴爾珠爾及び其屬を獻せしむ未だ幾ならざるに噶爾丹死し其の族子丹濟拉、哈密に奔る額貝都拉迎て城に入れ尋て郭帕伯克をして護送して清廷に致さしむ清廷之を嘉し額貝都拉に授くるに一等札薩克を以てし敕印、銀幣を賜ひ紅纓を給し其子郭帕伯克を二等伯克として旗務を協理せしむ伯奇伯克にも職を授くること郭帕伯克の如くす明年、清廷、官を遣り哈密に赴きて旗隊を編ましめ管旗章以下の職を設くること内札薩克の例の如くならしむ策妄阿喇布坦、哈密の噶爾丹が子を擒獻し己に與へざりしことを憾み其屬の吐魯番に赴て市する者を掠めしむ哈密之を誣ふ清廷以て策妄阿喇布坦を責む準噶爾益々哈密を怨む五十四年四月、遂に兵二千をして哈密を襲はしめ城北の五寨を掠む時に肅州の遊擊潘之善、甘肅二州の兵二百を率て哈密に駐防す潘之善乃ち其兵と回部の卒とを領し奮撃して九十級を斬り三人を擒にす準噶爾退て城南二十里外に屯し肅州の援兵至ると聞て引き去る既にして又來り襲はんとすと告ぐる者あり清廷是に於て進勦の事宜を議す西安將軍席柱奏す當に先づ吐魯番を取り檄を哈薩克、布魯特諸部に傳へて策妄阿喇布坦を協勦せしむべしと清廷命じて巴里坤に屯し明年を俟て吐魯番を進勦せしむ貴州巡撫劉蔭樞、兩疏して師を緩めんことを請ひ頗る旨に忤ふ然れども明年、暫く進勦を停め兵を募りて屯田を哈密屬及び巴里坤、布隆吉爾等の地に興さしむ五十六年、靖逆將軍富寧安、巴里坤兵を遣りて烏魯木齊、吐魯番を撃たしめんことを請ふ清廷、其の取も復た失はんことを慮り軍前の諸大臣をして詳に籌議を加へしむ然れども富寧安



其の攻め易く守り易きを視、尋て又之を取らんことを請ひ遂に烏魯木齊を撃ち唯々吐魯番を取らずして還る五十九年(我享保五年、西一七二〇年)散秩大臣阿喇納、兵を以て闕展、魯克沁、吐魯番諸城に赴き檄を以て之に諭して曰く大兵の準噶爾を征せるは爾等を仇とするに非ず爾等若し速に計を決せずんば將に爾等が城を破らんとす後に悔えとも及ぶこと無けん諸城の回衆之を聞て降を乞ひ軍械五百餘を献す乃ち其衆を撫して還る唯々吐魯番の頭目阿濟斯和卓獨り準噶爾に走る策妄阿喇布坦之に兵を授け吐魯番の數千戸を脅かして喀喇沙爾に徙らしむ然れども脱歸する者千餘戸、皆魯克沁に聚り托克托瑪木特を推して總管と爲し準噶爾兵を拒く魯克沁の本と大河渾額敏和卓族居の地たり大軍旋る準噶爾、額敏和卓を脅かして喀喇沙爾に徙らしむ額敏固く之を拒み托克托瑪木特と偕に使を遣はして内附を請ひ又屢々援を乞ふ六十年、吐魯番の回子阿喇布坦等、富寧安の軍に抵り回衆、準噶爾の盾に堪へざるを訴へて内附を請ひ且つ準噶爾の甲を献し大軍の赴援を乞ふ清廷乃ち富寧安をして兵一千を簡し吐魯番に赴き降回を收納し兵を駐めて之を護せしむ時に準噶爾の博斯和勒、額穆齊宰桑、兵を以て吐魯番を襲ひ托克托瑪木特等急を告げ撫遠大將軍允禎等以爲らく大軍進勦せば準噶爾必ず竄れん然れども兵を留むること少ければ濟ること無く多ければ糧運に難からんと故を以て敢て即ち進まず清廷重ねて進軍を促す乃ち阿喇納をして兵二千を以て馳せし吐魯番を援けしめ副都統莊圖、穆克登をして各二千の兵を督して之に繼がしめ別に兵八千を以て鄂隆吉、科舍圖等の地に屯し以て應援を行はしむ阿喇納、吐魯番に抵

り準噶爾賊二千餘に遇ひ迎て之を撃つ斬俘百餘、準噶爾、騎を棄て、走る遂に屯田を吐魯番に興し哈密の回民を遣りて役を助けしむ明年、巴里坤兵五千を遣りて吐魯番城を築き以て準噶爾を防がしむ雍正三年(我享保十年、西一七二五年)準噶爾、吐魯番を得て以て和を結ばんと請ふ清廷、吐魯番の回衆萬餘を瓜所二州に徙し因て大軍を撤して還る其の魯克沁に留れる者は尙萬を以て計ふ皆額敏和卓をして之を轄せしむ四年、闕展、魯克沁、吐魯番の回衆六百五十餘戸を肅州金塔寺、威魯堡等の地に徙し托克托瑪木特をして仍ほ之か總管たらしめ因て駐防哈密の兵を減す準噶爾又間に乗りに駝馬を盗む清廷是に於て安西鎮の兵五百を嘉峪關より哈密に至るまでの各軍站に留め以て不虞に備へしむ七年、哈密の札薩克額敏(額敏和卓と異なり故に特に札薩克を冠して之を分ち相混す可らず)來朝し固山貝子に晋封せらる時に策妄阿喇布坦己に死して其子噶爾丹策凌立つ清廷其の新立未だ固からざるに乗して之を滅さんと欲し又寧遠大將軍岳鍾琪をして大軍を統へて巴里坤に屯せしめ哈密及び塔勒納沁に墾耕せしむ明年哈密新墾の地に於て青稞六千四百石を收む鍾琪奏して額敏を獎賞す九年、鍾琪又哈密の師を準噶爾に漏し且つ導て巴里坤の駝馬を盗ましめしの形跡あるを以て告ぐ清廷命するに加意防護し疑懼の心を生せしむ可からざるを以てす護理寧遠大將軍紀成斌、準噶爾の吐魯番を侵すを偵知し樊廷等を遣り兵四千を率て赴援せしむ準噶爾遁れ去る師還れば復た來て吐魯番を襲ふ吐魯番復た來て援を乞ふ紀成斌乃ち吐魯番に命じて自から計を爲さしめ復た兵を遣りて救はず清廷、岳鍾琪に令じて心を悉して經理し



其の往援すべきと否とを觀察せしむ既にして岳鍾琪、準噶爾の魯克沁を圍むを偵し因て兵三千を以て馳せ進み敵の通るゝを俟て吐魯番を駐せんことを請ふ清廷以て良策と爲して之を許す鍾琪乃ち總兵張元佐をして兵三千を率て吐魯番に赴き別に兵六千を以て塔呼及び洮賚の隘に屯せしむ準噶爾果して魯克沁を圍む額敏和卓、城を閉ぢ間を伺ひて賊を撃ち四旬餘まで下らず準噶爾復た木梯三百を用て喇和卓を攻む回衆之を拒て五百餘級を斬る準噶爾、大軍將に至らんとすと聞き甲械を棄て、去る尋て又吐魯番を侵す副將王廷瑞等、擊斬すること二百餘、乃ち去る然れども清廷其の大衆再舉して來らんことを懼れ岳鍾琪を責め持重愼靜以て吐魯番を保するを以て務と爲さしむ十月、噶魯丹策凌、其將色布騰、車凌納木札勒等を遣り烏克々嶺、西喇呼魯蘇より兵を分て哈密及び塔勒納沁を襲はしむ札薩克額敏、健卒を簡び伏を城外に設けて之を禦ぎ且つ岳鍾琪の軍に赴き急を告ぐ鍾琪乃ち總兵曹勳に檄して往て之を救はしめ又其の北山に竄れんことを慮り副將軍石雲倬に檄し伏を巴罕恩度爾に設けしめ署鎮海將軍卓爾をして察罕春集に伏せしめ副將軍常賚をして烏克々嶺に赴き賊の竄路を截らしむ曹勳、敵五千餘に遇ひ奮て之を撃つ賊、烏克々嶺より塔呼、納呼を越て遁る時に哈密城外放牧の牲畜、一時收回に暇あらず皆奪ひ去らる清廷爲めに銀萬兩を出して之に分給し城を守り敵を禦ぎし者には別に五千兩を賞し悉く其恩に均沾せしむ尋て噶爾丹策凌の宰桑額爾克得松又喀喇和卓を犯す參將劉炎等之と戦ひ準噶爾敗走す時に吐魯番の駐防兵八千、運糧兵五百を除く外、大抵諸城邑に分屯す護理寧遠大將

軍張廣泗奏して兵を魯克沁、喀喇和卓、闐展、英格の四邑に聚め又各邑の回衆を魯克沁の一處に聚め以て敵の槍掠を絶つ既にして準噶爾、大に額爾德尼昭に敗れ重を北路に注ぎ復た西路を襲はず清廷、此間を機と爲し吐魯番の回衆を内地に徙さしむ額敏和卓之を率る瓜州に徙れる者八千十三人、清廷、陝甘總督劉於義をして堡を築き屋を建て口糧、牛具、穀種を給して之を安置せしめ額敏和卓には内地の官祿に準じて糴米を支給し其餘は功の大小を量り一等には正千戸、二等には副千戸、三等には正百戸、四等には副百戸の職を授く是時に當り準噶爾の大小策凌敦多布等已に死し清廷も亦遠征の費多くして功少きを悔い準噶爾と和せんと欲し十三年、遂に西北兩路の兵を撤す然れども猶ほ兵三千を擇びて哈密の西、三堡、沙棗泉及び東北の塔勒納沁に屯せしめ又各地に分汛を設け以て守望を爲す是より先、哈密の屯田、軍興に因て久しく耕種することを得ず是に至りて札薩克額敏、屯耕を復せんことを請ふ乾隆元年（乾隆元年、  
四一七三六年）清廷之を許し命じて來年の納糧を免し且つ種地の回民に銀萬兩を給す四年、準噶爾和議成る清廷因て駐防兵を減じ唯、哈密所屬地方に二千一百人を置く十三年、肅州金塔寺の回衆、内徙以來、水土に服せず生計艱窘に至れる者あり命じて哈密の餘地に徙し札薩克貝子玉素卜の管に歸併せしむ玉素卜は額敏の子なり十九年、清廷、官を遣はして瓜州に赴き吐魯番の還回を以て旗隊に編み管旗草京、參領、佐領、驍騎校各員を置くこと哈密の例の如くならしむ吐魯番に達爾漢伯克莽噶里克と云ふ者あり世々吐魯番に居り土回の總管たり二十年、大軍の準噶爾を



征せんとせしや定邊右副將軍薩拉爾、瓜州の札薩克佐領愛特瑪特を遣り檄を資して往て招かしむ莽噶里克乃ち回兵百五十を率ゐる將に薩拉爾の軍に赴かんとす道にして布爾古特賊の駝馬を掠むるに遇ひ達せずして還り尋て復た其弟阿里呢咱爾と偕に兵七千を集めて道に就き定西將軍永常が軍を迎へ戸籍千餘を納れて降を請ふ永常命じて仍ほ其の故地に歸牧せしむ因て阿里呢咱爾を遣りて薩拉爾が軍に赴かしめ奔噶里克は吐魯番に歸る涼羅斯台吉噶爾藏多爾濟、輝特台吉巴雅爾、皆額琳哈畢爾噶に游牧し吐魯番に近し之を聞て亦出で、永常に降る巴雅爾、畜産に乏しきを以て告ぐ永常命じて吐魯番に附て耕牧せしめ莽噶里克に檄して之に登種を給せしむ既にして阿睦爾撒納叛し薩拉爾、伊犁より脱れて吐魯番に歸る莽噶里克迎て之に告げて曰く噶爾藏多爾濟等、阿睦爾撒納の擒に就くを俟て將に諾爾布琳沁をして四衛喇特を統轄せしめ更に官軍に抗せんとすと薩拉爾以て報ず清廷命じて遽に信ずること勿からしむ尋て莽噶里克、弟額什里木、子呢雅斯等と偕に入覲せんことを請ふ清廷命じて仍ほ留まりて其の牧地を守らしめ子弟一人を以て代て來らしむ乃ち其子白和卓をして入覲せしめ且つ額敏和卓の例に視へて旗隊に編まんことを請ふ清廷是に於て吐魯番の東界開展よりして西、喀喇和卓に至るまでの地は額敏和卓に屬して之を轄せしめ其の西界伊拉里克より阿斯塔克に至るまでの地は莽噶里克に屬して之を轄せしむ而して瓜州の回民は皆魯克沁に歸る是より先、吐魯番の舊頭目莽蘇爾は實に元裔に係るも徙されて喀喇沙爾に居る定北將軍班第、奏して吐魯番に遣りて舊屬を轄せしめんと欲す軍機大臣等

以爲らく宜しく勘界の定まるを俟つべしと是に至りて莽蘇爾等、終に故地に復することを得ず弟哈什木と偕に葉爾羌に走る（後、大小和卓木の亂後、清廷之を獲、之を京旗に隸せりと云ふ）未だ幾ならざるに噶爾藏多爾濟、巴雅爾等果して叛す寧夏將軍和起、索倫兵百人を携へて往き之を剿し先づ額敏和卓と莽噶里克とに檄し兵を以て開展に來り會せしむ噶勒雜特宰桑哈薩克錫喇、布魯古特台吉呢瑪之を聞き兵千五百を率ゐる偽て來り會し實は巴雅爾に應ず和起、兵の至るを望み莽噶里克を遣り往て偵せしむ還りて欺き告げて曰く我兵なりと和起故を以て疑はず既に至る呢瑪を執て前に立ち莽噶里克後より之を擁す和起、從兵百人と皆之に死し一も脱する者無し額敏和卓、馳て魯克沁に歸り變を告げ又其子素賚肅をして哈密に赴き大軍の援を乞はしむ哈密貝子玉素ト以聞す清廷乃ち安西提督傅魁をして兵五百を選び素賚肅に隨ひ馳て額敏和卓を援けしめ因て命ずらく兵力足らずんば額敏和卓をして傅魁と偕に哈密に回り大兵の到るを俟たしめよと會々白和卓歸りて哈密に至る玉素ト乃ち副將祖雲龍と偕に之を擒す時に謀者あり云ふ噶爾藏多爾濟叛て呢瑪に附き莽噶里克を召す莽噶里克從はず且つ兵を出して額敏和卓を助くと清廷、其の未だ全く叛に從はざるを察し傅魁をして之に告ぐるに白和卓の現に肅州に在り未だ罪を加へられざるを以てせしむ意、莽噶里克をして肅州に來らしめて之を擒にし兵を留めて暫く吐魯番に駐し更に大兵の至るを待て餘賊を討ずるに在り二十二年、傅魁進て鹽池に至る莽噶里克、額魯特の俘二、鹹十二を携て之を迎へ且つ曰く額魯特、我を虐すること甚し故を以て之を擒



献し且つ以て我が子を迎ふと傳魁殊に其功を大にせんと欲し之を執へて献せず遂に莽噶里克及び従者十九人を并せて之を磔にし偽て奏す道にして莽噶里克に遇ひ三十三級を撃斬すと清廷其の誣妄なるを察知し命じて傳魁を械致し其の罪を論じ且つ白和卓の罪を宥し其妻と弟とを吐魯番より取りて之を京旗に隸せしむ莽噶里克既に死す額敏和卓、魯克沁より馳て吐魯番に赴き其の従逆の宰桑十餘人を擒斬す清廷、額敏和卓に命じて徒て吐魯番に居り兼て莽噶里克の屬戸五百餘を管轄せしむ既にして噶爾藏多爾濟等敗れ其の屬回沙呼里、唐噶塔爾等亦百餘戸を携て魯克沁に至る清廷因て命じて吐魯番に隸せしめ額敏和卓をして意を加て防護せしむ而して沙拉斯瑪呼斯二鄂托克の衆、庫爾勒の伯克托克托の牧を掠む沙拉斯、瑪呼斯は準噶爾の鄂托克にして喀喇噶爾の海都河西に在り托克托、其弟阿卜都賚、子色提克を携へ羅普諾爾を繞りて遁れ亦吐魯番に歸す其屬繼て庫爾勒の衆百餘を率て至る皆之を吐魯番に隸せしむ

## 二 大小和卓木の亂

準噶爾の盛なりしや力を以て回部を控制し其の賦税を收め其人を奴僕にし携て北路に赴き以て耕種の役に供し従はざる者は皆之を拘執す回人已むことを得ずして之に従ふ其の清廷と吐魯番を争ふに及び吐魯番の頭目及び回衆を脅して多く喀喇噶爾に徙す是より先、喀喇沙爾に回民無し達什達瓦以て其の昂吉と爲し地、準噶爾に屬す準噶爾既に吐魯番の頭目阿濟斯和卓を喀喇沙爾に徙す然れども其の吐魯

番を離るゝこと甚だ遠からず或は脱して歸らんことを慮り更に烏什に徙す屬從甚だ多く其屬烏什、阿克蘇の間に充滿す阿濟斯和卓死して阿克蘇に葬り其子霍集斯嗣て烏什に居り圖爾璦阿奇木伯克と號す其兄阿卜都伯克及び弟阿卜都里木は皆阿克蘇に在り乾隆二十年(我寶曆五年、四一七五年)大軍、準噶爾の達瓦齊を討せしや瓜州の回兵三百及び哈密所部の兵皆從て伊犁に至る達瓦齊竄る定北將軍班第、使を遣はして分道搜捕せしめ且つ其の必ず南路に奔らんことを慮り霍集斯に檄し哨を設けて之を偵せしむ達瓦齊果して南路に奔り將に喀什噶爾に遁れんとして烏什を過ぐ霍集斯、將軍の檄を受け之を獲て功と爲さんと欲し兵を城外に伏せて待ち偽て其弟を遣り酒と馬とを携へて之を迎へしむ屬人薩里從ふ達瓦齊至る薩里趨て馬を控す達瓦齊驚き弓を引かんと欲す薩里急に刀を以て其弦を斷つ達瓦齊の子羅卜札、後より馳せ至り刀を以て薩里を斫り其膊に傷つく薩里死執して放たず俄にして伏發し達瓦齊父子從者并て七十餘人悉く擒に就く霍集斯之を清廷に献し將に遂に入りて覲見を行はんとす會々其兄阿卜都伯克、葉爾羌、喀什噶爾の回衆に告げ包沁希卜察克の衆と偕に庫車、阿克蘇、賽喇木、多倫諸城を襲ひ舊和卓の子を遣還せんことを請ふ舊和卓とは阿哈瑪特を謂ふなり阿哈瑪特は派罕巴爾の裔と稱し回衆の尊信せる所たり初、明末の時、瑪木特玉素布と云ふ者あり始めて喀什噶爾に至る其父瑪木特額敏は天方教祖の女婿阿里二十五世の孫なりと云ふ瑪木特玉素布、教祖の遺裔を以て回民に臨む喀什噶爾、葉爾羌の回子之を視ること猶ほ天使を視るがごとし阿哈瑪特は其の曾孫にして頗る衆心を得たり故に準噶爾之



を嫉視し誘致して之を阿巴噶斯に禁す二子あり長を布拉呢敦（或は波羅泥都に作る）と云ひ次を霍集占と云ふ同く拘へられて一處に在り是に至りて阿哈瑪特恨を吞て已に死し二子猶ほ存す班第乃ち二子を禁處より出し放て故地に還らしめ因て霍集斯をして布拉呢敦等と偕に往き歸て葉爾羌、喀什噶爾諸城を撫せしむ達瓦齊既に擒に就きて鄂對、色卜提阿勒氏、噶岱默特等の諸回目皆迎へ降る鄂對は庫車の回なり準噶爾劫して伊犁の固爾札に徙す色卜提阿勒氏は烏什の回、拜城の伯克たり亦徙されて伊犁に在り噶岱默特も亦烏什の回、拜城の阿奇木伯克たり霍集斯の達瓦齊を擒にせしや本と并せて葉爾羌、喀什噶爾諸城に長たらんと欲す因て私に副將軍阿睦爾撒納に請ふ所あり大將軍班第密疏之を劾す然れども其の大功あるを以て清廷、班第に諭して過慮すること勿からしむ霍集斯是に於て意を得ずして南路に歸る尋て阿睦爾撒納叛す清廷、額敏和卓を阿克蘇に遣りて宣諭協擒せしむ未だ行かざるに阿睦爾撒納、博羅塔拉に竄入す清廷乃ち和碩特輔國公納噶察を遣り救を資して霍集斯及び阿卜都伯克等に宣諭し阿睦爾撒納の至るを偵して之を擒献せしむ亦未だ行かざるに大小和卓木等、已に阿睦爾撒納を敗る

布拉呢敦兄弟既に釋されて舊部に歸り自から稱して冲和卓木、奇齊克和卓木と爲す漢人之を譯して大小和卓木と謂ふ二人、兵を集めて阿睦爾撒納を敗り因て謂ふ既に準噶爾の羈絆を脱し此時南路、主無し宜しく諸回を統べて之を有すべしと遂に喀什噶爾、葉爾羌諸城に據る大將軍兆惠乃ち奏して副都統阿敏道を遣り往て招撫せしむ小和卓木の黨、時に庫車城に據り士馬を集め糗糧を備ふ阿敏道、鄂對等を隨へて往く中途にして鄂對、大軍を待て偕に進んと請ふ阿敏道從はず滿兵百人を率て庫車城に入り害に遇ふ鄂對還り報す時に兆惠方に額魯特的殘賊を搜剿し未だ回部を討ずるに暇あらず清廷乃ち巴里坤辦事大臣雅爾哈善を以て靖逆將軍と爲して之を討せしむ額敏和卓、領隊大臣たり先づ謀を遣りて喀什沙爾を偵せしめ自から兵を率て托克遜に赴き遂に戶部侍郎阿里袞の軍に從て叛徒を剿し阿思罕布拉克、和什特勒克の路より馳て呼嚕木什和羅に向ひ將に冒色嶺に抵らんとす瑪哈沁の都統萬福を誘殺して哈喇和落に遁るゝに遇ひ之を尾撃す賊皆庫車に奔る阿里袞は庫爾勒に屯し額敏和卓は哈喇和落に屯し使を遣りて之を庫車に索むれども達せず二十三年、哈密札薩克玉素卜、所部の兵を率て大軍に從はんと請ふ乃ち領隊大臣と爲し雅爾哈善の軍に從はしめ額敏和卓を以て參贊大臣と爲し吐魯番に歸りて雅爾哈善と偕に軍議に參せしむ額敏和卓、霍集斯の烏什に居るを偵し雅爾哈善に語て云く霍集斯、勢兩和卓木に均し若し使を遣りて往て之を問せしめば成功或は速ならんと雅爾哈善以聞す清廷之に從ひ命して之を招撫せしむ五月、大軍始て道を分て進剿す瑪哈沁あり庫爾勒の路より出で、大軍の鈇藥を掠む乃ち素賚爾に命して清臺路に駐せしめ額敏和卓をして仍ほ回兵を率て雅爾哈善に從ひ庫車に抵らしむ賊、礮を堞より發し額敏の右額に傷つく諭降書を射て庫車城に入るれども賊應せず阿卜都克勒木等、阿克蘇より來り賊を援く額敏、玉素卜之を敗る霍集占乃ち兵五千餘を率る親から庫車を援く領隊



大臣愛隆阿、半途に迎へて之を敗り其の大讎二を得たり額敏認て以て霍集占の讎と爲す沙雅爾の舊伯克瑪哈默第、子阿三和卓をして降を乞はしめ且つ霍集占の庫車城に入れるを告ぐ清廷、雅爾哈善が備を怠りて霍集占をして城に入らしめしを責め兆惠を以て雅爾哈善に代らしむ鄂對本と庫車の伯克たり庫車の形勢を知悉す故に副都統順德訥に告げ兵を城外の林中に屯せしめ賊至るも敢て争はざらしめ又雅爾哈善に告ぐ賊の竄路を塞がしむ雅爾哈善從はず霍集占果して夜を以て逸し去る天明けて之を追へば已に鄂根河を渡り橋絶えて及ぶ可からず乃ち力を并て城を攻む城固くして下す可からず提督馬得勝、地道を穿て入らんと欲す賊覺りて内より火を以て之を焚く兵死する者六百、既にして守城の回目阿布都、夜、圍を突て逃る餘衆、門を開て降る清廷怒て雅爾哈善等を誅し兆惠に命して師を移し回事を辦せしむ賊、阿克蘇に奔る初、大小和卓木の伊犁より歸りしや霍集斯兄弟を善視し之に倚らんと欲す既にして霍集斯か族強くして已を圖らんことを懼れ其の兄弟子姪を分て各城に居らしめ霍集斯を以て和闐伯克とし其の長子漢咱帕爾を烏什伯克とし阿ト都伯克を葉爾羌伯克とし其子阿布薩塔爾を阿克蘇伯克とす霍集斯も亦大小和卓木の威を懼れ勉強して之に附く霍集占の庫車を援くるに至りて霍集斯を從へて往き阿克蘇に留まりて之を待たしむ是に至りて阿克蘇人、城を閉ちて霍集占を納れず乃ち烏什に奔る霍集斯陰に烏什の諸頭目に約し霍集占を延て入れ酒を飲ましめて之を縛せんと欲す霍集占疑ひ敢て城に入らず霍集斯詐て自から烏什の衆に諭して喀什噶爾に徙らしめんと請ひ遂に城に入り兵を

以て霍集占を拒む霍集占入ること能はず已むことを得ずして葉爾羌に奔る既にして兆惠至りて阿克蘇に克ち霍集斯父子か烏什に居るを偵し檄を馳て降を諭し大軍繼て進む霍集斯乃ち次子呼岱巴爾氏をして來りて降を乞はしむ軍、烏什に抵る霍集斯、戸五千、口二萬餘を献す兆惠之に進軍の路を問ふ霍集斯、大小和卓木の遁て溫都斯坦、喀喇土伯特、巴達克山諸部に赴かんとするを計り大軍直に葉爾羌に赴き之を擒にせんことを勸む兆惠之に従ひ葉爾羌に赴く霍集斯自から軍に従ひ其子漢咱帕爾をして入觀せしめんことを請ひ從弟額敏都霍什提トをして檄を持って葉爾羌に赴き阿ト都伯克を招降せしむ霍集占、霍集斯か内附せるを聞き阿ト都伯克父子及び其の戚族を拘へ霍集斯降ると雖、戮を受くと稱し以て之を劫す大軍、葉爾羌に至る霍集斯固より礮臺坎阱の所在を知る故に一々以て官軍に告げ且つ從兵を勵まして賊を撃つ薩拉阿渾と云ふ者あり葉爾羌に在り其弟穆遜阿渾、烏什に在り霍集占、其黨阿ト都克勒木を遣り阿克蘇よりして穆遜阿渾に達せしむ官軍の擒となる呼岱巴爾氏因て其の戚族を收禁し烏什の回衆に告げて云く驚懼すること勿れと烏什以て事無きを得たり清廷、呼岱巴爾氏に授くるに内大臣を以てして之を嘉す

是時に當りて布拉呢敦は喀什噶爾に據り霍集占は葉爾羌に據り相犄角して以て官軍に抗す葉爾羌城固く兆惠兵少し城を攻むること能はず因て大軍の繼て至るを待ち城外喀喇烏蘇の傍に營を結びて自から固む所謂る黑水營なり兆惠兵八百を分ち副都統愛隆阿をして喀什噶爾の援路を扼せしむ賊騎益々至り



遂に黒水營を圍む兆惠の士馬多く傷つき參贊大臣明瑞も亦傷を受け總兵高天喜等多く陣歿す時に參贊大臣舒赫德、阿克蘇に在り兆惠急を告げ舒赫德飛檄入告す是より前、清廷も亦兆惠、富德兩將軍が久しく外に暴路せるを以て其の勞を愍み靖逆將軍納木札爾、參贊大臣三格を遣はし來て兩將軍に代らしめ索倫、察哈爾の兵を増徴して之に赴かしむ適、兆惠、愛隆阿に檄し阿克蘇に還りて援軍を促さしむ途にして納木札爾、三格等に遇ふ率る所僅に二百餘騎のみ愛隆阿之に止むれども肯はずして遂に進み皆敵手に没す時に富德は北路に在り之を聞き新到の索倫、察哈爾兵二十餘及び北路の軍千餘を率る雪を冒して來り援く二十四年正月、呼爾肅に至り敵五千騎に遇ひ轉戰四晝夜にして葉爾羌河を渡る黒水營を距ること尙ほ三百里、沙磧、水に乏しく氷を嚼みて渴を救ひ又馬に乏しく兵多く歩行す而して大小和卓木が衆益々聚まり殆ど進むこと能はず適、巴里坤大臣里袞、兵六百をして馬二千、駝一千を送りて至らしめ愛隆阿も亦兵を引て至る晩に至りて遙に火光を望む十餘里絶えず以て其の拒戰の地なるを知り横に兩翼を張り大呼して馳せ薄まり直に敵壘を壓し富德の軍と三路より之を蹙む敵、夜中にして官軍の若干萬なるを辨せず皆以爲らく大軍至ると自から相格殺し遂に潰ゆ官軍因て長驅追撃す時に黒水管圍困せらるゝ既に三月、幸に井を掘れば水を得、窖を掘れば粟を得、僅に陥らざりしを得たるのみ兆惠、營を圍むの兵日に減するを見、又遙に鎗礮の聲を聞き援軍の已に近づけるを知り是に至りて兵を勅して圍を破りて出で敵千餘を斬り因て援軍と合し盡く敵壘を焚き振旅して阿克蘇に還る侍

衛布占泰、布魯特に赴て兵を徴す和什克、明伊勒哈と偕に兆惠の軍に赴て降を請ふ和什克は本と和闐阿、喀什噶の伯克たり兆惠之に進兵の路を問ふ和什克か曰く霍集占兄弟、霍罕の額爾德尼伯克と相好し大軍迫らば將に逃れて之に就んとす喀什噶爾の西に三岐路あり請ふ先づ之に據らんと兆惠因て霍罕に檄して霍集占を助くること勿からしめ遂に分道進兵を議し一は阿克蘇より喀什噶爾を攻め一は和闐より葉爾羌を攻めんとす初、兆惠の兵を葉爾羌に進めしや先の鄂對をして侍衛噶布舒、齊凌札布等と偕に和闐六城に赴かしむ額里齊城に抵る伯克、城を以て献す其餘の五城も亦之を聞き相繼て降る鄂對、諸伯克の使をして書を奉して葉爾羌の官軍に赴かしむ時に黒水營已に圍まれ和闐の軍書通せず鄂對、赴援せんと欲すれども賊の和闐を襲はんとするを恐れて果さず使をして馳せて阿克蘇の參贊大臣舒赫德に告げ諸路の兵を集め分て喀喇烏蘇、和闐を援けしめ又兵千を集め羊と糶とを備へて自から禦賊の計を爲す既にして敵果して額里齊、哈喇哈什兩城の間に往來す鄂對、諸伯克に檄して固く拒かしめ六城伯克の名及び戸畜の數を書して阿克蘇に達す既にして黒水營圍解く富德の軍往て和闐を援け和闐の圍も亦解く霍集斯前に和闐伯克たり因て霍集斯を以て總管和闐六城の阿奇木伯克と爲す富德、道を霍集斯に問ふ霍集斯詳かに之に對へ且つ和闐六城の伯克を遣りて喀什噶爾に赴き布拉呢敦を招降せんことを請ふ然れども亦事成らずして或は已に累せんことを慮り未だ敢て遣らず額敏都霍什提卜等、私に霍集斯か阿卜都伯克を招降せしを以て霍集占に告ぐ霍集占怒りて阿卜都伯克、阿卜都里木兩人を殺し大軍



の將に至らんとするを察し布拉呢敦と俱に城を棄て、奔る霍集斯、富徳の軍に従ひ葉爾羌より之を尾撃し阿爾楚爾に至る霍集占、伊西洱庫爾に通る霍集斯、鄂對と偕に讒を執て呼て曰く降らん者は生きんと回衆、聲を聞て皆至り降を乞ふ者萬餘人、霍集占之を阻すれとも得ず乃ち巴達克山に通る富徳、鄂對を遣り降衆を携て喀什噶爾に歸らしむ額敏和卓、喀什噶爾の麥方に熟せるを見て其子茂薩を遣り先づ馳て城に入り糧を收めて軍食を接濟せしむ兆惠乃ち茂薩をして喀什噶爾の阿奇木伯克の事務を辦せしめ額敏和卓を遣りて葉爾羌に赴き其衆を撫せしむ大小和卓木既に竄し巴達克山を襲て之に據らんと欲す其會長親から出で、迎へず怒て其使を斬る巴達克山の會長素勒坦沙、兵を興して之を拒ぎ大小和卓木を擒にす然れとも未だ來りて清廷に獻せず霍集斯乃ち使を遣はして博羅爾、幹罕の二部を招降せしめ且つ素勒坦沙に告て云く若し獻出せずんば當に軍を移して之を討ずべしと素勒坦沙乃ち霍集占が首を函にして來り獻ず其の布拉呢敦の死屍は已に人に盜み去られ後年に至り始て獲て其妻子と偕に來り獻すと云ふ是に於て回疆全く平らぐ

是時に當りて有功回子甚だ多く鄂對は阿克蘇に在り玉素布は烏什に在り額敏和卓は葉爾羌に在り其子茂薩は喀什噶爾に在り而して霍集斯、功最も高くして和闐六城を總管し功を恃みて稍々驕る清廷、其の舊地に置くの便ならざるを思ひ其の入朝を請へるに因て遂に留めて京旗に隸せしめ獨り其の幼子托克托索不を阿克蘇に遣回して墳墓を守らしむ阿克蘇の伊什幹伯克頗拉特、阿奇木伯克たらんことを觀

觀し回衆を唆使して已を薦めしめ且つ鄂對の罪を訐告す舒赫德之を斥く然れとも清廷之を調して葉爾羌に阿奇木伯克たらしめ以て相安せしむ鄂對葉爾羌に抵る葉爾羌の伊什幹伯克阿卜都喇伊木等、又鄂對が酒を嗜み且躁妄にして職に稱はざるの狀を計き首に阿渾の名を列す清廷乃ち阿渾を禁して妄に政事に干豫することを得ざらしむ則例に阿渾の政事に預かることを禁する蓋し此に始まる後、阿卜都喇伊木、阿奇木の職を得ること能はざるを以て叛を謀り事覺はれて誅せらる其後又額敏和卓を許く者あり參贊大臣舒赫德其譴妄を察して之を斥く故を以て事無きことを得たり初、兆惠の喀什噶爾を定めしや其屬、大小十城、七村莊、一萬六千餘戸、數十萬口、葉爾羌二十七城村、三萬戸、十餘萬口、其餘各城、皆準噶爾の舊例に照らして貢賦を清廷に納れしむ二十六年、回部三十一城、其の大小を計り分て三等と爲し各々阿奇木伯克以下の職を設け回子を管理せしめ大城には參贊若くは辦事を駐し或は領隊を駐し參贊は全疆（但哈密、吐魯番を除く）を管轄し辦事は一城の事を管し事繁き處に之を置き事簡なる處には唯々領隊のみを置く然れとも當初參贊の駐處は未だ必しも一定せず時に隨ひ事に觸れて屢々移り始、阿克蘇に駐し後、喀什噶爾に移り又烏什に移る唯々其間喀什噶爾に駐せるを多しとするのみ而して其兵は皆換防にして陝甘二省の官兵若くは北路の伊犁、烏魯木齊の駐防兵を派して期を限りて更代せしむ其の回子の伯克たる者は七品より三品に至り大伯克は年班を分て朝貢せしめ皆清廷の約束を奉行し復た生殺を專にすることを得ざらしむ



案するに伯克の名稱、職掌、回疆則例に據るに阿奇木伯克は城村大小の事務を總轄し伊什罕（或は伊什幹に作り又伊沙噶に作る）伯克は阿奇木伯克に協同して事務を辦理し都爾噶伯克は阿奇木伯克の首領官となり噶雜那齊伯克は庫藏錢糧を掌り商伯克（或は尙伯克に作る）は糧務を管理し密圖瓦里伯里は田園房屋の買賣稅契を管理し明伯克は回子一千名を管し玉資伯克は一百名を管し鄂勒沁伯克は數十名を管し阿爾巴布（或は阿爾把布に作る）伯克は派差催科を管理し克時克雅喇克伯克は商稅を徵收し巴濟格爾伯克は稅務を稽查し色特爾伯克は市廩を整齊し行販を管理し巴咱爾伯克は市集の細務を管理し哈資（或は哈子に作る）伯克は刑名を總理し斯帕哈資伯克は回子頭目の詞訟を分理し喇雅哈資伯克は小回子の詞訟を分理し帕提沙布伯克は巡邏偵緝を司り兼て獄務を管し密喇布伯克（或は密拉布に作る）は水利を管理し巴克瑪塔勒（或は巴克瑪塔爾に作る）伯克は瓜果園圃を管理し訥克布伯克は營造を管理し匠役を稽查し伊爾哈齊伯克は城濠の修理及び開山鑿道の事を管理し喀喇都管伯克臺站軍器を管理し哲博伯克は喀喇都管伯克を協同辦理し什城勒（或は什呼爾に作る）伯克は驛館の供給を管理し喀嚕爾伯克は卡倫を管理し哈什伯克は採玉事務を承辦し阿爾屯伯克は採金事務を承辦し密斯伯克は採銅事務を承辦し密斯伯克は採銅事務を承辦し摩提色布（或は摩提沙布に作る）伯克は回教の經典を管理し教務を整飭し民事に預からず雜布第默克塔布伯克は専ら教習念經館務を管す又大清會典にも伯克の職掌を載せたるも此の如く詳ならず第一編述ふる所甚だ略せり故に

今此に之を補ふ

### 三 道光の亂

乾隆三十年（我明和二年、西一七六五年）烏什の辦事大臣素誠、父子淫を宣し其下之に倣ひ多く回婦伯克の妻に姦宿す小伯克賚哈木圖拉（或は賴黑木圖拉に作る）の妻、素誠に姦せらる而して阿奇木伯克阿卜都拉恣妄にして又回人に側目せらる素誠の子、將に京に回らんとす回人を役して行李を負はしむ甚だ苦なり賚哈木圖拉乃ち衆の悦ばざるに乗じ之を煽して亂を作し夜、倉庫を焚劫す素誠、阿卜都拉卜偕に城に登て拒守し兇饑甚だ盛なるを見、憂懼措かず自殺して死す阿卜都拉走て變を阿克蘇に告げしむ阿克蘇の辦事大臣卡塔海馳せ往て之を剿せんとす清廷、伊犁將軍明瑞に命し往て剿せしむ阿卜都拉、女を賚哈木圖拉に納れ以て死を免れんことを冀ふ賚哈木圖拉の妻、怨言を出す賚哈木圖拉、其女を納れずして阿卜都拉を殺す明瑞尋て烏什に至り悉く之を平げ因て喀什噶爾參贊大臣を烏什に徙し以て之を鎮せしめ烏什の新城を築て阿克蘇の兵を移駐せしむ是の小亂を経て、清廷の邊臣を任する最も謹慎を加へ三年一交代以て永く遠任に居らしめず而して邊臣も亦少しく懲りて大に戒しめ人々自愛を知りて復た叛亂の事あらず然れとも日久しくして漸く弛ひ選任多く其人を得ず邊臣、換防を以て利藪と爲し其の屬下小官等、服食日用の物に至るまで皆之を阿奇木に責め阿奇木も亦官に供するの名を借りて小回より苛斂す回民故を以て皆恨む而して各城の大臣は相統屬せず伊犁將軍は遠く隔りて北路に在り故を以て稽



查に由無し是に於てか遂に道光六年の亂となる

七五〇

初、大小和卓木の亂に布拉呢敦の子薩木克、巴達克山より逃れて放罕に匿る薩木克三子あり其の第二子を張格爾と曰ふ經を誦し福を祈るを以て部落に傳食す部落、其の和卓木の孫なるを以て財を集めて之に饋り厚く之に奉す張格爾因て回衆を煽動す適々南路の參贊大臣斌靜、荒淫にして頗る衆心を失す嘉慶二十五年(我文政三年、四一八二〇年)八月、張格爾突として布魯特人數百を糾合し來て邊境を寇す領隊色布微額兵を率て之を撃ち追て霍爾罕莊に至る張格爾、騎を棄て、逃る斌靜匿して報せず擒する所の百餘人は悉く斬て以て口を滅す清廷之を察知し伊犁將軍慶祥に命し往て查勘せしむ頗る斌靜の罪跡を查出し遂に褫職拿問し永芹を以て之に代ふ而るに永芹も亦撫馭を善くせず張格爾屢々近邊を騷擾す回民多く其の耳目たり故に官兵往て剿すれば已に遠く颯りて得可からず道光五年(我文政八年、四一八二五年)九月、領隊大臣巴彥圖、兵二百を率ゐる塞を出つること四百里、其の不意に出で、之を掩ひしも不幸にして遇はず遂に游牧せる布魯特人の妻子百餘を縱殺して還る布魯特の酋汰列克之を恨み所部二千を率ゐる張格爾を助けて報復を圖り巴彥圖の兵を追ふ巴彥圖の兵、毫も紀律無し山谷の間に窘蹙せられて皆殲す賊勢益々盛なり清廷乃ち慶祥を以て永芹に代ふ慶祥亦誤て奸人阿布都拉を以て腹心と爲し腹心反て敵人の耳目となる張格爾盛々人を遣りて内地の回子を煽惑し回子皆亂を思ふ六年六月、張格爾、安集延、布魯特の衆五百を率ゐる俄に喀什噶爾に至り其先和卓木の瑪維爾に禮拜す瑪維爾とは其の祖廟を謂ふなり城を距ること

と僅に八十里、慶祥乃ち協辦大臣舒爾哈善、領隊大臣烏凌阿をして兵千餘を以て之を剿せしめ四百餘人を殺す張格爾等退て瑪維爾の内に入る瑪維爾牆垣三重、周り五里、官兵之を圍む乃ち圍を衝て出で各地の回子を鼓動す是に於て回子所在響應し數日間にして衆、萬を以て計るに至る慶祥盡く各營の卡倫兵を收て城に還り分て三營とし烏凌阿、穆克登布等をして之に將たらしめ迎て渾河に戦ひ先後皆陣歿し官兵賊に隔てられて城に入ること能はず東、阿克蘇に奔りし者七百人、張格爾、伊犁の援兵速に集まらんことを恐れ使を遣はして助を放罕に求めしむ云く四城破れば其の子女玉帛は共に之を分ち、又喀什噶爾を割て以て之に與へんと放罕の酋長之を喜ぶ萬人の衆を率て至る既にして張格爾、喀什噶爾の援兵無きを知り頗る前言の失を悔い將に其約に背かんとす放罕の酋怒り自から所部を督して城を抜き以て其有と爲さんとす城下らず放罕の酋、腹背敵を受けんことを恐れ兵を率て去る張格爾、人を追て其衆に啗はしむるに利を以てす其衆爲めに歸り投する者二三千、張格爾以て親兵と爲す時に喀什噶爾、英吉沙爾皆圍まれ葉爾羌、和闐、通路悉く絶ゆ伊犁將軍長齡兵四萬を發して之を剿せんことを奏請す清廷是に於て長齡に揚威將軍を授けて之を征せしめ山東の巡撫武隆阿をして吉林、黒龍江の驍騎三千を率て關を出てしむ是より先、陝甘總督楊遇春に命し陝甘二省の兵五千を統て馳て哈密に赴かしむ是に至りて偕に長齡の參贊となり阿克蘇に會して進剿せしむ八月、喀城遂に陥り西四城繼て皆陥る賊、其兵と民とを殺し解舍を燬き將に渾巴什河に至らんとす阿克蘇を去る八十里、烏什、庫車



皆戒嚴す參將王鴻儀、兵六百を領して之を都齊特に拒て戰歿す賊、渾巴什河に逼る阿克蘇城中、兵千に滿たず其の二百を分ちて河を扼せしむ葉爾羌の回衆五六千、將に河を渡らんとす時に達凌阿は庫車より巴哈布は喀喇沙爾より先後相繼て來援し且つ兵を分て河を渡らんとするの敵を破る敵、隊を分て上游より宵渡り城外二十餘里に逼る達凌阿、兵を回して救援し阿克蘇辦事大臣長清も亦數十騎をして鼓譟せしめて東より至る敵乃ち退て南岸に走り自後敢て復た河北を窺はず東四城是に因りて虞無し十月、大軍の阿克蘇に集まる者萬餘、分れて渾巴什河の南北に屯す賊三千、柯爾坪を扼す柯爾坪は進兵の要道たり長齡、提督楊芳をして之を破らしむ而して和闐の伯克伊敏等、衆二千を聚め賊帥を縛して獻す既にして氷雪道に塞かり兵進むことと能はず和闐復た敵に陥る七年、武隆阿、哈朗阿、楊芳等をして一萬一千を率て先鋒たらしめ長麟、楊遇春等一萬六百を率て之に繼ぎ巴爾楚克に至り兵を留むること三千、以て南路より繞り襲ふの敵を防かしむ時に張格爾の衆二萬、洋巴阿特に屯し五萬と號し橫岡五六里に據る長麟、楊遇春、中軍に將たり武隆阿、左軍に將たり楊芳、右軍に將たり以て之に當り三路進み攻む敵、岡に據りて下り壓す大軍、路を分ちて岡を奪ひ追斬萬餘、生擒三千餘、賊首邁曼愛散等五人皆殲る官軍士氣百倍し遂に沙布都爾城を破り阿瓦巴特城に逼る賊十餘萬、夜、吉林、索倫の勁騎各五百を遣り間道より敵背に出で賊壘を壓して軍し旦日、突として其背を搗く賊大に潰ゆ安集延の敵帥阿瓦邁、瑪底等を殲す軍、喀什噶爾に逼り渾河の北岸に陣す賊、其衆を悉くし城を背にして一戰せん

張格爾  
運  
ず  
れて  
存  
ら

と欲す河を阻して陣を列し二十餘里に亘る鼓角般々、頗る聲勢を張る會、西南風大に起り木を撼し沙を揚げ呎尺昏晦、殆と辨ず可らず長齡其の四面敵を受けんことを恐れ將に退くこと十餘里にして營し霧る、を待て進戦せんとす楊遇春肯かずして曰く此れ天、我を贊くるなり敵、我が兵の多寡を辨せず又我が即ち渡るを虞らず且つ客兵速に戦ふに利あり持久に難しと乃ち索倫の驍騎千を遣り繞りて下游に趨て賊を牽制せしめ自から大兵を牽る晦冥に乘り急に上游を渡り上風に據り礮を放て賊を撃つ敵勢、風沙と相并せ百千萬の兵驟に至るが如し賊陣亂る官兵盡く渡れば風休み天霽る乃ち勢に乘りて賊陣に突入す賊、土崩し軍、衆にして整はず官兵勝に乘りて喀什噶爾に逼る張格爾先づ遁れて在らず僅に其の甥姓及び安集延の渠帥、從逆の伯克等を獲然れとも殺傷等無く生擒四千餘なり清廷仍ほ元兇の兎脱を致し、を咎め期を勉して捕獲せしむ楊遇春乃ち進て英吉沙爾を復し葉爾羌を復し更に楊芳を遣りて兵六千餘を以て和闐の殘賊を剿せしめ賊五千を其の城外に砂り玉努斯を擒斬し遂に和闐を復す長齡又楊遇春、楊芳をして兵八千を率て路を分ち塞を出て、之を掩捕せしむ而るに謀報一ならず或は云ふ張格爾、拉克沙に走ると或は云ふ達爾瓦斯に走ると乃ち兵を遣りて追跡せしめ又其の部落に諭して擒獻せしめ楊芳は阿賴に屯し楊遇春は色勒庫に屯して以て待つ南北相離る、甚た遠く楊芳孤軍最も深く入り浩罕の衆二千餘の來り襲ふに遇ひ慶戰一晝夜、歩々營を結び陣を嚴にして險を出で僅に以て脱することを得たり是に於て清廷、楊遇春を召還し楊芳を以て代て參贊たらしめ官兵八千を喀什噶

楊遇春



爾に留め其餘は皆楊遇春に隨て凱旋せしむはより先、清廷、善後事宜を定めんと欲し將軍參贊をして均しく籌議を行はしむ意、西四城を以て土司分封の例に倣はしむ可きや否やを問ふに在り而るに長麟は奏す布拉呢敦の子阿布都里、曾て乾隆中に在りて拘へられて現に京師に在り其をして歸て西四城を總轄せしめば以て内夷を服して外患を制す可しと武隆阿も亦奏す其の兵餉を無用の地に費さんよりは若かず東四城に歸併せんには西四城の兵費の半を須るずして固きこと金甌の若くならんと清廷、西四城を棄つることを欲せず因て長麟、武隆阿を切責して革職留任せしめ直隸總督那彥成に欽差大臣を授け回疆に前往し長麟に代て以て善後事宜を籌畫せしむ時に張格爾飄零して西域に在り諸部に傳食し生計日に窘しむ而して清廷又賞格を懸けて張格爾を擒にする者を購る長麟乃ち密に反間を縱て云官軍撤退し喀什噶爾既に空虚となり諸回、首を翹げて皆和卓の至るを望むと張格爾是に於て又步騎五百を率ゐる官軍の歲除、備を弛べしに乘し潜に喀什噶爾を襲はんとす長麟、楊芳、兵六千を備て以て待つ張格爾先づ阿木古城に入る白帽回は奔竄し黑帽回は之を拒がんと欲す張格爾始て術中に陥りたるを覺り折回して卡外に出てんと欲す楊芳兵を率て三路より喀什噶爾蓋山に至り斬擊殆ど盡く張格爾三十餘騎を隨へ僅に脱し馬を棄て山に登る副將胡超等之を擒す時に道光七年十二月二十七日なり那彥成是に於て善後事宜を籌議し奏章前後數十篇、回疆各城の積弊を嚴革し各大臣節制糾察の法を定め其の廉俸を増し其の携春を許し又印房章京の選を重んじ伯克の保舉を慎み其の資格を定む回疆の則例章程是に於てか

張格爾生擒せらるる  
那彥成の善後事宜  
意見

煥然、安内制外の法頗る密なり時に張格爾の子布素普、年甫て六歳、尙ほ浩罕に在り那彥成其の後來の禍根たらんことを恐れ必ず之を得んことを欲し間を遣りて購致せんと欲す清廷、其の功を貪り費を開かんことを慮り九年六月、命して京に回らしむ那彥成既に京に還りて安集延の衆、其の通布を絶ち卡外に逐出せられしを恨み報復を圖りて官軍を襲ふ官軍敗績す卡外回衆萬餘人、進みて喀什噶爾、葉爾羌兩城を圍み回莊を焚掠す那彥成の子容安、時に伊犁の參贊大臣たり兵を領して赴援し阿克蘇に抵り敵を畏れて敢て進まず迂路を繞りて烏什に至り賊と遇はず賊、意を逞くして去る清廷怒りて容安を獄に下し那彥成も亦此に坐して革職せらる而して長麟、欽差大臣を以て又楊芳、哈朗阿等と偕に馳て軍に至り浩罕に檄諭し其入貢通布を許し事以て平定することを得たり是より以來、葉爾羌を重しと爲し參贊大臣を葉爾羌に駐せしめ又巴爾楚克に綠營の總兵を設け屯田を開く乾隆の制是に於て小變せり

後、道光二十五年(我弘化二年、四一八四五年)三月、布孜爾と云ふ者あり卡外より入り來りて英吉沙爾を侵す布孜爾は張格爾の後妻帶來の子、母に依りて張格爾の家に養はる張格爾の擒に就きしや其母、喀什噶爾に在りて戮せらるる時に布孜爾尙ほ幼し奈曼愛曼に奔り其の姨母に依りて長す年二十六、陰の母の爲めに讎を報せんと欲し假に海達達爾を裝ひ乞食念經し喀什噶爾に赴き蘇勒檀の瑪雜爾に至り念經慟哭し觀る者此か爲めに感動し遂に阿渾阿布都色邁提と相知り因て陰に偕に亂を謀り英吉沙爾、喇什噶爾、葉爾



羌各城を襲はんと欲し回衆二百餘人を率ゐる守兵を殺して入る各城、備あり意を逞くすることを得ず尋て布孜爾、縛に就き餘黨、雪山一帯に向て竄れ去る事、數日にして定る幸に大亂に至らずして止む然れども此後清廷の政令漸く弛廢し後十五年にして又同治の亂あり

#### 四 同治の亂

同治回匪の亂は陝西に始まり延て甘肅に及び新疆に終る天山南北兩路の亂にあらずして回教徒の亂なり洋人稱して東干の亂と謂ふ或は云ふ東干は敦煌の訛轉にして回族の曾て敦煌に居りし者亂を作すと然れども回鶻の黠曼斯に敗られしや甘涼瓜沙諸州均しく其の流寓する所たり獨り敦煌のみならず而して陝西同州の回は唐の肅宗の時よりして既に在り何ぞ敦煌と謂はんや之を要するに陝西、甘肅、新疆の回、本と同種族、同族同教、一時相煽し並ひ起て亂を作し、のみ昔、元の太祖、西域を征し多く天方教國を服し元代遂に教士を用ゐ回々司天監、回々藥物院、回々軍匠萬戶府を設け又回々國子監、を置く是に於て天方教益々大に行はれ回族皆之を奉せざる者無し明代を経て以て清朝に至り乾隆中、葱嶺以東の回族皆清朝の版圖に入る而して甘肅省の循化廳の回子馬明心始て新教を唱へ其徒蘇四十三、舊教の徒と相争ひ百餘人を仇殺す清廷乃ち其の亂本を原ね蘇四十三を誅し因て西安提督を固原に移し固原總兵を河州に駐し以て回衆を制遏す河州は回族多きの地なり是より清廷嚴に新教を禁して以て其の騷亂を防ぐ然れども同教屢々相讎殺し械鬪の案件曾て止む時無し道光の末に至りて政綱廢弛し粵匪の

亂大に起り勢甚だ猖獗にして撲滅す可らず以て咸豐の末に至りて河南の巡撫嚴澍森、陝西の回勇六百を募り河南に赴て防守せしむ未だ幾ならざるに澍森、湖北に調任せらる因て回勇を挈て陝西に歸り之を散遣す團練大臣張芾之を招て以て流寇に備ふ同治元年(我文久二年、四一八六二年)二月、粵匪陳得才、捻匪に合して武關に入り陝西大に震ふ張芾益々義勇を募りて自から守る回勇の募に應ずる者多し既にして粵匪去りて回勇の悍なる者、漢民と相善からず遂に大亂に至る是に於て陝西鼎沸して甘肅の回も亦同教の故を以て相繼て蠢動す二年、甘肅全境、殆ど乾淨土無し清廷之を剿して陝西稍々安し然れども新疆の回、鼓動せられて亦蜂起し復た收拾す可らず蓋し回人の亂を思ふこと久し此に至て機に乘りて同時に起れるのみ三年四月、庫車の回子馬澂等、潜に界外の匪徒田拉滿、蘇拉滿等と結びて亂を作さんことを謀り遂に黨を率て反し庫車城を焚く辦事大臣薩凌阿、英吉沙爾の領隊大臣文藝、葉爾羌の幫辦大臣武仁布等之に死し家屬皆殉す札薩克郡王愛瑪特も亦脇迫を受け屈せずして殺さる阿克蘇辦事大臣富珠理、檄を飛して援を伊犁將軍に請ふ援兵未だ至らざるに阿克蘇も亦陥り富珠理舉家自焚して死す東四城繼て失し喀喇沙爾辦事大臣依奇哩も亦之に死す烏魯木齊都統平瑞之を聞き兵を發して蘇巴什に至る其兵、回子多し遂に中變して盡く賊に没す而して烏魯木齊も亦亂を免るゝこと能はず九月、喀什噶爾の回目金相印、徒衆を糾合し布魯特の回子に勾結し葉爾羌、和闐の各城を攻て之に陥る參贊大臣覺羅奎棟、和闐領隊大臣慶英以下五十餘員皆難に殉す駐防兵弁、復た照類無し尋て哈密の回も亦廂關を焚燬



し把總高萬清を殺す札薩克郡王伯錫爾、屬回を率て奮撃し賊始て西に竄る清廷之を獎し伯錫爾を以て  
 幫辦大臣と爲す四年、金相印等更に安集延の會長阿古柏を推して帥と爲す安集延は放罕八城の一たり  
 露人、放罕を併せて塔什干城に據る安集延獨り免れて露に歸せず阿古柏能く衆を用ひ諸部の餘燼を收  
 め自から和碩伯克と稱す吐魯番以西の回子皆之に應じ號して帕夏と爲す部衆甚だ盛にして西洋の鎗礮  
 を印度より購買し安集延に保す三月、阿古柏遂に英吉沙爾を陥れ領隊大臣托克托布等皆之に死す閏五  
 月、哈密台吉怕他諾什、諸回を煽誘し首として賊衆萬餘を従へ漢城を攻陥し辦事大臣札克當阿之に死  
 す是の時に當りて南路各城皆陥り獨り喀什噶爾の漢城、園中に在ること一年餘、守備最も困しみ援兵  
 至らず七月、亦陥る辦事大臣奎英、幫辦大臣福珠凌阿等、父子妻妾皆火に赴て自焚し俱に死する者官  
 員三十人而して守備阿步雲等數千人皆敵に降る是より回疆復た一人の清廷の爲めに守る者無し唯々哈  
 密郡王伯錫爾、漢城陥ると雖、協力恢復の心あり五年四月、伯克夏斯林を巴里坤に遣りて兵を請ひ巴  
 里坤の爲めに道を開き糧を通せんとす巴里坤の總兵阿瑄、游擊凌祥等をして兵二千を率て之に赴かし  
 む伯錫爾、途にして兵食を携て師を竊らふ凌祥進て大に賊を破り追て哈密以西に至り速に大捷を獲て  
 數百人を斬り勢益々奮ふ而して夏斯林も亦來り會し進て回城を攻め搜斬數百、漢城の賊、風を望て逃  
 逸し立どころに哈密の兩城を復す阿瑄是に於て伯錫爾が爲めに一時陷沒の罪を免せんことを請ひ兵勇  
 を哈密に駐す伯錫爾月、餉糧を給し又糧數千石を饋りて巴里坤の飢を濟ふ清廷乃ち文麟に授くるに哈

阿古柏を  
 推して帥  
 とす

前頁

密辦事大臣を以てし凌祥を哈密協に署し安肅、敦煌、玉門の兵千餘を領せしむ十月、西路の回、大舉  
 して哈密を犯さんことを謀る時に文麟、涼州に在て兵勇を募る伯錫爾、凌祥に請て急に要害を扼せし  
 む凌祥未た行かず賊先づ至り經に五堡に入る凌祥、倉猝兵を出す錫伯爾亦回兵馬步數千を撥して之を  
 助く三堡に至る戰少しく勝つ凌祥意驕り明日遂に潰ゆ凌祥、巴里坤に遁れ兵勇九百餘、慶戰二日夜、  
 力竭て覆没す錫伯爾、回兵二千を率て赴援し途にして賊に遇ひ陣亡七百、錫伯爾執へらる其の姪孫帕  
 仔爾、往て兵を巴里坤に請ひ途中又虜となり皆殺さる哈密又陥り巴里坤危きこと累卵の如し六年二月、  
 阿瑄又芮林、趙萬海等を遣りて往剿せしめて哈密を復し餘黨を五堡に破り張和をして勇を率て駐紮せ  
 しむ七年(我明治元年、四一八六八年)二月、哈密又犯され張和之に死す阿瑄、伊勒屯急に趙英傑、田樹青、趙璞等に  
 命して會剿せしめ城西に戰ふ適、孔才馬隊を率て來り横に賊陣を衝く賊大に破る尋て又至りしも協領  
 達三布、副將芮林等合撃して之を破る七月、文麟、敦煌より進みて哈密に駐す東路の防軍是より始て  
 起色あり成祿、都司梅振清、守備莊義慶等をして回目蘇海林と偕に西路に赴て招撫せしむ吐魯番に至  
 りて賊の獲る所となり終る所を知らず八年八月、哈密幫辦大臣景廉、任に抵る西路の回數百騎、五堡  
 に至る文麟、檄を孔才と營官張炳、蔣富山とに飛し馬步五營を率ゑ馳て之に赴かしむ回匪百餘を斃し  
 匪首科有冲を擒にす尋て騎回三四千又來り犯す孔才等撃て之を敗る九月、回衆來て二堡を攻む孔才、  
 馬步三營を率て東門より出て張炳、蔣富山、諸將を督して南北の門より出て三面より夾撃し殺傷甚だ多



かりしも相持して下らず適、文麟、恒齡等をして六營の兵を以て糧を押送して至り隊を分ちて助戦せしめ大に之を敗る回衆潰れて復た集まり夜又營を襲ひ克たずして去る魏忠義其の必ず再たび至るを察し密に伏を設て待つ賊果して至る忠義等馬歩八營を督し張炳、趙萬海、礮隊を率ひ左右轟撃し戰酣なるとき伏兵齊く出づ會、風雨暴かに作り羣回自から相踐踏し死者算無し官軍も亦營官姚鳳林等數十を亡す忠義等進て賊巢を搗き又六百餘を斃す賊來て屍を斂む復た之を敗る賊の哈密を犯すこと前後數次、然れども其の敗餽、未だ曾て此の如く甚きはあらざるなり九年十月、馬仲、吐魯番を擧げて帕夏に降る帕夏遂に烏魯木齊を取り匪魁妥得隣の營號を削り馬仲を以て阿奇木と爲し諸事を總管せしむ帕夏既に烏魯木齊に入りて大に居民を殺し其餘を南路に移す回子も亦堪ふる事能はず多くは逃げて自から歸る馬明、其黨を率て古城に據り帕夏と相持す帕夏曾て馬明の兄馬元を殺す故を以て馬明之を衝み景廉の委員桂洪元と結び共に帕夏を圍る十二年、景廉、烏魯木齊都統たり軍を古城に進め黑龍江營總伊勒和布、定西營統領田錫禮を烏魯木齊に急派し勁騎三百を率て徐學功を赴援せしめ斬獲頗る多し帕夏遁れて吐魯番に還る是時に當りて甘肅の回匪漸く剿討せられ匪魁白彥虎、大股の匪黨を携へ西寧より奔りて關を出で哈密に竄し各屯を劫掠す七月、魏忠義各營を率て之を禦き伏に中りて破れ營官劉珍、郭天保等陣亡し哈密殆ど危し景廉、吉爾洪額、沙克都林札布、孔才等をして援兵二千を督して古城より馳せ救はしめ文麟も亦兵を出して迎へ剿し慶戰時を移し賊四五百を斃す然れども賊、夜、回城を陷

る尋て官軍城西より攻め入り賊、城を棄て、奔る白彥虎道を繞りて吐魯番に通る明春、哈密の幫辦大臣に擢てられ健銳九營を率て駐守す白彥虎更に烏魯木齊の回匪に勾結し瑪納斯に竄入す是歲九月、左宗棠肅州に克ち關内復た回匪無し清廷乃ち金順に命じて景廉に會し烏魯木齊を規復せしめ張曜、床慶に命じて馳て哈密に赴き文麟、明春に會して協剿せしめ各軍の兵餉は陝甘總督左宗棠をして接濟せしむ金順、額爾慶額、桂錫植各、馬步隊を率て前後、關を出で張曜も亦馬步十四營を率ひ進て哈密に屯す時に景廉欽差大臣たり新疆の軍務を辦し關外諸軍、皆之に隸す而るに金順、景廉と各、意見あり清廷密に以て左宗棠に詢す左宗棠乃ち金順の任用すべきを保奏す光緒元年(我明治八年、西一八七五年)三月、清廷遂に景廉を召還し左宗棠に授くるに欽差大臣を以てし金順をして烏魯木齊都統たらしめて之に副とし以て新疆の軍務を督せしむ時に朝議粉々、多くは遠征の費多きを以て南路八城を棄て帕夏を封して外藩と爲し専ら海防を嚴にせんと欲す宗棠、其の不可を陳し且つ先づ力を北に致して功を南に收むるの策を建つ清廷、其議に従ふ是に於て奏して前の陝西の巡撫劉典を起用し蘭州に至らしめて以て後事を之に託し二年二月、宗棠旗を祭て啓行し三月、肅州に至り嘉峪關を出で戈壁を渡る水泉、千人に供すること能はず諸軍に令して逐次遞進せしめ漢中鎮の譚上連、前鋒たり寧夏鎮の譚拔萃之に次ぎ陝安鎮の余虎恩又之に次ぎ皆西寧道劉錦棠の節制を聽かしむ錦棠は劉典の姪にして湘軍の總統なり四月、進て哈密に駐し軍糧の畢く集まるを俟て將に大舉剿討を行はんとす白彥虎、大軍の關を出でしを聞き移て古牧



地に據り土阿を糾合して各地に分踞し南、帕夏と連結し以て官軍に抗せんとす六月、錦棠、古牧地を圍む帕夏、夷目阿托愛をして騎賊を率て來り援けしむ余虎恩之を破る阿托愛遁れ去る遂に烏魯木齊の總化城及び偽王城を抜く偽王城は妥得璘の築きし所なり帕夏又援兵五千をして來り救はしむ烏魯木齊敗ると聞て敢て進まず嶺上に留まる是時に當りて帕夏、托克遜城に在り三城を築て自から衛り北、嶺上を守りて劉錦棠の軍を拒き南、吐魯番を守りて張曜か哈密の軍を拒く白彥虎、于小虎等、南山の小東溝に據り四出して禾を刈り糧を備へ繞りて官軍の後にでてんことを圖る錦棠往て剿す白彥虎、于小虎等男女大小數萬、跟蹤として驚走し皆托克遜に併入す左宗棠乃ち張曜か嵩武軍に檄し奇克騰木よりして關展に向はしめ徐占彪か蜀軍をして巴里坤、古城諸山の敵を搜りて木壘河に出て張曜と相挟みて吐魯番を攻めしむ既にして大雪、山を封し諸軍、嶺を踰えて南すること能はず來春雪融するの後を待て大舉規復せんことを期す帕夏、白彥虎と間に乗りて達板新城を南山間に徙し大通哈をして之を守らしむ帕夏の次子海古拉、日に萬人を役して偽王府を造る雄闊異常なり帕夏、白彥虎、馬人得等をして吐魯番を守らしめ海古拉をして托喇遜を守らしめ自から喀喇沙爾に居て之か策應を爲す三年三月、氷已に解く劉錦棠は烏魯木齊より出て嶺を踰えて達板城を攻め張曜は哈密より進て吐魯番に向ひ孫金彪をして五營を率て先づ進み徐占彪と鹽池に會せしむ錦棠已に達板城を攻めて之に克ち人をして大に呼はらしめて曰く異裝の者を縛せば賞あらんと是に於て争ひ縛して來り獻し回匪の大小頭目、殆と一も

脱する者無し其の大通哈愛伊德呼里及び胖色提六人、玉子巴什六人、皆擒獲せらる大通哈は其の大通管にして胖色提は管官、玉子巴什は哨官なり其餘の官弁甚だ多し大通哈、胖色提等乃ち帕夏に代て和を請ひ白彥虎を縛し南八城を還して罪を謝せんことを冀ふ錦棠因て其をして書を帕夏に與へて之を招かしめ又安集延及び各城の回子等數千を釋し悉く衣糧を給して遣歸す而して嵩武軍の孫金彪等も亦關展、魯克沁、連木沁台、勝金台を攻め盡く其の城壘を破り兩軍、喀喇和卓に會す徐占彪、孫金彪皆軍を引て吐魯番に至る白彥虎已に遁れて在らず殘黨猶ほ殊死して闘ふ乃ち馬軍を麾き兩旁より抄襲す賊陣大に亂る羅長祐、湘軍を領し力を合て之を攻む馬人得、嵩武軍に詣りて降り各回、地に跪て命を請ふ孫金彪悉く宥して誅せず遂に吐魯番の滿漢兩城に克ち分て之に駐す錦棠急に馳すること百里、托克遜に抵る海古拉も亦先づ遁れ守賊、火を擧げ糧草彈藥を燒き城を棄て、走る錦棠、軍士をして城に入て火を滅せしめ二萬餘人を降す托克遜三城皆下る是に於て南路八城の門戶漸く開く白彥虎、人畜を掠め村莊を焚き回衆を脅かして俱に奔る回衆皆恨みて官軍を翹望す帕夏時に庫爾勒に在り日夜憂苦遂に藥を仰て死す海古拉之を昇て西行し將に庫軍に達せんとす其兄伯克胡里半途にして之を遮り海古拉を殺す帕夏始、次子海古拉を愛し衆頗る之に附き稱して小帕夏と爲す伯克胡里之を嫉み以て此に至る既に海古拉を殺し因て南境を保して自立して王と稱す然れとも回衆別に白彥虎を推して主と爲し庫爾勒を守る白彥虎乃ち開都河（即海都河）の西岸に據り河を壅て官軍を遏む水溢る、こと百餘里、初、放



罕の露國に併せらるゝや安集延は露國に附かず英人視て以て其の藩屏と爲し以て露人の印度を伺ふを防止す故に英人最も安集延を疵護するに意あり是に至りて安集延の爲めに駐英の清國公使郭嵩燾に説く清廷之を左宗棠に詢る宗棠以て不可と爲し七月、兵を進め紆折して開都河東に至る白彥虎、敵す可らざるを知り庫車に奔る九月、錦棠、喀喇沙爾を收復し余虎恩、庫爾勒を收復す因て急に馳すること六日、行くこと凡そ九百里、遂に庫車を復す左宗棠乃ち善後局を設けて回衆を安撫し附く者益々多し白彥虎、拜城に奔る拜城の衆、關を閉て之を拒み錦棠の軍至れば則ち城を開て降る錦棠因て方友升を留めて之を鎮撫せしめ頻に追て之を敗り阿克蘇に通る城中の回十萬餘人、嚴に備て官軍を待つ遂に阿克蘇を復し哈密郡王邁合默特之母を護、送て其部に歸す白彥虎、烏什に奔り安集延の衆をして葉爾羌に集まらしめ以て官軍の勢を分つ錦棠、安集延を追はず専ら白彥虎を追ひ黃萬鵬等をして烏什に趨かしめ遂に烏什を復す一月中、馳驅すること三千餘里、東四城皆下る然れとも伯克胡里猶ほ喀什噶爾に據り西三城を保す唯々和闐の伯克尼牙斯獨り隙に乘りて葉爾羌を圍み遙に官軍の聲援を爲す伯克胡里怒り五千騎を率て呢雅斯を攻む呢雅斯敗れ官軍に降る伯克胡里、和闐を奪て之に居る前の喀什噶爾守備何步雲、章京英詔及び滿漢兵弁、賊中に陥れる者數百人、相率て漢城を守り官軍を迎ふ安集延の衆、回城に在り白彥虎と約して偕に漢城を攻む伯克胡里之を聞き和闐を棄て、英吉沙爾に奔り回城に併入す十一月、錦棠、三路に分て軍を進め正兵は阿克蘇より巴爾楚克を経て進み奇兵は烏什より布魯

特の邊を繞り皆進止を余虎恩に聽かしめ以て喀什噶爾を取らんとす錦棠は巴爾楚克、瑪納爾巴什に在りて葉爾羌、和闐の衝要を扼す官軍、喀什噶爾に至る賊の候騎之に路に遇ひ馳せ歸て城に呼て曰く大軍至れりと回衆驚き潰え禁すれとも止むること能はず伯克胡里、白彥虎、路を分て皆逃れ其黨を留めて城を守らしめ官軍の追撃に備ふ余虎恩遂に之を敗り賊の元帥王元林を俘にす漢城の何步雲大呼して聲勢を張る回城の衆、西門を開て走る遂に喀什噶爾城に克ち黃萬鵬は西北に出で、白彥虎を追ひ余虎恩は正西に出で、伯克胡里を追ひ于小虎、馬元を俘にす白彥虎、伯克胡里及び安集延の會阿里達什等、皆露國に竄入す錦棠、賊を驅りて葉爾羌に至り遂に之を復し又進みて英吉沙爾を復す而して董福祥も亦和闐を復す董福祥は本と回教徒にして始、叛に従ひ後、官軍に歸順せし者なり（聞く團匪の亂に甘肅軍を率て北京に入り外國公使館を圍みたりし者は董福祥にして當時北京城内の回教徒は回教徒たるの故に皆此軍に加勢したりと）是に於てか西四城も亦皆下り帕夏の妻及び其子引上胡里、邁底胡里等皆俘となる而して于小虎、馬元、麻木里、金相印父子皆市に磔死せられ悍黨一千百六十人皆誅に伏す同時に擒せられし者、英國商官（領事か）一人、隨從の商賈九人、乳目（日爾曼か）洋操教習二人、商三人、阿刺伯亞三人、溫都斯坦三十餘人、鄂勒推帕二十餘人、克什米爾一千七百餘人、巴達克山三千餘人、巴爾替一千餘人、科拉普百五十餘人、哈普隆二百五十餘人、悉く宥して誅せず英人、乳目人は文を給して國に返らしむ南八城是に於て皆平く



南路各城既に復して北路伊犁、猶ほ露人の佔據する所たり而して阿里達什、四年十月を以て露境より邊に入り纏頭回を糾合し喀什噶爾を襲はんと謀る劉錦棠之を玉都巴什に敗る奈曼の回目庫彌什、伏を設けて阿里達什を殺し并て其の餘黨を殲す左宗棠、露國の遁逃の藪となり邊患の釁を開かんことを憂へ總理衙門に飭して露人と商議せしめんことを奏請す是に於てか崇厚出て、露國に使す約未だ成らず五年正月、安集延、布魯特の回子、邊に寇す錦棠擊て之を烏帕爾に敗り二千餘人を斬る其餘は露境に通る既にして崇厚、露國と約し伊犁の西界、南界を割て露に讓る是に於て議論沸騰し左宗棠自ら出て、哈密に屯し伊犁を規復せんことを請ふ明年、清廷、駐英公使曾紀澤をして露に赴き和約を再議せしむ（事は前編に詳なり）是時に當りて劉錦棠、署欽差大臣たり新疆の軍務を總辦し張曜之に副たり八月、錦棠の軍、哈密に至り十月、張曜、喀什噶爾に移駐し西四城の邊防を總轄し嵩武軍を分て英吉沙爾に屯せしめ董福祥は和闐、葉爾羌に屯し羅長祐は阿克蘇、瑪納爾巴什に屯し譚上達は葉和の西城に屯し余虎思は烏什に屯し譚和義は吐魯番に屯し譚拔萃は庫車、喀喇沙爾に屯し以て疏虞を戒しむ明年正月、約成り左宗棠、京に回りて軍機大臣を授けられ會國荃、陝甘總督に擢てられ病に因て故郷に還り譚鍾麟之に代る劉錦棠、欽差大臣たり譚鍾麟と籌議し新疆の制を改めて悉く郡縣と爲す初、左宗棠議す新疆總督一員を設けて烏魯木齊に駐せしめ新疆巡撫一員を設けて阿克蘇に駐せしめんと是に至りて劉錦棠以爲らく新疆州縣僅に二十餘處、自から一省と成し難し然れとも之を甘肅の節制に歸

せば未だ不周の處あるを免かれず請ふ江蘇省建置の例に仿て甘肅巡撫一員を添設し烏魯木齊を以て省治とし哈密以西南北路の道府州縣を以て之に隸せしめ烏魯木齊提督を移して喀什噶爾に駐せしめ舊來の參贊、辦事、領隊の各大臣は一律に裁去せんと清廷、其議に従ひ南路東四城に兵備道一人を設けて阿克蘇に駐せしめ阿克蘇を以て溫宿直隸州と爲し拜城縣を以て之に隸せしめ喀喇沙爾、庫車に各撫民同知一人を置き烏什に撫夷同知一人を置き皆之を阿克蘇兵備道に統轄せしめ又西四城に兵備道一人を設けて喀什噶爾に駐せしめ喀什噶爾を以て疏勒州と爲し疏附縣を以て之に隸せしめ葉爾羌を以て莎車州と爲し葉城縣を以て之に隸せしめ和闐州と爲し于闐縣を以て之に隸せしめ英吉沙爾に撫夷同知一人、瑪納巴什に水利撫民同知一人を置き皆之を喀什噶爾道に統轄せしむ其後稍しく更改あり溫宿、疏勒、莎車各州を升せて府と爲し喀喇沙爾にも亦一府を置き焉耆府と稱す哈密以西天山南路是に於て共に四府、一直隸州五直隸廳あり近時又州縣を添設し益々治理に就く然れとも其の大體に於ては大變更無し此を近日の天山南路の情形とす



蒙古通志 終

蒙古通志既成九年、未附劄劄、世莫識者、余亦置而弗顧、嘗謂是書有用歟、決不埋沒、若無用歟、深藏篋底、葬于蠹魚腹中、可也、奚必多勞手民、今茲忽有人來請公諸世、余笑曰、此或不爲無用耳、獨憾時勢頓與昔殊、頃者蒙古之事、不必俟是書而明、曩日將軍都統參贊辦事之任、唯滿蒙大員當之、漢官不得與聞、滿蒙人大抵無學不文、以故游牧一切之政、除二三官書外、概無紀述、當是時、漠南北之云爲、殆近暗中摸索、誰能辨其真哉、今也不然、四方探歷之士、好奇冒險、投步蒙古者、日有所聞、如余之同人、亦萬里贏糧者數輩、邇則臨潢水、窮遼源、遐則入河套、絕大漠、天山陰山、不止聞之耳而視之書已、東口西口、皆足涉其地而目驗其實矣、然則雖有是書、果何所益、且夫西鄰光宣之際、勢屬弩末、民氣囂張、若滔天水、庸懦握柄、束手無術可施、如殖民實邊之策、全不得不傾聽漢人之議、於是乎或以鞏固邊防、或以安插飢黎、或以開發利源、或以啓悟蒙民、出洋學生首倡于外、經世論客續和于內、函牘交錯、獻策售說、一時官場視爲終南捷徑、利竇已開、孰甘居後、雖片能



薄技一孔之士、莫不攘臂爭先、前此出塞僅有直隸山東二省邊民而已、至此南人北人、赴之如鶩、搢紳簪筆者往焉、握籌居奇者往焉、苦工力作負耒荷畚而移者、亦且歲以萬數、墾荒種田、開路採礦、蒙民遷避、漢族盤估、牛羊下括之地、化爲禾黍離々之區、氈幕帳廬之鄉、轉見上棟下宇之家、昔之窩棚、今則爲燒鍋、爲油房、爲舖戶、昔之三戶聚、今則爲府、爲縣、爲商埠、五七年來東蒙情形之變、有如此者、而是書所志、往々不免有小出入、竊恐覽者暗乎昔而惑于今、雖然、大勢不移、蒙古仍是蒙古焉耳、善讀是書者、必知余言不誣矣、若夫使是書能有用與否、固在其人、余如彼何、

大正五年二月紀元節

編者自跋

# 名稱讀法

## 第一章

- 戈壁錫壁 吳必 噶爾拜瀚海 喀爾喀部 額魯特部 厄魯特 阿拉善 額濟納 愛曼蒙
- 科爾沁蒙語 郭爾羅斯 杜爾伯特 札賚特 札魯特 奈曼 放漢
- 翁牛特 阿魯科爾沁阿蘇科爾沁 巴林 克什克騰克西克騰 土默特 烏珠穆沁 浩齊特齊齊
- 阿巴哈納爾 阿巴噶阿爾塔 蘇尼特 茂明安 烏喇特烏拉 鄂爾多斯 土謝圖汗
- 車臣汗 札薩克圖汗 賽音諾顏賽因諾顏 卡倫 唐努烏梁海 塔爾巴哈台塔爾巴哈台 瓦
- 拉 衛拉特 和碩特 準噶爾 土爾扈特 阿爾泰 額爾濟斯 雅爾 唐古特
- 科布多 輝特 蒙兀 蒙兀 蒙兀 鐵木真特穆津 韓難 阿拉巴圖 吉里吉思 哈密
- 巴里坤 烏魯木齊 吐魯番 喀喇沙爾哈拉沙爾 葉爾羌 喀什噶爾 和闐 英吉沙爾英
- 噶沙爾 烏什 阿克蘇 庫車

## 第二章

名稱讀法



安巴堅阿保機 迭刺夷離董 大詳穩 朱里真 完顏 按出虎 阿骨打 索倫  
 達呼爾 索勒 忽魯 謀克 猛安 蒲里衍 阿里喜 唐古部族 助魯部族  
 烏魯古部族 石壘部族 崩骨部族 計魯部族 索特本部族 蘇謨典乳 耶刺部乳 霞  
 馬乳 木典乳 咩乳 胡部乳 慶忽 官骨子 枯倫湖 泰楚特赤烏特 和林  
 即 喀喇和林 達魯花赤 探馬赤軍 兀良哈 喀喇沁 札薩克 塔布囊 西時圖庫  
 倫 小庫倫 賽爾烏蘇 庫倫 烏理雅蘇台 達爾罕王 昌圖額爾克 卓索圖 昭烏達  
 哲里木 多倫諾爾 察哈爾 伯都訥城 哈特發門 伊通門 赫兒蘇門 布爾圖門  
 法庫門 喀喇河屯 烏蘭哈達 林丹汗 額哲 布爾尼 察克達章京 烏拉齊 薩拉  
 齊 托克托 和林格爾 昆都 丹噶爾 巴燕戒格 哈士庫圖爾 巴暖 策凌 彭  
 福 貝勒 貝子 札哈沁 阿桂 錫伯 庫爾喀喇烏蘇 精河 烏河 沙畢納爾 霍  
 爾果斯 巴彥岱 塔勒奇 齋爾 巴爾楚克 伯克 關展 瑪納斯 喀喇巴爾噶遜  
 木壘 古城 奇台 瑪喇巴什 昌吉 濟木薩

第三章

鄂博 牛录 章京 台吉 札薩克 哲里穆 錫林鄂勒 烏蘭察布 伊克昭  
 鄂博 牛录 章京 台吉 札薩克 哲里穆 錫林鄂勒 烏蘭察布 伊克昭

巴爾和屯 罕阿林汗山 齊々爾里克 畢都理雅 賽音濟雅哈 烏訥恩素珠克圖 青色特  
 奇勒圖 巴啓色勒奇勒圖 綽羅斯 察罕諾們罕 阿勒台烏梁海 阿勒台諾爾烏梁海 明  
 阿特鄂托克

第四章

開齊 布克申 庫什固爾 格登山 燕齊齊 呼圖壁 塔西河 吉布庫 塔勒納沁  
 蔡巴什湖 噶爾丹 阿睦爾撒納 霍集占 默霍爾噶順 索果克 奎屯台 呼圖克圖  
 堪布喇嘛

第五章

成吉思汗 青吉斯汗 哈布圖哈薩爾 布格博勒格圖 鄂楚因 達延車臣汗 阿爾坦汗 博羅  
 濟吉特氏 濟拉瑪 烏梁罕氏 索汗 綽羅斯氏 翁汗 恭博必塔氏 濟農 諾顏  
 台吉 塔布囊 額駙 福晉 派噶木巴爾 讓罕慈特 瑪木特玉素布 阿奇木伯克  
 伊沙噶伯克 商伯克 哈子伯克 密喇布伯克 帕察沙布伯克 茂特色布 木特窪里伯克  
 都官伯克 巴濟吉爾 阿爾巴布 布理 巴克瑪塔爾 明伯克

名稱讀法



第六章

木蘭 哲布尊丹巴胡圖克圖 結塔爾 痕都斯坦 赫色勒郭勒 哈達 固倫公主 和碩公主 江米巷 耶今の交民巷 俄羅斯館

第七章

克魯倫河 喀魯倫河又蓋陶河 巴爾城巴爾和屯 土拉河 汗山汗阿林 抗愛山 烏蘭固木 鄂敦他拉 木素爾嶺 舒爾漢 鄂爾多 蒙古包 阿勒坦鄂爾多 希爾黏 卜爾黏 庫爾黏 阿爾黏 阿拉克 阿拉占 氣格 宰桑 阿渾 海蘭達爾 查達 徹伯爾 帕克斯巴巴喇密特 阿難達喇嘛 宗喀巴羅下藏札克巴 瑚必勒罕呼爾勒罕 根敦珠巴 達賴喇嘛 刻珠尼馬曲結嘉勒布格布 班禪額爾德尼 拉薩 札什倫布 索諾木札木磋 阿巴岱 圖蒙肯 丹津喇嘛 諾們汗 蘇爾第其 額爾克孔果爾額哲 蘇泰福晉 瑪哈喇佛 額墨 偉微喇嘛 顧實汗 藏巴汗 曼珠師利文珠 普通鄂齊達喇達賴 成衰察理多爾濟 噶爾旦西時圖 博碩克圖汗 騰吉思海 阿刺布珠爾 黨色爾騰 烏巴錫跳布札克 伊魯格勒道場 念洞禮經 塔爾寺塔兒寺 札薩克達喇嘛 金本巴本巴江瓶なり

第八章

畏吾兒 畏兀兒 木速兒蠻 答失蠻 也理可溫 旭烈兀 木刺夷 報達 哈里發 求赤拙赤 欽察部 奇卜察克 伯勒克 合贊 貝杜 蘇爾灘 蘇爾統 撒馬爾干 帖木兒 阿里 十葉教 可蘭 莫洛 馬納茲 瑪爾爾 入則 摩提沙布 雜布提摩克塔布 圖爾奇語 帕爾西語 和爾魯語 托忒 烏珠克 哈薩克 哈特 陀梨克 揚普奇塔 普 哩薩拉 魯斯納默

第九章

舍利孫 羅布涼爾 羅普諾爾 巴達克山 達爾諾爾 哈魯魚 檣欄樹 烏拉草 吉蘭泰池 達布孫諾爾 活多々諾爾 巴顏諾爾 科羅卜 阿克布 哈什山 哈爾海圖 呼巴海 索果爾 峽郭羅鄂博 奇爾阿爾 雅圖溝 密爾岱 玉隴哈什 哈拉哈什 納喇薩喇 巴爾呼 普爾錢 騰格 噶爾布爾 帕特瑪 查拉克 尼布楚 雅克薩 尼果賴 露人名 巴爾呼 索額圖 露人名 薩那特衙門 露國官衙 霍尼邁拉呼卡倫 愛理黑龍江地名

名稱讀法

興安嶺 噶札爾山 貝爾色山 達巴罕嶺の麓、漢人多く大塚と稱す 索岳爾濟山 烏喀那山